

まどか「お願い…カービィ！」「ぽよ！」

めぐるうさぎ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

星が落ちてきたその日、彼女はピンクの悪魔と出会った。  
お声を頂いたのでPixiv様の方でも投稿していきます。

## 目次

夜空の輝きの下で	1
1. 闇に隠れる影	5
2. 鳥かごの魔女Battle!	12
3. 一難去つてまた一難	17
4. ハチャメチャが押し寄せてくる	23
5. ピンクの悪魔と白の悪魔	30
6. 地球のお菓子は美味しい	36
7. 薔薇園の魔女Battle!	41
8. バマミとの出会い	45
9. 魔法少女体験コース第一弾	51
10. お菓子の魔女Battle! 前編	56
11. お菓子の魔女Battle! 中編	62
12. お菓子の魔女Battle! 後編	69
13. 佐倉杏子との出会い	75
14. 打倒! ワルプルギスの夜!	82
15. ハコの魔女Battle! 前編	87
16. ハコの魔女Battle! 後編	94
17. 忘却の魔法少女	100
18. なくしてしまった記憶	105
19. 魔法少女達の集結	111
20. 敵か味方か:	117
21. 魔法少女と魔女	123
22. ほんの少しの僅かな闇	131
23. 悪夢の始まり	138

24.	絶望に沈む人魚姫	145
25.	悲しき結末	151
26.	寂しがり屋の少女は月下に眠る	158
27.	マミさん救出大作戦!	164
28.	マミさん救出大作戦2!	171
29.	佐倉杏子と巴マミ	177
30.	絶望を抱いた少女に希望を!	184
31.	明かされる真実	192
32.	ハッピーエンドに終わらせる為に	198
33.	なんて事ない日常	204
34.	見滝原の魔法少女	211
35.	この宇宙を守る者との戦い	218
36.	銀河にねがいを	227

## 夜空の輝きの下で

少女は暗闇の中、空を見上げていた。視界いっぱい広がる美しい夜空に見惚れてしまっていたのだ。今の時刻はもう12時を回っており、人々はもう眠りにについている時間。

少女：鹿目まどかももうパジャマへと着替えており、眠りにつこうとしていたのだが、そんな中カーテンの隙間から漏れる幻想的な光につられてついカーテンを開き、窓から顔を覗かせていた。

「綺麗…こんな綺麗な星空見たの初めて…」

夜の闇に染まったこの町を優しく照らす月明かりと今にも落ちてきそうな星々を見て、彼女はそう呟く。生まれてこの方14年あまり…この星空は彼女がこれまで見てきた中で最高だと言える程に素晴らしいものだった。

少しずつ流れていく時間を忘れ、その景色に見惚れていたまどかだった…が、ふと星空の中で一つの変化が訪れている事に気づく。

「あれ…あの星ってあんなに大きかったかなあ？」

美しい星空の中で一際強い光を放っていた星が先ほどよりも少し多くなったような気がした。その輝きも心なしかどんどん強くなっているようにも思える。

「気のせい…じゃない…!?!」

少しずつ…少しずつ大きくなっていくその星にこれはただ事ではない…そう子供ながら感じとったまどかは思わず立ち上がって窓を開き、ベランダへと出る。

その間にも星は大きくなる…というよりかはどんどんこちらに近づいてきているというのが正しかった。

「うそっ！も、もしかして隕石!？」

輝きを放ちながら落ちてくる飛来物は微かにピンクの影が見える。あれがもし…もしこの町に落ちてきたらどうなるだろうか。それほど大きな物ではないように見えるが、たとえば小さな物であっても町に甚大な被害を及ぼすと新聞やテレビでも言っていた。

それを思い出したまどかは咄嗟にその場にうずくまって目を閉じる。こんな事をして落ちてくる隕石の前には何の役にもたたないであろう。しかし、この少女にできる事はこのくらいの事しかなかった。

「……………あれ?」

最悪の事態も考えて、いつ世界が消滅してもいいようにと衝撃に備えていた少女だったが、いつまでたっても何かが起こる気配がなく、おそろおそろと目を開く。

視界に飛び込んできたのは何の変哲もないこの町の風景だった。目をこすって何度も確認してみるがいつもの見慣れた見滝原の町である。

「もう寝よう…多分疲れてるんだよ、私」

と振り返り、ベランダから部屋へ戻るまどか。その時《ぼびゅっ》という何か柔らかかなものが潰れたようなそんな音がどこからか聞こえてきた。

その音が聞こえてきたのは彼女のベッドで暗闇の中、目を凝らして見るとそこで何かが蠢いているのがわかった。何だろうと思ったまどかが部屋の明かりをつける。すると、そこにいたのは…

（っ——っ）っへ…ぽ…よ…

ピンク色の丸い胴体にぱっちりと開かれた大きな目と口。そのボールのような胴体から生える短い手、赤い足と可愛らしい生き物がベッドの上でぐったりと倒れていた！

「えっ!? ええくくくっ!?」

突然の出来事に大声を出して驚いてしまうまどかだったが今は深夜だという事を思い出し、自分の口をパツと抑える。すーはーすーはーと何度も深呼吸をしようやく落ち着いた彼女は倒れているピンクの生き物におそるおそる近づいてコミュニケーションを図ってみる。

「ね、ねえ…大丈夫?」

「っ　　」　　っくグウウウ…」

謎の生き物からの返事はなかった。しかし、そのかわりに返ってきたのはグウくというお腹が鳴る音。もしかしたらと思い、部屋の中に置いてあったおやつのだーナツと飲みかけのお水をそつと差し出す。謎の生命体は一瞬顔を上げたかと思うと…

「っ?く?c) モグモグ

「わっ! もう食べちゃった…お腹がすいてるの?」

まるで吸い込んだかのように消えていったドーナツとお水を容器ごと食べてか、彼は少し元気を取り戻したように見える。

しかし、まだぐったりとしていたので彼女は「冷蔵庫から何か持ってくるから待ってて…」と言い残し、部屋からそつと飛び出していく。

これがカービィとの出会いの始まりであった。星のカービィと呼ばれている彼との出会いは鹿目まどかと窓から一連の流れを見てい

たもう一人の少女の運命を大きく変える事となる…



## 1. 闇に隠れる影

(妖精さん…なのかな。お星様の妖精)

寝静まった家族が起きないようにそつと冷蔵庫からプリンやおにぎり、ソフトクリーム、etc:彼が喜びそうな物を持ってきたまどかは美味しそうにそれらを食べる謎の生物の事をそう思っていた。

瞬く間に食べ物を食べ終えたピンクボールはゆつくりと立ち上がる。回復アイテムそして…

( つ???) つ くはあい!

その場でぐるりと一回転!そして、口いっぱいに空気を吸い込み、膨らんだかと思うと…

「と、飛んだくくくつ!」

なんと、その場で浮かび上がって見せたのだ!彼は短い手足をばたつかせてこの部屋の中を飛び回ったり、その場でホバリングして動きを確認しているような素振りを見せた。

c ( ? ~ ? ) つフワフワ

「わあああ…夢じゃないんだよね、これって…」

ピンクの生き物が自分の部屋を縦横無尽に駆け回る姿を見て、これは夢ではないのか?そう思ったまどかは自分の頬を軽く引っぱたく。

「い、痛い…って事は!」

ちゃんと痛みを感じた事で夢ではないと悟った彼女は飛び回る謎の生き物に向かって再び声をかけてみる事にした。

「ね、ねえ！私の言葉わかる？私…鹿目まどか！」

（ つ?? ） つ へカービィ！

空気を吐き出して降りてきた彼はまどかの言葉に頷いて見せ、舌足らずな声でカービィと名乗った。

コミュニケーションが通じる事からどこからきたのとか何をしにここにくだとか色々聞いてみる…もそのいずれも返答は曖昧なもの。

結局色々聞いてわかったのは彼の名前とかなり大食らいという事だけであった。

そんな中、食べ物を食べた事により満足したのか、柔和な笑みを浮かべていた彼の顔つきがふいに鋭いものになった。そして、キョロキョロと周りを見渡したかと思えば、窓の方へ向いて外をジッと見る。

（ つ?? ）

「どうしたのカービィ？」

不安そうなまどかの声にハッと振り向いて笑顔になったカービィは感謝を伝える為だろうか…短い手を彼女に向かってブンブン降ると彼は大きくジャンプ。

そのまま窓の外に出て行ってしまおう。慌ててベランダに出るまどかだったが、カービィの姿は闇にとけ、もうどこにもいない。

「カービィ…」

しばらくはカービィの姿を探していたまどかだったがいつまでも見つからなかった為、諦めてベッドへ潜り込む。

カービィは何故急に出て行ってしまったのだろうか…そんな事を考えながら彼女は眠りに落ちていった。

……

……

…

どうしてカービィは彼女の家を急に飛び出したのか：それは外から部屋を覗く何者かの視線に気がついたからである。姿こそ巧妙に隠していたものの、数々の戦いを潜り抜けてきた彼にとっては見つかる事は容易な事。

視線に気づき、飛び出してきたピンクボールに驚きつつもその影はすかさず屋根から屋根へと高速で移動して逃走する。それをカービィはグルメレース感覚で追いかけていた。

しばらく深夜の見滝原の町の中でその者と鬼ごっこが続いたが、とうとうその人物を真っ暗で人っ子一人いない自然公園へと追い詰める事に成功する。

「ふうん、なかなか素早いピンク玉ね…」

月明かりが映し出すのは長く伸びた髪をなびかせ、顔面スライディング着地するカービィを見下ろす一人の少女。

彼女が見せるその余裕から追いつめていたつもりのカービィはどうやらその少女におびき出されていたらしい事に気づく。

(っ?~?) っへムッ…カービィ!

ピンク玉と呼ばれた事が気に入らなかつたカービィは少し怒った様子で自分の名前を告げる。その者はカービィの言葉に鼻を鳴らす

とどこからか取り出した物を彼に向けた！

それは彼女のような少女が持つべきものではないであろうヤクザや警官の武器、拳銃であった。安全装置を抜き、真剣な顔つきで構える様から本物である事がわかる。

「…あなたは何者？あの子に近づいて何が目的なの。死にたくなければ答えなさい」

（…奴<sup>インキュベーター</sup>らの亜種…それとも魔女の使い魔か…いずれにしてもこんな事は初めてよ）

銃を向けられているカービイだったが、それを意に介する事なく付近をキョロキョロと見渡している。公園内の遊具や植えられている植物など、彼がいた星では物珍しいものばかり…彼はどうしても気になってしまっていた。そんな脳天気なカービイに彼女は面食らいつつも彼の足元に銃弾を放つ。

「次はないわ。私の質問に…っ!？」  
シ（っ?）

拳銃を構えてカービイを脅していた彼女はふいに言葉を切ったかと思うと顔をしかめて舌打ちをする。カービイも周囲の異変に気づいたようでのほほんとした顔から真剣な顔つきに変わり、辺りを見渡していた。

すると、彼らが立っていた地面は大きく揺らぎ目に見えていた景色も瞬く間に変化していく…

「これは鳥かごの魔女結界…こんな時に…!」

c（?o?）っへうわああ

まるで宇宙空間と言うべきであろうか。二人はいた所はあつという間に草木が生い茂る自然公園から緑、黄色、赤といったキューブが

浮かぶ謎の空間に変わってしまった。

カービイが見渡してみる限りその空間内はとてつもなく広く果てがない。辺りには色とりどりのキューブと辺りを警戒している謎の少女の姿しかなかった。

「この魔女は本体の力は弱いけどこの広い結界の中のどこに潜んでいるかはわからない…」

そう言った黒髪の少女は無邪気にくるくと回って遊んでいるカービイを見る。その姿はまるで好奇心旺盛な子供のようであり、敵意の欠片もない彼に彼女も毒気を抜かれてしまう。

C (???) c (へぼよぼよ)

「しらみつぶしに回っていくしかないか。はあ…あなたはもう後でいわ」

遊んでいたカービイだったが、ハッと黒髪の少女がいた事を思い出し、彼女の方を見る。黒髪の少女はこの謎の空間を足早に進んでいた。

先ほど魔女だの結界だの聞き覚えのない言葉を言っていた。事情を知っていそうだし、どこか放っておけない雰囲気醸し出す彼女にカービイもついていく事に決めて彼女の隣まで行く。

ε || ε || ε || (???) ) つ へはあい！

「…ふん」

彼が歩く度にぷよぷよと間延びした音がこの空間に響いていた。それにはクールに振る舞う少女の顔も次第に緩んでいく。その時。

っ

(?・o?) (???)

っ

「…なに？」

何かわからない事があるのか、先ほどから足を執拗につついてくるカービィに彼女は不機嫌そうに返事を返した。

何が何だかさっぱりといった様子のカービィは同じ目に遭っているというのに冷静に状況を判断し、すぐさま行動に移す彼女に説明を頼んでいるようだった。

「…本当にわからないの？」

(っ???) っへぽよ！

自信満々に頷いてみせるカービィ。少女は溜め息を吐いていたが、なんだかんだ説明をしてくれた。

魔女↓やらかしたデデデ大王！魔女結界↓デデデ城！使い魔↓ワドルデイ！

彼女の話を手軽に考えるとこうだろうか？カービィはわかったと言わんばかりに頷いてみせる。それを見る彼女のパープルの瞳は揺れていた。

(カービィ…あなたはいつたい…?)

c (?~?~?) ミミへはあい！

何かを発見したカービィ。彼は両手を頭上に突き出してダツシユする！カービィが行く先には人間の男性のマッチョな肉体を持つ化け物がポージングをとり、立っていた。頭は鳥というのがチャームポイントだろうか？

「あれが使い魔よ。ここは私が…」

c (???) っへぽよ！

カービィは前に出ようとする彼女を短い手で制すると口を大きく

開き…

## 2. 鳥かごの魔女 B a t t l e !

(っ、o、c) ミシミ

「なにこれ…」

ピンク玉が逃げようとする鳥マツチョコを凄い勢いで吸い込む…黒髪の少女の目の前では今、そんな光景が繰り広げられていた。

逃げる鳥マツチョコと鳥かごの魔女の使い魔は羽根をばたつかせて必死に逃げようとしている…のだが、まるで某掃除機ダイソンが汚れを吸い取るかのような吸引力を見せているカービィの口に使い魔の身体はどンドン吸い込まれていく!

ものの数秒もしない内に使い魔は口の中に吸い込まれ、それをカービィが飲み込んでしまった。すると…

「カービィの姿が変わった…!?鳥…?」

y y y y y y

!! (っ?~?) !へウイング!

ピンクボールだった彼の身体からは色鮮やかな鳥の羽根が生え、インディアン風の羽根飾りがカービィの頭に着けられていた。

彼は吸い込み飲み込んだ敵の能力を「コピーする能力」を持っているのだ!その力を用いたり用いなかったりで数々の星を救ってきたのはまた別のお話…

y y y y y y

!! (??) !!へぼよ!

u u

「えっ?カービィ…きやつ!」

彼は羽根を広げると…大地を蹴って驚いている彼女を掴み、空高く舞い上がった!

宙に浮かぶキューブをかわしながら勢いに乗って軽快に進んでい



くカービィ。その姿はまるで大空を高く翔けぬけていく荒鷲をイメージさせるのだが、どこかお間抜けな顔がそれを台無しにしている。

「…上から探すというのはいいい案だけど、急に掴んで飛ぶのはやめてほしかったわ。カービィ」

y y y y y

c ( | | ) つへぽよ…

カービィに両肩を持たれ、ぶら下がっている形になっている少女が少し怒っているような雰囲気だったので素直に謝るカービィ。悪意など微塵もなく、ただただ謝るカービィに少女の表情は無表情ではあったものの、出会った時のトゲトゲしきは消えていた。

「…あの子と同じ…あなたは面白いわね…」

c (? o ?) つへふわあ？

「ほむら…私は暁美ほむらよ」

少女が急にほむらと名乗った事にキョトンとしていたカービィ。だが、仲良くなれた事は良いことなので彼女の言葉に《はあい!》と微笑み返す。

y y y y y

!! ( c ? ~ ? ) !! へあれ!

「っ！あそこに行つて！」

上空から結界内を見渡すという作戦は功を成したようで、この結界を生み出している魔女を発見する事に成功した！

カービィの指差すその姿は鳥かごの魔女と言うだけあって人間の大きさを遥かに上回るほどの巨大な鳥かご、その中にはたまた巨大な人間の足が入っているという訳の分からない構造をしていた。

中の足は片方が普通の靴下でもう片方がハイソックスというのが

おそらく魔女なりのお洒落なのだろう。

「…あれが魔女。あの魔女をあなたは倒せるかしら？」

y y y y y

c (???) つへぽくよぽよ！

地上に降りたカービィは黒髪の少女ほむらを降ろし、鳥かごの魔女を見上げる。人間から見ても大きなサイズ、彼からしてみれば山のよくな大きさだ。しかし、彼は臆することなくその山に向かってダツシユしていく！

同時に彼の接近に気づいた鳥かごの魔女が足で軽快にタップダンスを刻み、付近にいる数体の使い魔に命令をしていた。

「鳥かごの魔女は本体の力が弱いけど使い魔の数は多い。まずは使い魔から片付ける事をオススメするわ」

y y y y y

シ (???) シへやつ！

魔女を庇うように立つのは先ほどカービィが吸い込んだ使い魔たち。突進の勢いに乗ったカービィは一番手前にいる使い魔を体格の差をもつともせず頭上へ投げ飛ばし、追い討ちをかけるかのように体当たり！そして、その使い魔を近くにいた使い魔に向かって弾き飛ばす。

体勢を崩した使い魔たちに一瞬、構えをとったカービィは身体を高速回転させてそのまま頭突きで突撃していく！その頭突きで地上にいた使い魔は霧散し全滅となる。

残った空中で浮かぶ使い魔たちが動揺している隙に彼は素早く翼を広げ、何本か羽根を飛ばすとその羽根は寸分狂わず使い魔の胸に突き刺さり、残りの使い魔たちが地上へと落ちてくる。

(かなりの数の使い魔を無駄なく一瞬で倒す…あの子、見かけによら

ず戦い慣れている！)

はたして自分にあれほどの事ができるだろうか…暁美ほむらはカービィの戦闘能力を素直に賞賛していた。

瞬く間に使い魔たちを消滅させ、開けた道をカービィは加速し一直線鳥かごの魔女でボスへと向かう。

「さあ、次は何を見せてくれるの…！カービィ」

目にも留まらぬスピードで魔女まで近づいた彼は方向を変え、その場所から遙か上空へと急上昇する！結界の天井と思われる所まできたカービィはそこから勢いをつけて急降下！

高速で回転しながら風を切るようなスピードでぐんぐん加速し、巨大な鳥かご目掛けて落下していく。そして、勢いに乗ったまま頭突ばくげききを繰り出した！鳥かごとカービィのぶつかり合った衝撃が離れているほむらまで伝わってくる。

「…まだよ。カービィ！」

魔女を覆っていた鳥かごは落下の衝撃によって割れ、中の足が露わになる。しかし、カービィの攻撃はかなりのダメージを与えたものの仕留めるまでには至っていない！

ほむらはどこからか拳銃を取り出し、ふらつきながら立ち上がった足に構えるがそれは必要のない事だ。なぜなら…

y y y y y

c (???) v へぶいっ

立ち上がった足もとい鳥かごの魔女の中身の全体にはカービィの投げた羽根が突き刺さっていた。羽根が突き刺さった魔女はゆっくりと後ろに向かつて倒れ、粒子状となって消えていく…とぼけた顔をしているものの戦闘においてはカービィは抜け目がないのだ。

「単独で魔女を容易に倒す程の実力…か」

っc

(???) シへはあい！

巨大な敵を倒したカービイはくるくると回転したり、ジャンプしたりして嬉しさをダンスに表現していた。そんな子供のような純粋さの裏側に魔女を軽く屠る実力を持つカービイ…そんな彼にほむらは興味を引かれていた。

(彼ならばもしかしたら…)

信じてみる価値はありそうね…パキパキと空間が割れ、元の自然公園の風景に戻っていく中喜びのダンスを踊っているカービイを見てそう呟く。

彼女、暁美ほむらもまたカービイとの出会いで未来が変わった者の一人である。

### 3. 一難去ってまた一難

魔女结界の中に閉じ込められたカービィとほむらの二人。カービィが鳥かごの魔女を倒した事で二人は無事に現実の世界に帰ってくる事ができた。

《ウィング》の能力を吐き出し、見慣れたいつものピンクボールの姿になるカービィ。吐き出した能力は星の形となってカービィの周りをクルクルと回っていたが、やがてポンツと音を立てて霧散していった。

そして、カービィはほむらの足元に行くのだが彼女は夜空を見上げて何やら難しい顔つき…心ここに在らずといった感じだ。

つつ

(っ?o?) つつ へぼくよ?

つつ

「ああ…っめんなさい。少し考え事をね…」

夜風でなびく髪をそつと抑え、彼女はクスツと笑みを浮かべる。そして、彼女は20cmほどのカービィの身長にあわせてかがみ、キョトンとしている彼に向かって手を差し出した。

「カービィ、あなたさえよければ、その…私の手伝いをしてもらえないかしら? もちろん、手伝ってくれるなら何だって…」

(っ???) つぎユツ

ほむらの言葉を聞かない内に彼女の手を取ったカービィ。というより何でもと言う言葉を聞いた瞬間に彼は素早く手を取ってコクコクと頷いていた。

なんだって…と言われた彼の頭はおそらく食べる事一色となっているだろうが、初対面のほむらはそれに気づかない。そして、ジュルリとよだれを垂らすカービィの身体を優しく抱きしめる。

「ありがとうカービィ。ふふっ…よく見てみるとあなたって可愛いわね。どこかの白饅頭とは大違い…」

どこかできゅっぷいというくしやみかゲップかそんな声が聞こえてくる気がする…彼女はそのままカービィを腕で抱き上げるとどこかに歩き始めた。

時刻はもう深夜1時、もともと眠る事も大好きという事もあるが、戦闘の疲れがどつとでてきたカービィは目をパチパチとさせていた。そして、ほむらがずつと背中を優しく撫でていた事もあり、すぐに安らかにいびきをかいて眠りに落ちるカービィ。

(ー〜ー) へ…zzz

u u

「私がどうしてあなたを信用したかわかる？カービィ」

腕の中で気持ちよさそうに眠っているカービィにほむらは独り言のように呟く。ほむらがカービィを信用した理由、それは…

「ふふっ…こんな事を言ったら二人は怒るかもしれないけどね。あなたがあの子にどこか似ていたからなのよ？」

ほむらが話すあの子というのはカービィが最初にあつた鹿目まどかの事だ。このピンクをイメージさせる身体、今日知り合ったばかりで怪しさ全開のほむらをも信頼し、大胆にもこの腕の中で眠る純粋さ、そして戦闘の時に見せるいざという時の決断力…やはり彼と彼女はそっくりだと思った。

(ー〜ー) へ…zzz…おやつ…

U U

「…この子って何食べるのかしら。ドッグフードとかでいいの…？それとも虫とか魚？」

明日の帰りにでも見に行こう…そう思い彼女は到着した家のドアを開くのであった。

……

……

…

次の日、この日は月曜日で彼女…暁美ほむらは朝6時30分のアラームで目を覚ます。そこは中学生の少女とは思えない程、何も飾り気がない無機質な部屋。あるのはこじんまりとした机、小さな冷蔵庫、申し訳程度にある古い機種ノートPC…といった日常生活で必要なものばかり。

だが、そんな部屋の中で一際異彩を放つモノがあった。それはやはり…

(つーー)へ…zzz

「カービィ…さすがに起こすのは可哀想よね？でも、学校行かないと…」

実は今日はほむらが鹿目まどかも通う見滝原中学校に転校する日。彼女もここ見滝原に最近越してきたばかりで部屋の隅に積み重なっているダンボールがそれを物語っていた。

カービィのいびきをバックに身支度を整えていくほむら。学校の制服へと着替えた彼女はカロリーメイトを朝食にし、素早く栄養補給もすませる。これで後は学校へ行くだけなのだが…

「カービィをどうするのがいいのかしら…？お留守番はできないと思

うし…」

チラツと眠りこけているカービィを見る。もし目を覚ました時、そばにほむらがいなかったらどうなるだろうか…家の中で暴れるぶんなら全然構わない。だがもし、ほむらを探しに外へ出て付近の人の目についてしまえば確実に面倒な事になってしまう。

彼女としては一緒に行動したい所だが、連れて歩いてしまえばそれこそ本末転倒だ。何かいい案はないかと思っていた所…

「人目に付かないようにこの子を連れて歩く方法…あっ！そうだわ」

暁美ほむらの左手の中指に付いた指輪が妖しく発光する！すると、一瞬にしてほむらの左腕に中心部に黄金の装飾がついた円盤状の盾が装着される。

そして、ほむらは布団の毛布で大の字で寝ているカービィを優しく包むと…彼をその小盾の中へ“収納”した。後にこの判断は失敗であったと気づくのだが…今の彼女は問題が片付いた事に軽く一息つく。

「さあ、学校へいきましょうか」

………

……

…

「今日は皆さんに転校生を紹介します！いらっしやい暁美さん！」

ドアの前に待機していたほむらは一呼吸おいて教室の中へ入る。教室中の視線が黒髪を揺らして堂々と歩くほむらへと注がれた。



その中には昨夜カービィと出会って眠そうにしている鹿目まどかの姿もあった。ほむらは視線を意に介する事なく黒板に自身の名前を書いていく。

「自己紹介をお願いします！」

「…暁美ほむらです。よろしくお願いします」

無難に自己紹介をした彼女はペこりと頭を下げた。えっ…もう終わり？とクラスの一同はポカンとしていたが、担任の教師である早乙女先生が慌てて拍手した事から一斉にほむらに向けて拍手が送られる。

「じゃあ暁美さん！席は…その席についてね」

「はい」

短く返事をし、ほむらは座るように指示された席に座ろうとしたその時…

『ぼよーぼよよ!!』

「っ!？」

この教室内に舌足らずな声が響く！聞き覚えのあるその声に思わずほむらはビクツとし、その場で立ち止まってしまった。

クラスの一同は突然響いた動物の鳴き声のようなこの声にビクツリしてザワザワしている。その声はいったいどこから聞こえてくるのか…それはほむらの左指についてある指輪からであった。

『ぼよーぼよっぼよ…』

「……………すみません…携帯の電源を切り忘れていました。それと、ちよつと気分が悪くなったので保健室に行ってもいいでしょうか？」  
「え…ええっ！学校で携帯は厳禁ですよ。気をつけてくださいね！」

急いでこの教室から出ようとするほむらだがその時、何やら複雑な顔をしたまどかが手を挙げて立ち上がる。

「先生！暁美さんは転校してきたばかりで保健室の場所がわからないと思うので私、案内してきてもいいですか？」

「あつ、そうですね！鹿目さん、お願いします！」

これには苦い顔をしていたほむらの顔がもつと苦いものとなるが、今はカービーへ説明する事が先なので力なく頷いた。そして、まどかと共に教室を出て行く…

余談だがクラスメートの一同は彼女：暁美ほむらに自己紹介や立ち振る舞いからクールな印象を受けていた。

しかし、あれが携帯の着信音であるならば彼女は意外と可愛いものが好きなのでは？…そういう噂がクラス内に急速に広まっていったという。

#### 4. ハチャメチャが押し寄せてくる

コツコツコツ…全国を探しても珍しい全面ガラス張りの廊下をまどかに先導されて歩くほむら。今は授業中である為か、出歩く生徒や先生はまどかとほむらを除いていない。それは不幸中の幸いといったところだろう。なぜなら…

『ぽよーぽよぽよー』

「……………」

ほむら達が教室を出た後もカービイの声がずっと発されていたからだ。携帯の着信音と誤魔化したほむらだが、さすがにカービイの存在を知っているまどかは騙す事はできないだろう…そう思っていると意を決したという様子のまどかが口を開く。

「その…あ、暁美さん…!」

「……………ほむらでいいわ。何かしら、まどか?」

オドオドしているまどかとは対照的に冷静に返事をするほむら。だが、彼女はぽよぽよ声を少しでも抑える為か、指輪ごと中指をギョツと握りしめていた。これで廊下に響く声も少しはマシになる。

「さつきから暁美さんの方から聞こえてくるこの声ってカービイの声…だよね…あっ!カービイって言うのは…きほんはまるって感じの子で…」

《まるか〜!まるか〜!!》

彼女の声が聞こえたのか、まどかの名前を叫び始めたカービイ。もうどうにでもなれ…ほむらはため息をついて左腕に円盤状の盾を展開させる。そして…

(っ・o・c) へほよっ!?

「カービイが出てきた!?ど、どどどうなってるのっ…」

ほにゆつと言う独特な音と立てて床に顔を思いつきり突っ込んだカービイがまどかの目の前に現れた!彼は起きあがるとキョロキョロと周りを見渡し、頭にハテナマークを浮かべている。

そして、ほむらすかさずカービイを抱きかかえて円盤状の小盾を傾けた。すると…

「ねえ!ほ、ほむらちや…」

(っっ?) へんん?

まるでビデオの停止ボタンを押したかのようにまどかの言葉が不意に途切れる。いや…まどかだけではない。カービイがガラス張りの窓の外を見ると風で揺れていた木も青々とした空に流れる雲も全てが動きを忘れたかのようにその場で静止していたのだ!

それはほむらと彼女が抱きかかえているカービイの二人を除いて…

「…これが私の能力なんだけど、こんな所で見せるとは思わなかったわ。カービイ」

(っ???) っくのくりよくう?

「そう、私と私が触れている物以外の時間を止める能力よ。それと…さつきあなたがいたアレも能力の一つね」

時間停止、それと盾の中に物を出し入れできる能力。それが彼女が保有する能力なのだが…カービイは首を傾げてぼんやりとした顔でほむらを見ている。

「どうしたの?何かわからない事がある…?」

(っ???) へおなか、すいた!

ほむらはここで誤解をしていた事に気づいた。盾の中の空間で目が覚めたカービィ、てつきりどうしてここにいるんだろう？そして、ほむらはどこにいるんだろう？それを説明をしてほしくてカービィはずつと声をあげていたものだと思っていた。

しかし、実際は空腹を訴えてほむらを呼んでいたただけだったのだ！

「あなた、よく悩みのない子だとかって言われるでしょ…」

（っ…っ、）っへんむっ！

つんつんとカービィの頬を軽くつつきながら呆れ混じりに呟くほむらにカービィは少し怒ったような雰囲気ですっぽを向く。

その子供のような仕草に笑ってしまふほむらであったが、ふとカービィが口をモゴモゴさせている事に気がついた。

「カービィ…？何を食べてるの？盾の中には食べられるような物はなかったと思うけれど」

（っ…っ…へっ…まずい…）

そう言つてカービィが吐き出したのは拳銃に装填する弾だ。カランコロンと音を立てて床に転がるソレを見た時、ほむらは無性に嫌な予感が頭の中をよぎる。

（いや…まさか、カービィが盾の中の物を食べるなんて事は…）

急いで盾の中の物を確認するほむら。彼女が手をつ突っ込んで中をまさぐると…スカツと空気を掴んだ感触がする。やはり、嫌な予感ハ的中していた。

「……………全部ない…手榴弾からロケットランチャー…その他もろもろ全部無くなってる…食べた、の？」

( つゝ? ) へぼよ?

それにはしばらく放心していたほむらだったが深いため息をつき、起こつてしまった事は仕方がないと気持ち切り替える。

武器はまた手に入れる事ができるのだ…子供を前に怒りを露わにする程、ほむらの心は狭くはなかった。言い聞かせてなかった自分が悪いと考え、彼の頭をそつと撫でる。

「カービィ…お昼まで静かに我慢できそう?我慢したら今日の夕飯、好きなものを食べさせてあげる」

( ― ― ― ) へ………あいつ

盾の中では遊んでもいいけどあまりうるさくしない事。それと何か緊急の用事がある時以外は話しかけない事。

それを守れたら好きなものを食べさせる事を条件にしぶしぶ盾の中へ戻つていったカービィ。これでひとまず問題は片付いた…残る問題は…

「まどかをどうするか、ね…」

口元に手を当ててあたふたした状態で動きを止めているまどかを見ながらほむらは考える。もういつその事、自分の素性とカービィの事を話してしまおうか…

もうそんな事まで考えてしまっていたが頭をぶんぶん横に振り、しばらく考えた末にほむらは溜め息をついて時間停止を解いた。

………

………

………

「ねえ……ほむらちゃん！　いったい何がどうなって……あれ？　あの子は……」

先ほど何かのマジックのように目の前に突然現れたカービイの事を尋ねようとしたまどか。

しかし、当のカービイは影も形もなくこの場にいるのはまどかとはむらの二人だけ。周りを見渡してカービイを探すまどかにほむらは……

「………何の事かしら？」

ほむらが選んだのはいかにも、私は何も見ていませんし聞いていませんといった様子で振る舞う事だった。

少し……いやかなり厳しいかもしれないがカービイは姿を消し、能力を解除した際に左手の盾も消えた為、この場に残った証拠は何もない。

「えっ!?　か、カービイだよ!　さっきここに……いたはずなんだけど……あっ!　私の名前を呼ぶ声も聞こえたよね?」

「カービイ?　声?　さて……私には何の事かさっぱりね。それより保健室はこの先だったかしら?」

「そ、そうだけとお……もうカービイの声も聞こえないし……気のせいなのか?」

自分は確かにこの目で見たような気がした……けれど、一緒にいた彼女が見ていないのであればあれは幻か何かだったのではないか?　まどかは徐々にそう考え始めていた。

非日常的な現象は案外簡単に丸め込めるものだ、これでまどかもス

ルーしてくれるはず…そう確信するほむらであつたが…

「…また会えたかと思つたんだけどな…家にカービイが喜びそうなおやつ」も用意してあるのに…」

マズいとほむらが思つた時には遅かつた。盾の中のカービイは敏感にその言葉に反応し、今度は『まろかくおやつ』と声を出し始めたのだ！これにはほむらももうお手上げである…

「……………放課後、あいてる？」

「……………うん、カービイの事とかいろいろ教えてね。ほむらちゃん」

……………

……………

…

それ以降はカービイは約束を守つて静かにしていた（昼寝をしていた）為、特に問題はなくこの日の授業を終えるほむら。

転校生で思わず目を引いてしまう程の美少女…なおかつ授業では成績優秀、運動神経抜群と超ハイスペックぶりを見せた彼女にはクラスメート達から次々と遊びのお誘いがくる。

しかし、先約があるからまた今度と断つた彼女は皆に挨拶をしてもどかと待ち合わせた校門の前に行った。するとそこには…

「よっ！転校生！」

「ごめんね、ほむらちゃん…私もダメだつてさやかちゃんには言ったんだけど…」

同じクラスでまどかと仲が良い美樹さやかがまどかと共に待つて



いたのだ。はあ…と深いため息をついたほむらは重い足取りで彼女たちの隣へ行く。

「あたしは美樹さやかだよ！よろしくっ！」

「…ついてくるのは構わないけどこの事は絶対に他の人に話さない事。いいわね、美樹さん？」

「りよ〜かい！軽くまどかから聞いたんだけど…デュエルディスクみたいな物からピカチュウみたいなモンスターを召喚？できるんですよ？」

「……………ん？」

## 5. ピンクの悪魔と白の悪魔

### まどかの家

人目につかない所がいい：そうほむらの一声でとりあえず三人はまどかの家に行くことにした。

そして、彼女の部屋に入るとまず目を引いたのは勉強机の上に置かれたまどか一人では到底食べきれないであろう大量のお菓子の山だ。

「ま、まどか…このROCKYにんまい棒その他もろもろ…いったいどうしたのさ？」

「えっ？ああ…昨日の事、さやかちゃんにも話したよね？お菓子をこうして置いてたらカービィが帰ってきてくれるかなって…」

「という事はこの部屋の有り様も…」

彼女の部屋の窓は開きっぱなし：そして、床に散りばめられた多種多様なぬいぐるみ達…これらはまどかが先ほど言っていた言葉から間違いなくカービィの事を意識している事がわかった。

どうやらまどかはほむらの想像以上にカービィに会いたがっていらしい。それはカービィも同じようで…

『まろか〜！おやつ〜！』

「あつ！カービィの声が聞こえる！」

「これがピンクのピカチュウの声：朝聞いた声と同じだ…」

昨日、運命的な出会いをして空腹の所を助けてもらったカービィもまどかの事をかなり好いているだろう。ほむらの事はまだ名前を覚えて貰えていないだけかもしれないが、これまで一度として名前を呼ばれた事はなかった。

しかし、まどかの事は朝に廊下で話した時からずっと名前を呼んでいる。おそらくご飯を基準に考えるカービィの中ではまどか〜ほむら

となっているのだと思った。

「…ほ、ほむらちゃん！カービィを…」

「そうね。まずはカービィを外に出してあげましょうか…」

ほむらが左手を前に突き出すと彼女の左腕が紫の光を放ち、何かを形作っていく。それは円盤状の小盾で先ほどから聞こえてきていたカービィの声もより鮮明に聞き取れるようになった。

そして、ほむらはカービィの腕をイメージして盾の中に手を突っ込むと…一気に掴み出す！その手にはピンク色の丸っこい生き物、カービィがいた。

（… 〇？ ）〈ほよっ!〉

「カービィ！わあああ…会いたかったよ〜」

ほむらが取り出したカービィをすかさず抱きしめて「ルミナス」をするまどか。（注：ルミナスとは↓（つ、ω、（、ω、c）ほつぺたすりすりの事）その様子にはほむらとさやかもビックリである。

「ピンクのボールみたいなやつだけど…こいつはいったい何なのさ？ それにあんたのそのデュエルディスクも…」

「はあ…これはデュエルディスクじゃないわ。盾よ、盾！まったく…これはね…」

“ —それは僕から説明させてもらってもいいかな？ 暁美ほむら… ”

それは突然の事であった。ほむらの言葉を遮ったのは男性とも女性とも言えるであろう中性的な声。その声を聞いた瞬間、ほむらはすかさず盾に手を突っ込み武器を取り出そうとする。

しかし、あいにく盾の中の物は全てカービィに食べられたばかり。空気を掴んだ感触がなく、自分が何も出来ない事を悟るとどびつき

りに顔を歪め、湧き上がる怒りに舌打ちをして顔を上げる。するとそこには…

「キュウベえ…!」

開いた窓の所には白兔のように真っ白な毛並みをした小動物がいた。ほむらが吐き捨てた言葉から彼はキュウベえと言う名前である事がわかる。

キュウベえの赤いビー玉のような瞳は憎しみを込めて睨む少女へ向けた後、隣で驚いている様子のまどか…いや、彼女が腕に抱くカービイを見つめていた。

“…驚いたよ。まさか、こんな所で君と出会う事になるとはね。噂はかねがね聞いているよ?カービイ”

(っっ?)へんん?

目を閉じて首を振るキュウベえはまるでカービイを知っているかのような口振りで話す。カービイはキョトンとしている為、キュウベえが一方的に知っているようだ。それにはほむらも驚いた様子で窓の前で佇む彼に詰め寄る。

「まって…あなた、カービイを知っているの!」

“…いい意味でも悪い意味でも彼は有名だからね。それより彼女たちと話をしたいんだけど構わないかな?”

「ね…ねえ、さっきから色々な事がありすぎてわけがわからないんだけど…そいつは誰なの?ピカチュウの親戚?」

ハテナマークを頭いっぱいに詰め込ませた様子のさやかとその後ろで不安そうにギョツとカービイを抱き締めているまどかが全てを知っているであろうほむらを見る。

彼女は複雑な顔をしていたがやがて観念したのか頭を抑えながら

キュウベえに背を向けた。話をしてもいいと取ったキュウベえは床にちよこんと飛び移り、床に散りばめられた大量の人形を避けてまどかとさやかの前に行く。

“ 僕の名前はキュウベえ。僕は君たちにお願いがあつてここにきたんだ！まどか、さやか！”

「あ、あたし達の名前を!？」

「お願いって何なの？キュウベえ」

“ 僕と契約して魔法少女になつて欲しいんだ！あつ…魔法少女と  
いうのはね…”

魔法少女、それは魔力の源であるソウルジェムを手にしてみんなに希望を振りまく存在の事らしい。

魔法少女になった者はこの世に絶望を撒き散らす魔女と呼ばれる存在と戦わなければならない。その魔女や魔女が生み出す使い魔は人間たちを死に追いやるという。

この世界で起こってしまった訳の分からない自殺や殺人事件のそのほとんどが魔女が原因のものとされている。

“ …ここまではいいかな？”

「うん…魔法少女っていうのは正義の味方だつて事はわかつたよ」

人間たちを死なせてしまう魔女をやつつけるのが魔法少女。そう理解したまどかとさやか。ちなみにカービィはまどかの腕からすりりと抜け出し、勉強机に大量に置かれていたお菓子を美味しそうに食べていた。

話の腰を折らないようにと気を使つてか、それともただ単にお菓子が食べたかっただけなのか…おそらく、いや確実に後者だろう。

「でも、魔法少女になったらさ…魔女つてやつと戦わなきゃいけないんでしょ？今のご時世そんな事する奴いんの？」

“ そうだね。だから、僕は魔法少女になってくれたら何でも一つだけ！君たちの願いを何でも叶えてあげる事にしてるんだ！”  
( 〇 | 〇 ) へっ!!

何でもという言葉にまたしても反応するカービィ。キュウベえに呆れた様子で“君は人間じゃないから無理だよ”と言われガツカリしている、がすぐに復活してお菓子を食べ続けていた。

「えっ！何でも一つだけってなにその強化前のドラゴンボール」

“ その認識で間違いはないよ。願いを決めて僕との契約で出来るのが今曉美ほむらの左手についてある宝石、ソウルジェムだ。どうやら彼女も魔法少女みたいだね”

「みたいだねって…あんたが契約？したんじゃないの？」

“ …僕は彼女と契約した覚えはない。どうして彼女が魔法少女になっているのか…それは僕が知りたいくらいさ”

首を傾げて可愛らしく視線を向けるキュウベえに忌まわしように鼻を鳴らしてそっぽを向くほむら。彼女はカービィの隣へ行き、笑顔でお菓子を頬張り続ける彼の為にんまい棒の包装紙を剥がしてあげていた。

“ 曉美ほむら…彼女は素性の知れない魔法少女だ。決して信用はしない方がいい。それにあのカービィもね”

キュウベえはほむらとカービィに聞こえないようにまどかときやかに語りかける。怪訝な顔をしている二人へキュウベえは畳みかけるように説明を加えていく。

“ カービィ、彼はこの星の生命体ではない。この宇宙の辺境にあるポップスターという星に住んでいたはずなんだ。なぜ彼がこの地球にやってきたのか…何か考えがあつてやってきたのは間違いないだ

ろう”

“ そんな二人が組んでいる…これは間違いなく何かを企んでいる  
と思わないかい？だから、決して心を許さない方がいいよ…”

シリアスな雰囲気デキウベえは話しているのだが、後ろで大きく  
口を開いているカービーへほむらが開封したんまい棒を3本手にし  
てあくんをしている姿を見ると二人は何とも言えない表情となつて  
しまう。

「…ふふっ…あっ！こほん…くだらない魔法少女の話は終わったのか  
しら？」

“ うん、だいたいはね。どうだいまどか、さやか。素晴らしい魔法  
少女について興味がわいてきたんじゃないかな？”

「…叶えたい願い…かあ…私はまだよく考えられないなあ」

「そうだね、金銀財宝とか不老不死とか満漢全席とか考えられるには  
考えられるけど…」

さやかの発した満漢全席にカービーはピクリと反応する。おそら  
く言葉の意味はわからないもののそれが食べ物を差す言葉である事  
はわかったようだ。彼の並外れた食欲にこの場の皆が驚愕する…

“ …とにかく今すぐには言わないからよく考えてみるといういよ  
！それとカービー、二人だけ話がしたいんだ。少しいいかな？”

（ つ？くc）へモグモグムシヤムシヤ ゴクン

c（ ??? ）つへはあい！

## 6. 地球のお菓子は美味しい

桃色で丸っこい身体をした一頭身の生物。そして、それに対峙するのはこれまた小動物を模したぬいぐるみのような白い獣。彼らはまどかのベッドの上で向かい合っていた。

その様子を何とも言えない表情で見ているまどかときやかとほむらの三人。今現在、キュウベえがカービィと話がしたいと言いだした為、彼らはテレパシーで会話をしている最中だ。

「いったい何を話してるんだろ…」

「さあ、あの白饅頭の事だからどうせろくでもない事を言ってるんじゃないかしらね」

ふんと鼻を鳴らし、ほむらは腕を組む。彼女は何故か魔法少女のサポーターだというキュウベえを嫌っている。先ほどキュウベえは彼女を信用してはいけない…と言っていた事を思い出すまどかだが、首を横に振ってその理由を聞いてみる事にした。

「ほ、ほむらちゃん…キュウベえの事が嫌いなの？」

「…奴は人間の価値観が通用しない生き物よ。そんな奴を好きになんて絶対にならないわ」

「なんかやましい事をしているからじゃないんだよね？転校生」

話に加わってきたさやかは疑惑の目をほむらに向けているようだ。とはいってもまだ半信半疑といった様子でキュウベえの事もいまいち信じられていないように見える。

「私はただ私の願いの為に戦っているだけよ。そう…私が叶えた願いの為に…」

「願い？ほむらちゃんはどんな願いで魔法少女になったの…？」

「っ！…それは…あなたが知る必要はない事よ」



そう言つてそつぽを向くほむらにさやかはうくと唸り、やはり信用できていなさそうだ。しかし、ほむらのそんな様子はまどかにはどこか悲しそうに見え…言葉に言い表せない何かがあるのだろうかと考えていた。

「そっか、じゃあ聞かない！ほむらちゃんって魔法少女なんだよね？どんな魔法が使えるの？」

「どうして私がそんなっ……はあ、わかった。見せる…見せるから」

押し強いまどかに根負けしたほむらが時を止めて二人にマジックを披露する中、カービイとキュウベえはというと…？

“カービイ…いい加減本当の事を聞かせてくれないかい？”

『ぽよよ。ぽよよっ！(だくかくらく！ワープスターがきゅびびびくんとてすごい音を立てたかと思つたらいつの間にかこの星にいたんだって！)』

“いやいや…座標を決めてその場所に飛ぶのがワープスターだ。君が地球にくるつもりがなければ飛んでこない。それにいつの間にかつて…確かワープスターにワープの機能はなかったはずだけど？”

『ぽよよ…ぽよよ…(うくん？言葉が難しい！もっとわかりやすく言つてよ)』

“ワープスターはワープしない。行き先に向かつて宇宙を超スピードで移動する乗り物だ”

『ぽよよよよっ(あはははっ…ワープスターって名前なのに変なの！)』

“はあ…話にならない。まったく、君は相変わらずのようだね。カービイ”

『ぽよよ…(あれ？やっぱり会った事あつたつけ？思い出せないや)』

“僕が一方的に知っているだけだよ。 ギヤラクティック・ノヴァ 大彗星を自分勝手に悪

用して強大な力を持った道化や僕たちも手を焼いていた暗黒の一族たち、あの星の遺産を手にし宇宙を支配しようとした虚言の魔術師、さらには全てを滅ぼすべく蘇った太古の破神すら打ち破って見せた…君は自分で思っているよりも有名なんだ”

『ぽよよ…ぽよよぽよ（そんな事したっけ？覚えてないなあ…けどおやつのでんせき盗られて追いかけたのは記憶にあるよ）』

“…はあ…君に話すつもりがなければもう聞かないよ。そのうえで単刀直入に言おう。君は一刻も早くこの星から離れた方がいい”

『ぽよよ…（なんで？）』

“この星はあと1ヶ月かそこいらで滅んでしまうからだ”

『ぽよよよよよつ!?（滅ぶってなくなっちゃうって事!?）』

“そうだね。君には全てを話しても問題なさそうだし教えてあげるよ。1ヶ月後、ここ見滝原に最強の魔女がやってくるんだ”

『ぽよよ（魔女ねえ〜それってどれくらい強い？）』

“最強を冠する魔女だ。この地球上の文明をひっくり返すなんて事は他愛もない…だけど、この星を滅ぼすのはその魔女じゃないよ”

『ぽよよよよつ（あらら、倒そうと意気込んだのに…）』

“…？君は戦うつつもりだったのかい？”

『ぽよ、ぽよよよ！ぽよよ！（地球ってお菓子美味しいからね〜無くなるのはやだよ！それでそいつじゃないならどいつがやるの？）』

“この星を滅ぼすのは…そこの鹿目まどかになるだろうね”

『ぽよつ!?ぽよよ…（ウソ!?まどかは絶対にそんな事しないように見えるけど…）』

“簡単に説明するとまどかはその魔女に対抗する為に魔法少女になるだろう。ああ見えて彼女はとてつもない力を秘めていてね…保有する力の量で言えばもしかしたら君が倒した神に匹敵…いや、それ以上かもしれない”

『ぽよよ…（だから滅んじやうって事？まどかはそんな事しないよ！）』

“いや、魔法少女に契約したならば結果はどうあれいずれば彼女は星を滅ぼす存在となるね。これは断言できる”

『ぽよよ…ぽよよ…（ふ〜んよくわからないけどそうなのか〜でも契約し

たらの事でしょ？しなかったら？』

“ ……そうだね。一時的には地球の崩壊は食い止められるだろう。だけど、僕はどんな手を使ってでも彼女を契約させてみせるよ”

『ぽよよ…(あれ？君つてもしかして悪い奴？)』

“ この星の住民にとつてはそう映るかもしれない。だけど、これも宇宙の存続の為に必要な事なんだ”

『…？ぽよよ…(どういうこと!?)』

“ 君にわかるように話せば2〜3時間はかかると思うけど構わないかい？”

『ぽよよ…(えっ!?!ご飯の時間に遅れちゃうよ！簡単にわかりやすく三行くらいにして教えて！)』

“ ……僕は魔法少女に契約した際に彼女たちが希望を抱いたり絶望を抱いたりして得られる感情のエネルギーを回収するのが目的なんだ。そのエネルギーを回収し、有効的に使わなければこの宇宙はすぐにでも崩壊の道を辿る事になる。僕たちが住むこの宇宙がなくなるよりは宇宙の外れにある星の一つや二つの犠牲はやむを得ないと思うけどね”

『ぽよよ…ぽよよ…(うん、よくわかんない。けどきつとこの星も宇宙も救える方法が必ずあるはずだよ！)』

“ ……やれやれ、まあ好きにしてみるといいよ。僕は僕のものすべき事をするだけさ。とはいえ君は宇宙の存続の為に必要な人材だ。この地球が崩壊する時は君だけはなんとか助け出してあげるよ”

『ぽよよ…ぽよよ…(食べ物美味しいこの星を消させるわけにはいかないよ！絶対にこの星も宇宙も救ってみせる！)』

“ ……ほどほどに期待しているよ、カービー。さて、話は変わるけどこの暁美ほむらとはどういった間柄だい？”

『ぽよよ…ぽよよ…(ほむら？なんか困ってたし、手伝ってくれたらいろいろと食べさせてくれるって言ってたから一緒にいるんだけど…それがどうかしたの?)』

“ ……手伝う…？彼女が何を目的としているのか、君は知っているのかい？”

『ぼよ・ぽよ(うん、知らないよ？悪い奴には見えないから大丈夫大丈夫)』

“彼女と行動を共にするつもりなら彼女の行動がわかり次第僕に教えてくれないか？おそらく暁美ほむらは僕の邪魔をするつもりだろうからね”

『ぼよ・(うん！後で聞いてみる！)』

“…話は以上だ。何かわかって僕を呼び出したければ頭の中で僕を呼べばいい。すぐに駆けつけるよ”

『(キューバー！)』

“僕は目の前にいるだろう？今呼んでも意味ないよ”

『ぼよよよよっ(ホントにわかるんだね〜わかったよ！)』

こうして宇宙人仲間であるキュウベえとのテレパシーが終わる。キュウベえはまどかとさやかに魔法少女についての説明を軽くした後、どこかに消えた。

その後はまどかが用意したお菓子を全て完食し、それなりに腹が膨れたカービイはベッドで横になりいびきをかいて眠ってしまう。

まどか(密かにほむらも)はそんな姿に癒やされ、キュウベえの話を聞いて警戒していたさやかも何だか馬鹿らしくなってカービイの事を疑うのをやめたそうだ。

## 7. 薔薇園の魔女 Battle!

辺りは赤い薔薇が咲き乱れ、不気味な模様の蝶が舞い踊る異質な空間。見上げれば視界に入るのは蝶のような羽根を持つ緑ヘドロを被った巨大な魔物が俊敏に上空で飛び回る姿。

ここは薔薇園の魔女の魔女結界で結界を感知したほむらとカービーがその魔女と交戦している！

「あのヘドロは臭いがきついから触れちゃダメよ！もしあれに触ってしまったなら手洗いはする事。汚い手で家の物に触れちゃダメ。いわね？」

（???）へぼよ！

上空から人の何倍もの大きさを誇る巨体を活かして押しつぶそうとしてくるヘドロの魔女を時を止めて回避するほむらと後方にダッシュして紙一重でかわすカービー。

あちらこちらに生えてある赤い薔薇に集る蝶たちはカービー達に反応して綿の化け物へと姿を変え、次々と襲いかかってくる！体当たりを仕掛けてくるその魔女の使い魔たちにカービーは口を大きく開くと…

（っ、お、c）ミシミシ

10はいたであろう使い魔を驚異的な吸引力で吸い込みそれを飲み込む。すると、カービーの身体は発光しシンプルだった彼の姿は大きく変化していく！

緑の星模様がついた白いバンダナ、手には自身の身長以上に大きな箒とその姿はまるで掃除でもするのかと思うものになった。

√（???）っーD三へクリーン！

「カービー！そいつらは倒しても倒してもキリがないわ。使い魔は私

がどうにかするからあなたは魔女をお願い！」

武器を全ておじゃんになされてしまったほむらは唯一武器になりそうな物で家にあったゴルフクラブを振り回して向かってくる使い魔たちをぶつ飛ばしつつ、上空で飛び回る魔女にぶつけるという地味な嫌がらせをしている。

彼女の言葉に頷いたカービィは箒に跨がると某世界的に有名なあの魔法使い映画よろしく浮かび上がり、上空にいる魔女に急接近！しかし、近づいてくるカービィを迎え撃つべくか魔女はその場で静止し、下半身から伸びる黒い触手を伸ばす。

(っ〇っ)っへぽよっ!?

茨のような触手によって道を阻まれるカービィ！彼が被弾覚悟の突撃でいこうとしたその時、ふいにカービィの相手をしていたはずのヘドロの魔女が血相を変えてカービィの横を通り過ぎていつてしまう。

魔女の進行方向にはゴルフクラブを振り回してこの空間に咲き乱れている薔薇を散らすほむらの姿！彼女は向かってくる魔女を一瞥すると：

「…カービィー！今よー！」

くくミミミ (っ?c)っーD三

時間を止めて魔女の怒りの突撃をかわしたであろうほむら。彼女はカービィが気づいた時には自身の背後にいて、この身体を掴み上げたかと思うと：魔女に向かってぶん投げた！

ほむらの力は魔法少女である為か、普通の中学生はもちろんの事、大の大人も上回る力を持っている。そんな彼女の力も加わり、薔薇をバラバラにされて大きな隙を見せている薔薇園の魔女に向かって箒を突き出し突撃していく！

どこからともなく現れた魔法の使い魔が邪魔をしようと立ちはだかるが、それをほむらが片付ける。そして、カービィがヘドロを被った魔法の頭に箒を振りかぶった！さらに…

?? / /

(っ、お、)っ?シ／

「箒で魔法の頭を連続攻撃！いや…あのヘドロを綺麗に清掃している!？」

《クリーン》の能力…それはその名が現す通り、清掃に特化した能力である。魔法の頭のヘドロはカービィのとめどない連続掃き掃除でみるみる落とされていく！

そして、トドメと言わんばかりにどこからともなく取り出したバケツの中の水をぶっかけて全ての汚れを取り除いた。

すると、倒したという判定になったのか魔法の身体は光の粒子となって消滅し、この魔法結界もパキパキと音を立てて崩れていく…

「やったわね、カービィ！」

(っ???)っ(二)

変身を解いて元の制服姿となるほむらとコピー能力を吐き捨てるカービィ。ほむらがカービィに合わせて手をかざすとカービィがその手にハイタッチ！

今日の晩ごはんは何にしようかなんて話し合いながらこの場から立ち去ろうとしたその時！

「…暁美さんにカービィ君ね…あなた達の実力は見せてもらったわ」

二人の前に現れたのは金髪縦ロールの髪型で存在感の凄まじい胸に引き締まったウエストというナイスボディの少女。その手にはマスケット銃、髪飾りにしているソウルジェムからほむらと同じ魔法少女である事が窺える。彼女の接近にほむらは身構えるのだが…

(?o?)へくる…くる…コロネ〜?

「ぷっ…確かにコロネ…!くっ、ふふっ!」

カービィはまず目の前の少女のその奇抜な髪型に突っ込んでしまっていた。コロネというカービィの言葉に警戒していたほむらも思わず吹き出してしまふ。対する彼女はその言葉に目が点となっていたが…

「な…なによ!!あなたたち馬鹿にしてるの!!」

c (???)っへくるくる!くるくる!

顔を真っ赤にして怒る突然現れた謎の魔法少女。おそらくカービィは彼女をくるくるコロネとして認識したのであろう。短い手を彼女に向けてくるくると連呼していた。

「これはコロネなんかじゃないの!れっきとしたオシャレなの!」

少女は声を荒げてコロネを否定するのだが、カービィは言葉を覚えただばかりの子供のように無邪気にくるくるコロネと言い続ける。するとほむらも悪ノリしてしまったのかカービィの高さに合わせてしやがみこみ…

「…あれはドリルかもしれないわ」

(???)っへドリル〜!

くくく／＼／うううっ!もうっ!!」

コロネから一転、ツインドリルと認識されたグラマーな金髪魔法少女。彼女はいったい…?



## 8. バマミとの出会い

「ひっく…ぐすっ…なによお…」

カービィにドリルやらコロネやらいろいろと好き勝手言われて怒っていた謎の魔法少女。ついにはその場に座り込んで泣き出してしまった！これにはほむらとカービィもやりすぎたと反省をしている。

この何ともいえない空気を変える為にほむらがおいおいと泣き崩れる彼女の背中を撫でつつ質問をしていく。

「ご…ごめんなさい、やりすぎてしまったわ。それでその…私たちに何か用があったんじゃないの?」

（っ…ゝ…）へコロネ…

ボソツと禁句を口にしてしまうカービィにぷつと吹き出してしまいうほむら。彼女の後ろで背中を撫でるほむらの目の前にはそのコロネがあった。

なるほど…見れば見るほどコロネとかドリルとかそういうものに見えてくる…そう思いながらももう片方の手で口元を抑えて必死に笑いを堪えるほむら！幸いその様子に彼女は気づく事はなかったように涙を拭い、そつと立ち上がる。

「…まず自己紹介させてもらうわね。私は“バマミ”コロネでもドリルでもない。と！も！え！マ！ミ！だからね？」

「え、ええ…巴さん、ね」

c (???) つへマ…ミ…?コロネマミ〜！

カービィが口を開いた瞬間、この場の時の流れが止まった！それは比喩などではなく、笑いを堪えきれなかったほむらは時間を静止させた為である。コロネバマミという語感の良さにやられてしまったほむ

らは一人色を失った世界で大爆笑していた。

一分間笑い続け、気持ちを落ち着ける為に深呼吸した後能力を解いて元の時間に戻る…

「…カービイは言葉に不慣れなの。だから許してもらえないかしら？」

「……………わかったわ。それで話の続きだけど…私はこの見滝原を守る魔法少女、キュウベえから聞いたんだけどあなた達がイレギュラーの二人ね？」

「…だとしたらどうするの？」

先ほどの空気が打って変わってビリビリと張り詰めたものになる。ほむらは彼女から距離を取り、笑い疲れたのかうとうとうとしているカービイの横に並び立つ、が巴マミは…

「誤解しないで！私はお礼を言いに来たの！」

「お礼？私やカービイがあなたに何かしたような覚えはないのだけれど…？」

あたふたと手を振るマミにほむらは毒気が抜かれほむつと首を傾げる。ほむらやカービイがした事といえば…

「この魔女を退治してくれたでしょ？本来は私が倒すつもりだったのだけれど…ちよつと忙しくてここまでくるのに時間がかかったの」

「ああ…そういう…別にあなたの為じゃないわ」

ほむらがどうして魔女を狩っていたのか…それはグリーンフシードという魔法を使う為に必要なアイテム、それを魔女から回収する目的もある。しかし、一番の理由はいずれくる戦いに備えてカービイとの連携に慣れておくというものであった！

「いいえ、それでもお礼を言っておかないとね。もしあなた達がいなかったらこの町の人に被害が出ていたかもしれないもの…」

マミのような普通の魔法少女は魔女の出現位置というのはこの世界に結界を開くまでわからない。その為、魔法少女の行動は後手に回ってしまう。

しかし、ほむらは不思議な事におおまかにだが魔女の出現位置がわかるのだ。なので、今回の薔薇園の魔女は運が悪い事に結界を開いた瞬間にほむらとカービィに殴り込まれその生涯を終えてしまった。

「だからね、お礼をさせてほしいの！イレギュラーだから関わりすぎないようにつてキュウベえには言われてるんだけどこれくらいは構わないはずよっ」

「お礼って…さつきも言ったけど別にそんな見返りを求めてやった事では…」

c (???) つへおやつ〜！

食べる事に関しては並々ならぬ思い入れがあるカービィはその言葉に食いつき、マミの足元へ駆け寄ってぽよぽよしていた。

食に目がくらんだ彼を止めるのは不可能である事はまだ付き合いの浅いほむらでもわかる。言葉を切ったほむらはため息混じりに…

「はあ…だそうだから彼に何か食べさせてくれたらそれでいいわ」

「うふふっ、わかったわ！私の家にいらっしやい！」

……  
……

…【巴マミのマンション】

どこか嬉しそうな様子のママに連れられやってきたのは有名人が住んでいそうな高級なマンション！彼女の部屋の中もとても広い上にほむらの部屋とは違い調度品だけでなく女の子らしい装飾品も置かれており、ガラス張りとなっている壁からは外の景色が一望できるようになっていた。

ソファーに座ってキッチンへ消えた彼女を待つほむらとカービィ。ママが用意するお菓子と紅茶の匂いにカービィはそわそわしておりほむらがそれをたしなめる。

「お菓子は逃げないわ。だから行儀よく待ちましょう？」  
(っ??)っへ…そわそわ

ほむらが注意した事によりしばらくじっと待っていたカービィ。しかし、すぐに立ち上がりキッチンとリビングを行ったり来たりしている。どこから出したのかいつの間にかフォークもその手には握られていた。

もつともカービィは以前、おやつを食べる至福の時間の時にそのおやつが何者かに盗まれてしまうという過去を持っていたりするのでそれは仕方がないと言えるのかもしれない。やがて…

「お待ちせーさあ、召し上がれっ」

ママが持ってきたのはたっぷりの生クリームとイチゴのつたホルルのショートケーキとスライスされたレモンが浮ぶレモンティー！

それが机に置かれた瞬間、ぱああとカービィの顔が明るくなる。そして、切り分けられ渡されたそのケーキにフォークを使うのかと思いきや、やはり吸い込みで一気にそれを食す！

Σ(？。？。c)へぽよっ!?

カービィは驚いていた。なぜなら、このショートケーキは今まで食べたケーキの中で一番と自信を持って言えるからだ。甘い甘い濃厚な生クリーム…ふわふわのスポンジ…そしてそれらに見事にマツチするショートケーキの目玉であるイチゴ!

普段は表情をあまり崩さないほむらもそのあまりの美味しさにはほんの少しだけ笑みをこぼしてしまう。彼女は口に運んだケーキに何かを思い出しているのかゆつくりと噛み締めるように食べていた。

「…美味しい」

「口にあったようでよかった…一応私が作ったものなんだけどね?誰かに振る舞うっていうのはあまりなくて…」

(???)へおかわり!

「うふふっ…本当に子供みたいね!…はい、カービィ」

ホールのケーキはほとんどカービィが食べ尽くす結果となつてしまったが、そのケーキのおかげかカービィはだいぶマミに懐いていた。今ではマミの腕の中で彼女に遊ばれている。

c(???)っへぽよ!ぽよ!

「ふわふわでマシユマロみたいな触り心地…癒されるわ〜一緒にいる暁美さんが羨ましいなあ〜」

「…そろそろ日も暮れてきたし帰らせてもらってもいいかしら?」

レモンティーを飲み干したほむらは立ち上がりそう言うと、マミはシユンとした様子でカービィを開放し頷く。そして…

「ねえ…暁美さん、カービィ…」

そこまで言った所で彼女は言葉を切り、首を横に振ると乾いた笑み

を浮かべて口を開いた。

「いえ、なんでもないわ。忘れて…」

「……………じゃあ私から提案があるのだけれど、もしあなたさえ良ければ私たちと協力関係を結ばないかしら？」

「えっ…？」

## 9. 魔法少女体験コース第一弾

「…うつ…あ…もう朝…？」

目を覚ましたほむら。布団で眠っていた彼女の腕の中にはぐつすりといびきをかいて眠るピンクボールがある。無論それはカービィであり、彼女は眠っているカービィを優しく抱きしめていた。

なぜこのような事になっているのかというところ…カービィは基本大盛ご飯を平らげた後に部屋の中でぼよぼよし、眠りにつく。

しかし、彼はトイレとか机の上だとかところかまわず寝てしまう。それは流石に問題があると考えたほむらは最近はずいぶん布団と一緒に眠っていた…のだが彼の触り心地の良さにほむらはいっしょか抱き枕にしてしまっていたのだ！

「んんっ…今日も学校ね。ママは答えを出してくれるかしら？」

昨日、ほむらは自分たちにお礼をする為に姿を現したというバママに仲間にならないかと誘った。彼女は戸惑い半分嬉しさ半分といった様子で口元に手を置き、真剣に考えていた。

そして、考えに考え抜いた末に彼女が出した答えは保留という選択であった。仲間として活動できるのは嬉しく思うが、まだ出会ったばかりで完全に信用はできない…なのでもう少しだけ答えを待ってほしいというものであろう。

「カービィもいる。そして、このまま何事もなくママの協力を得る事ができればきつと”やつ”も…」

鼻ちようちんを作って気持ちよさそうに眠るカービィを見ながら呟くほむら。しかし、すぐに首を振って立ち上がる。

「いえ、油断は禁物よ。どこに落とし穴が仕掛けられているかわから

ない…インキュベーターもいるもの、安心なんてできないわ」

学校の身支度を素早くすませ、カービィを盾の中にそっと収納したほむらは学校へ向かう…のだが、その最中で見覚えのある人影を見つけた。

ドリルにもコロネにも見えるあの髪型は巴マミのもの。その姿はほむらと同じ見滝原中学校の制服。実は巴マミもほむらやまどかが通う見滝原中学校の生徒でほむら達の一年上の先輩であったのだ。

マミもほむらに気がついたようでニコツとほむらに笑顔を向けて近づいてくる。

「おはよう、 暁美さん！いい天気ね」

「おはよう、 巴さん。今日も髪型決まってるわね」

「うふふっ…ありがとう！今度あなたの髪も整えましょうか？」

「えっ!?えっと、遠慮しておくわ…」

「ええ〜？今の暁美さんも素敵だけど…髪を整えたらもっと可愛くなれると思うのに…三つ編みとか、ツインテールとか…」

掛け値なしの褒め言葉にちよっぴり顔が赤くなるほむらだが、こぼんと咳払いした後に本題に入る。

「…そんな事より答えは決まったかしら？」

「…その事なんだけど…やっぱり私たちはお互いを知らなさすぎると思うの。だから。一度私の魔女退治に付き合ってみない？」

「なるほど…それは一理あるわね」

「じゃあ今日の放課後、私はパトロールにいくつもりんだけど…一緒についてきてもらってもいい？もちろんカービィもね」

(今日出現する魔女…それは確か…！運がいいのか悪いのか…)

マミの言葉にほむらは今日姿を現す魔女がどんな魔女かを思い出し、なにやら複雑な表情をしていたのだがしばらくしてため息をつく



と…

「ええ、構わない。どこに行くかは決まってるのかしら？決まってるのなら…」

その魔女が出没するのはほむらの統計上では見滝原の病院の近くだ。やはり、病院だけあってかなりの人が出入りするので魔女が姿を現すとなると大規模な被害が予想できる。なので、いつ出現してもいいようにほむらが魔女の情報を掴んでいる事は伏せつつ、その近くでスタンバイしておくように伝えた。

余談だがそこには上條恭介というほむらのクラスメートもいた。彼はさやかなの幼なじみで彼女が密かに思いを寄せる相手らしい。

(今回の魔女は強敵。それに困った事に私には武器がない…マミと今の私ではやられてしまう可能性もある。底が知れないカービイの力の真価を見る時がきたかもしれないわ)

………

放課後となり、ほむらは日直の仕事を済ませてマミと待ち合わせた校門へ行く。下校する他の生徒たちの中からマミの姿を探した所、彼女はすぐに見つかった。

なぜか、楽しそうに談笑をするまどかとさやかなの姿もある。二人がいる理由はすぐに察しがついた。

「あ、暁美さくん！こっちこっち！」

「…これからいくのは魔女探索でしょう？どうして一般人である彼女たちもいるのかしら？」

“それは僕から説明させてもらうよ。暁美ほむら”

どこからか姿を現し、器用にまどかの肩に乗るキュウベえ。このように白い謎の生き物が下校中である今の時間帯に校門に現れるというのは目立つと思うかもしれないが彼の姿はカービィとは違い、何か細工をしているのか特別な力を持っている者にしか見ることができない。

なので当然周りの学生たちはまどかの肩に乗る地球外生命体に興味を示す事なく通り過ぎていつていた。

“魔法少女になるにしろならないにしろ、彼女たちには一度魔法少女とはどんなものか見せた方がいいと考えてね。聞けば君たちはこれから魔女探索に行くそうじゃないか？その姿を見ればきつと彼女たちもいい経験になるはずさ”

「危険すぎる…！方が一の事があつてからでは遅いのよ？巴さんもうしてそれを許可したの！」

「まあまあ…暁美さん大丈夫よ。私に暁美さん、それにカービィもいるのよね？どんな魔女がきても平気よ！」

ママは有り余る胸を張ってそんな事を言っているが魔女との戦いはその油断こそが命取りである。

ベテランである彼女ならば考えればすぐにわかる事であろうが、未来の後輩になるかもしれない彼女たちがいる事と誰かと一緒に戦えるという喜びから彼女の判断力は低下しているようだ。

乗り気であるママの説得は不可能と考え、今度はまどかとさやかに向き直る。

「…あなた達はそれでいいの？命の保証はできないわよ。まどか、美樹さやか」

「…心配してくれてありがとう、ほむらちゃん。でも、私ほむらちゃんやカービィがどんな事をしているのか見てみたいのっ」

「なんであたしだけフルネーム…あたしも魔法少女に興味があるんだ

よね。ま、あんたの気遣いには感謝しておくよ！」

「…はあ…もう勝手にしなさい…でも、戦いが始まったら絶対に後ろで待機しておく事。いいわね、まどか？」

「だからなんでまどかだけ〜!!」

## 10. お菓子の魔女 Battle! 前編

黄色に光り輝くソウルジェムを手のひらに乗せて見滝原の町を歩くマミとそれについていくまどかとさやかとほむら+まどかの肩に乗るキュウベえ。

マミのソウルジェムに反応があれば魔女が現れたという事になる。魔女が現れるだいたいの場所と時間がわかるほむらが時計を見た所、出現するのはもう少しといったところだ…そう考えていたその時!

『~~~~よ…ぼ〜よ!』

日課の昼寝から目を覚ましたのかカービイの声がほむらの指輪から溢れ出す!急に響いたぼよぼよ声にほむらはハツとなって周りを見渡すが、幸い他の人に聞かれる事はなかったようでホツとする。

「今の声ってカービイ?」

「ええ…今起きたのかしらね。今回の事は伝えてあるから気合いが入っているんだと思うわ」

「…そういえばカービイってほむらちゃんやんが学校にいる間ずっと一人でいるんだよね…?それは可哀想だよ!ほむらちゃん!」

口元をへの字にして怒った様子のまどかがほむらに顔を近づける。普段おっとりとしている彼女が見せるこの勢いに思わず後ずさりをしてしまうほむら。彼女はたじたじとなりながらも反論する。

「そ、それはそうなのだけど…カービイの姿は人に見えてしまうから家で留守番させて出歩かれたら騒ぎになるでしょう。だから、こうして盾の中に入れて一緒に行動するしかないのよ」

「でも、カービイが喋っちゃうと今みたいに声が外に漏れちゃうんだよね?どうにかならないの?また授業中に突然カービイの音が響くのは勘弁なだけで」

“また”というのは今日の授業中、小テスト中で静まり返った教室に突然カービイの声が響く事件が起きてしまった事である。

その時は以前と同じように電話の着信音と誤魔化したかそう何度も誤魔化する事はできないだろう。それを思い出したのかほむらは苦虫を噛み潰したような顔をしてため息をついた。

「それが出来れば苦労はしないわ…はあ…」

一応、ほむらが学校に行っている間にカービイを預けられるようなあてはある事にはある。

ほむらも魔女退治がてらそのあてにしている人物を探しにゲームセンターやスーパーなどには行って探しているのだが、一向に見つからないのだ。

「カービイには申し訳ないけれど…まだ当分は盾の中ね」

「じゃあせめて喋っちゃダメっていうのはなんとかならないかな…？」

「…それは…」

「キュウベえと話をする要領でテレパシーで会話する…というのはどうかしら？キュウベえとはこうして話せているわけだし」

先導して歩くマミの言葉にハツとするほむら。テレパシーというのは試した事はなかった為、さっそく盾の中にいるカービイにテレパシーを試みる。

『カービイ…聞こえる？ほむらよ。聞こえるなら何か言葉を頭に浮かべてちょうだい』

(???)へお…や…つ…

おやつを要求をしてくるカービイの言葉がほむらの頭に響いた！

もう少しの辛抱よ…そうほむらは彼に伝えてまどか達に結果を伝える。

「テレパシーは可能みたい。多分、これだったらあなた達もカービイと会話できるはずよ」

「ええ!? 私達、もう既にそんなマジカルな力がく?」

「そうよね…キユウベえ?」

“ …僕や君たち魔法少女が間に入って中継すれば出来なくはないね”

という事なのでキユウベえを中継役とし、まどかやさやかでもテレパシーに参加できるようになった!

学校や外出先でもほむらが中継役となればテレパシーでカービイと会話できるようになる。その事に無邪気に喜ぶまどかを見てほむらもつい頬を緩めていたのだが…

「…っ! 暁美さん!」

突如、先導して歩いていたママが声を上げる。その理由はほむらの指輪となつているソウルジェムが妖しく光を放っている事からすぐに理解した!

「魔女…ね。離れた場所じゃなくて運が良かったわ。行きましよう!」

「ええっ! 鹿目さん、美樹さん! 絶対に私か暁美さん、カービイでもいいわ。とにかくそばを離れない事、いいわね?」

「はいっ!!」

そうして、彼女たちは近くの見滝原総合病院の外れにて不気味に輝きを放っている魔女結界を発見。中から漂うその異様な雰囲気魔法少女ではないまどかとかさやかは息をのみ肩を震わせていた。

そんな二人を元気づけるかのようにママが微笑みかけると…一瞬にして魔法少女の姿に変身をする！まどかとさやかに向かってウインクしているママに続き、ほむらも素早く変身を済ませた。そして…

「出番よ。カービィ！」

∩

c (???) へぼよっ！

「わっ！カービィ！なんだかすごいやる気だね…」

盾からカービィの手を掴み、取り出すとカービィはハイ！とポーズを決めて現れる。どうやら気合いは十分のようである。というよりもまだかまだか…ともう待ちきれないようであった。

(カービィにはどんな魔女が相手かは伝えてある。どういう場所かも…！そりゃあやる気も出すわね)

「うふふっ…カービィも暁美さんも準備万端ね！さあ、いきましょー！」

とママが言うやいなやだれを垂らしたカービィが風のように速く魔女結界へ飛び込んでいった！なぜ、よだれ…？なんて考えていたほむらを除く他の者たちだったが結界に入った事でその理由を理解する。

「あ、あははっ…」

「あのずんぐりピンク君が飛び出す訳だわ〜」

結界を越えた彼女たちを待ち受けていたのは…なんと人の大きさを上回るであろうプリン！ドーナツ！そういつたスイーツの数々がそこら中に溢れかえるお菓子の世界だった。

ちなみにカービィは片っ端からそのお菓子を吸い込み、美味しそうに食べている。既にほむら達がいる入り口にあつたお菓子は全て食べ尽くされており、一直線に見える道の先にあるお菓子を全て食べ尽

くす勢いでカービィは進んでいた。

「み、見ているこっちが胸焼けしそうな食べっぷりね…でもよく見てみるとあの子、使い魔も一緒に吸い込んでる！」

丸っこいネズミのような使い魔が巨大ショートケーキの後ろに隠れていたのだが…カービィは壁としている巨大ショートケーキもろとも後ろの使い魔をも飲み込んでいたのだ。これにはマミも苦笑いである。

「す…すっげ〜もうカービィ一人でいいんじゃないかな？」

「でも、あ…あんなの飲み込んで大丈夫なのかな…？カービィ…」

“彼は味はともかく吸い込める物ならなんでも飲み込み、その物の持っている能力を扱う事ができるんだ。だから、問題はないはずだよ”

“ちなみにあの使い魔は何の能力も持っていないからコピー能力は使えないみたいだ”なんて解説するキュウベエの話に耳を傾けていた一同だが、そろそろ先に進むべくほむらはカービィに声をかける。

「カービィー！もう結構食べたでしょう？そろそろ行きましょう！カービィ？」

片っ端から食べ尽くしているカービィに声をかけたほむら。しかし、カービィはその声が届いていないようで夢中になってお菓子と使い魔を頬張り続けている。

その想像以上の食い意地にはほむらも呆れて頭に手を置き、空を仰ぎ見ていた。

「カービィー！いこうよ〜！カービィ！！」



「あらら…転校生はともかくまどかの呼びかけでもダメか…」

「…もう彼はほっといてあげましょう。私と暁美さんだけでも魔女の相手は務まるわ」

そう口にしたママはお菓子を吸い込むカービイの横を通り過ぎる。さやかは慌ててママについていくが、やはりまどかはカービイが気になる様子。ほむらと共に残っていたのだが…

「…まどか、行きましょう。カービイならすぐに追いかけてきてくれるはずよ」

ため息をついたほむらに連れられ、名残惜しそうなまどかも先へと進んでいった。

そして、この場には吸い込みの恐怖に怯えるネズミの使い魔とそれをお菓子ごと吸い込むピンクの悪魔だけが残された…

## 11. お菓子の魔女 Battle! 中編

もりもりとそこら中にあるお菓子を食べるカービィ。そんな彼を置いて先に進むほむら一行は結界内を警備しているのか、辺りを警戒している使い魔を避けつつ魔女が潜む結界の最深部に向かっていた。そんな中、ふとまどかがほむらとマミに向かってこんな質問をする。

「そのー！こんな時に聞くのはどうかと思うのはわかってるんだけど…二人に質問があるんですっ」

「…なに？まどか」

「そんなにかしこまって…どうしたの？」

「二人は…どうして魔法少女になろうと思ったんですか？」

その質問には両者とも衝撃を受けていた。ほむらはそっぽを向いて話すつもりはないとでも言いたげな表情をしていたが、マミの方はしばらく考えた後に重々しくその口を開く。

「私の場合は…願いなんで考える暇はなかったの。交通事故で私たちの家族が死にかけて…そこに現れたのがキュウベえだった」

「あっ…じゃあ」

「そう。助けてほしかった私は彼に助けを求めたわ。それが私が魔法少女になった理由」

しんみりさせちゃってごめんね…そう皆に告げるマミの顔は悲しそうだった。しかし、彼女は後悔などはしていないだろう。それは同じ魔法少女であるほむらにはわかった。

「だから、二人がもし魔法少女になりたくて願いに困ってるんだったらキチンと考えた上で決めてほしい…私には出来なかった事だからね？」

真剣に自分たちの事を考えてくれるママに素直にまどかとかさやかは頷く。ちなみにほむらは余計な口が挟まれないようにまどかの肩にいたキュウベえを手にしていった。

すると、キュウベえが呆れたという様子で首をフルフルと振りながら彼女にテレパシーを送る。まどか達が反応していないという事はどうやらほむらにしか伝わっていないようだ。

“ やれやれ：彼女たちの契約を阻止しようとしているのかい？  
だったら無駄だよ。僕はどんな手を使っても彼女たち：いや、鹿目まどかを魔法少女にしてみせる”

『インキュベーター：お前の思い通りには絶対にさせない：！二人：いえ、まどかは絶対に私が守ってみせる』

くしゅん！とさやかが特大のくしやみを放った気がするが気にしない。今にもキュウベえを始末してしまいたい程に憎悪を向けるほむらも彼は意に介す様子はない。

“ やっぱりどこかで僕の情報を掴んでいたみたいだね。君のその情報はカービーからかい？”

『答える必要はない。今すぐそのうっとうしい口を閉じなさい：あの子たちの前だから何もしないであげられるけど、それ以上口を開くなら私も容赦しないわ』

“ 僕を殺した所で無駄だという事は理解しているかい？まあでも無駄に潰されるのはもったいない：でも最後に忠告を君にしてあげよう”

キュウベえの赤い瞳がほむらを見据える。その可愛らしい見た目とは裏腹に感じられる異様な雰囲気にはほむらは不快感を顔に滲ませていた。

“カービィ：彼は僕と同じ宇宙から来た存在だ。ならば、彼が優先するのはなんなんだろうね…この言葉の意味は君にならわかるかな？ 暁美ほむら”

『…っ!? 黙れ! 次はないわっ!』

冷静沈着なほむらだがその言葉に揺れてしまった。キュウベえは嘘はつかない…カービィはキュウベえと同じ宇宙からやってきた者。

思えば自分は安易に信用をしてしまったが本当に信じてしまつてよかつたのか…実はキュウベえの仲間で自分の武器と食費を減らす事が目的なのではないか。

彼を一度仲間と認めたはずなのにキュウベえの言葉に惑わされ、そんな事が脳裏に一瞬でもよぎってしまったほむらは思わず感情を露わにしてキュウベえの言葉を否定した。

彼は“やれやれ…いずれわかる”と口にした後、息を切らし、取り乱すほむらに話しかける事はなくなった。

(カービィ…)

「…暁美さん、 暁美さん…!」

カービィの事で頭の中がごちゃごちゃになっていたほむらだがマミの言葉で我に返る。どうやら、ほむらが思考している内に魔女が潜む最深部についたようで相変わらずお菓子で一杯な広々とした空間に出ている。

広さでいうなら学校の敷地とどっこいどっこいといった所か、その中心部には10mはある異様の長さの椅子があり、魔女はその椅子に腰掛けているのだが…

「なんか…弱そう。拍子抜けしちやつたなあ」

「なんだかカービィみたいで可愛いねっ!でも、ちよつと不気味な感じ…」

二人が話す通り、魔法の姿はキャンディーを思わせる丸っこい頭にフリフリのマントをつけたものだった。

その大きさもカービィ程しかなく、まるで人形のような姿の魔法を何も知らないで見た者は可愛い印象を受けるだろう。しかし…

「見た目に騙されてはダメよ。奴は私が見てきた中でも一際強力な魔法…私と巴さんの二人がかりでも厳しい戦いになる事が予想されるわ」

「あら、私も舐められたものね？さすがにあんな魔法から遅れを取るほど私は弱くないわ。もちろん、暁美さんも昨日の戦いぶりを見た限りでは全然余裕だと思うけど？」

「その油断が命取りになるの。魔法を相手に油断をして目の前で命を落とした魔法少女を何人も見てきた…だから！」

「わかってる。わかってるわ、暁美さん。さあ行きましょうか！」

本当にわかってるのか不安ではあったほむらだが、もうこれ以上マミに言っても無駄だと切り上げて盾からゴルフクラブを取り出す。

まだかとさやかはゴクリと息をのんで戦いの邪魔にならないように人の背ほどあろう巨大なドーナツに身を隠していた。

「さて、一気に決めさせてもらおうわよ！暁美さん、サポートをお願いします！」

そう言ったマミの手元に光が集まり、何かを形作っていく。それは細長い銀のマスケット銃、彼女は魔法でそれを生成すると数10m先にいる魔法に向かって撃ちだした！

お菓子の魔法は気づいていないのか、それとも避ける必要もないという事なのかその場から動かず、銃弾はすんなりと魔法の胸元を貫く。マミは撃ったマスケット銃を地面に突き刺して、魔法の様子を窺う。

「やった…？いえ、まだね！」

「私がいくわ…！トドメは任せる！」

衝撃で椅子から転げ落ちる魔法の落下地点にはいつの間にかゴルフラブを構えたほむらがいた。ほむらはそのまま魔法の頭目掛けてフルスイング！

魔法は放物線を描いて空高く打ち上げられる。その見事なスイングっぷりに観戦していたまどかとさやかが拍手を送っていた。

「ナイスショット！暁美さん…！追撃するわっ！レガール・ヴァスタアリア！」

マミの手から黄色い何かがふわふわと浮かび上がり、体制を整える魔法に向かって伸びる。それはマミの能力「リボン」彼女はリボンを自由自在に操る事ができるのだ。

マミはリボンで魔法をぐるぐるに巻きつけ、その身体を拘束！お菓子の魔法は小さな身体を懸命に動かして抜け出そうとするがマミのリボンから抜け出す事できない。そして…

「仕留めるわっ！」

マミは右手に魔力を集中させ、リボンで身の丈ほどある巨大な大砲を瞬時に作り上げる！銃口に光が収束されていき…

「ティロ・ファイナーレッツ!!」

その光を撃ち出した！巨大なレーザーが空高くにいるリボンで絡まれ動けないお菓子の魔法に向かってぐんぐんと伸びていく。

それはそのままお菓子の魔法を呑み込み、大爆発を引き起こす。その衝撃は地上にいるほむら達にも伝わり、まるで地震のようにこの魔法結界内が大きく揺らいた。

頭上は煙で覆われ、魔女がどうなっているのかはわからない。しかし、先ほどの攻撃をくらってタダで済んでいるはずもないだろう。ほむら以外の誰もがそう確信していた。

しばらくの間、沈黙がこの場を支配していたが…

「やつ…やった…?」

「あ、あははっ…さすがマミさん！頼りになる〜!」

沈黙に耐えきれなかったのかまどかが口を開く。それにさやかも続いてさやかと二人で喜びを分かち合っていた。

マミは魔法でティーセットを出して優雅にティータイムを楽しんでいたが、ほむらは空を見上げてお菓子の魔女の動きを警戒している。

この程度で終わるはずがない…そうほむらは言っているかのようだった。マミはそんな彼女に微笑みかけるとティーセットを指を鳴らして消し、ほむらの元へ歩き出したその時！

それは一瞬の事だった。警戒していたほむらでさえ時間を止める事ができないほどの一瞬の出来事。

「えっ…あっ…!」

黒煙の中から大蛇のような黒く長い化け物がとてつもないスピードでマミに迫っていく。色とりどりでカラフルな瞳を持つソイツは目にも留まらぬ速さで呆然としているマミの目の前まで接近し、一人などまるごと飲み込めるであろうその口を開いた。

「マミっ!!」「マミちゃん!!」

ほむら達が叫ぶも突然の事にマミは動く事が出来ず、目を瞑る事しかできなかった。目を瞑り死を待っていたマミ…しかし、1秒、2秒…いつまで経ってもマミに死が訪れる事はなかった。

おそるおそるマミが目を開くと…視界に飛び込んできたのはゼロ  
距離で大きな口をパクパクさせ、マミに噛みつかうとする変異したお  
菓子の魔女とその後ろで周りのお菓子ごと魔女の身体を吸い込んで  
いるカービイの姿であった！

(っ、o、c) ミシミシ

「カー…ビイ…？私…生きて…」



## 12. お菓子の魔女 Battle! 後編

暁美ほむらと巴マミによる連携攻撃で誰もが倒したと思っていたお菓子の魔女。しかし、その攻撃で本気を出したお菓子の魔女は姿を変え、油断をしていたマミに襲いかかった!

お菓子の魔女の攻撃にマミは動く事はできず、ほむらも時を止める間もない。これから起こるであろう出来事に戦いをしていたまどかとさやか顔は絶望へと染まっていく。そして、マミの命は散った: そう思われたのだが:?

(っ、o、c) ミシミシ

「カービィ!?!」

彼は来てくれた!大蛇のような長い身体先端にある尻尾をカービィは周りのお菓子を吸い込みながら吸い込み続けている。

それにより前に行こうとするお菓子の魔女の動きを止めていたのだ。魔女は目の前にあるご馳走(マミ)を食べるべく必死に口をパクパクさせているが、カービィの懸命の吸い込みがそれを阻止していた。

「あ……ああっ……」

カービィが助けてくれなければ死んでいた:もう目の前まで迫っていた死の实感が彼女を襲っていた。魔女が目の前にも関わらずマミは恐怖でその場にへたり込んでしまう。

するとそんな彼女の隣に何者かが一瞬で現れる。それは離れた距離を時を止めて接近した暁美ほむらだ。

「暁美……さん」

「巴さん……!立てる?下がるわよ!」

カービイが魔女を抑えている内に腰を抜かしているマミに手を貸してまどか達がいる後方へ下がる。

二人はすぐに恐怖で震えているマミのそばに駆け寄って無事であったとわんわん泣いていた。

「…あいつを仕留めるのは私とカービイ。あなたはそこで頭を冷やしていなさい」

「…ええ…頼りない先輩でごめんね…」

その言葉に返事をする事なくほむらはお菓子の魔女の噛みつき攻撃をジャンプしてかわしているカービイの元へ駆け出した。

当たらない事に苛立ったお菓子の魔女は身体を地面に叩きつけ、床のクリームを辺り一帯に撒き散らす！近くにいたカービイは飛んできたクリームが顔のへばりつき、前が見えない様子だ。お菓子の魔女はその隙について突撃。

「危ない！…ふう…まだやれるわね？」

(っ?~c)へぼよ！

すんでの所でほむらに回収され、ゴシゴシとクリームで汚れた自分の顔を拭き、それを舐めとるカービイ。ほむらはいったんお菓子の魔女から距離を取り、離れた所でカービイを降ろす。

「私が昨日徹夜して久しぶりに頑張つて作った爆弾…食べてないわよね?カービイ」

c (???) っココココ

「なら私がアイツを仕留めた方が良さそうね。一撃で決めるわ…あなたは魔女の注意を引いて、出来るなら可能な限り弱らせて！」

身体をくねらせながら猛スピードで近づいてくるお菓子の魔女の噛みつき攻撃を左右に別れて回避するカービイとほむら。

カービイは勢い余って通り過ぎていった長い身体にスライディングキックで攻撃を仕掛け、注意を自身に逸らせる。すると…

c (???) (へばよ…！)

カービイが逃げられないようにだろうか…彼の周りを自身の長い身体でとぐるを巻いて壁を作るお菓子の魔女。魔女はカービイの頭上で舌なめずりしながら狙いを定めている！

「カービイ！これを！」

お菓子の魔女に囲まれた身体の外からほむらの声が聞こえてきたかと思えば上空から何かが降ってくる。カービイは口を大きく開きそれを吸い込んだ！

すると、カービイが光輝き、そのシルエットが変わっていく…彼が起こす光の中からバアンと発砲音がしたかと思えば魔女の顔が爆発を起こした。

「あの格好…!?変わった…」

「カービイ…なの？」

巨大なドーナツの影に隠れて様子を窺っていたまどか達はその目を疑った。なぜなら目を回した魔女の横から飛び出してきたカービイの姿がピンクボールであった姿から変化していたからだ。

「私…?」

頭にかぶった羽根飾りがついたベレー帽。その手にはカービイの背丈を超えるほどの銃身のマスケット銃。カービイの姿は魔法少女のバマミのようであった。

「? ? ?」



消滅までは至らない！

揃っていた鋭利な歯がボロボロとなり、片目が開かない様子のお菓子の魔女はところどころコゲコゲな身体をしながら大技を放って無防備となったカービィを吹き飛ばす。

そして、ズシンと地面を揺らしたかと思うと魔女は目の前で目を回すカービィに見向きもせず、身体をくねらせながら上空へと浮かび上がっていつてしまう。

「あつ！あの魔女…もしかして…！」

「まずい！逃げるつもりよ！くっ…ここで逃がしちゃ…」

「起きてっ起きて！カービィ!!」

カービィに手痛いダメージをもらった為か、動きが遅くなったお菓子の魔女はふらつきながらも上空に出口のゲートを作り上げて逃げようとしているようだ。

この結界外に出られたら探知できなくなるかもしれない。目を回すカービィを見ながらそう思ったママはすかさず立ち上がり、マスケット銃を作り上げるが…

「その必要はないわ…巴さん」

「ほむらちゃん!?!」「転校生!?!」

銃を構えるママの前に突然ほむらが現れる。魔女が逃げようとしているのに何事もなかったかのように落ち着き払った態度を見せるほむら。

「その必要はないって…暁美さん…！あなた…」

そんな彼女にママが怒りの声を上げようとしたその時、上空にて逃げようとしていたお菓子の魔女がピタッと動きを止める。その様子にまだか達三人は不思議に思っていたのだが…

「出来もしない約束を私はしない。魔女は私とカービーが仕留めると言っただはずよ？」

「えっ…あっ!？」

突如として動きを止めたお菓子の魔女の身体が異様な形に膨れ上がっていく。そして、風船のように極限まで膨らみあがった魔女の身体から光が漏れ出したかと思えば次々と光が漏れ出し…この結界の中に閃光が走った。

### 13. 佐倉杏子との出会い

「曉美さくらん！まってる〜！」

いつもと同じ時間、いつもと同じ通学路。しかし、いつもと違うのは彼女、巴マミがほむらの横に並ぶ事だ。スタスタと早足で歩く彼女に追いつく為にと走ってきたマミは息を整えて、満面の笑みをほむらへと向ける。

「おはよう！カービィは起きてる？起きてるのなら挨拶したいのだけど…」

「お、おはよう。巴さん…あの子はまだ寝てると思うわ。またお昼に話しかけてあげて」

そう…と意気消沈するマミであったが気を取り直して昨日はくがあつただとか、今度一緒にどこかに出かけようだとか、口数が少ないほむらに向かって積極的に話しかけていく。

ほむらも話を聞いていないわけでもなく、満更でもない様子。どうしてこんなにマミとの仲が急接近したのかというと…やはり、あのお菓子の魔女との戦いの出来事が大きかった。

(マミ…まさか、ここまで仲良くなれるとは思ってなかったわ)

ほむらの忠告を軽視し、お菓子の魔女に対して大きな隙を晒してしまった事。そして、カービィに助けられなければ確実に死んでいたという事。

カービィとほむらはそんな彼女からしてみれば命の恩人だ。さらにずっと一人で孤独に戦ってきた事もあつてか二人の心強い仲間が出来たマミは急速に心を開いていった。今では登下校や放課後のパトロールだけではなくお昼も一緒にいる。

「今日の料理は自信作なの！うふふ…お昼はカービィと一緒に楽しむにしておねっ」

「ええ、あの子にも伝えておく。ありがとう、巴さん」

「暁美さんは放っておくとコンビニで買った物だけでお昼を済ませてしまうんですもの。カービィはともかく暁美さんがそれじゃあダメよ？」

ちやうど学校の門の前についた彼女たち。学年の違う二人は別れ、ほむらは自分の教室へと向かう。

そして、教室に入った彼女に気づいたまどかが優しい笑みを浮かべて声をかけてきた。

「おはよう、ほむらちゃんっ」

「おはよう…まど 《ぼよっ！》」

まどかに返事を返すほむらの声を遮ったのは今日を覚ましたカービィであった。しかし、周りにいるクラスメートたちはそんなカービィの声には見向きもしない。

なぜなら、カービィはテレパシーで会話をしている為である。彼の声が聞こえるのはほむらやママの魔法少女、もしくは魔法少女の才能を持つまどかやさやかといった特別な者だけ。

なので、目の前のまどかはもちろん机で突っ伏して眠っていたさやかも目を覚ましてこちらに近づいてくる。

「おはよう転校生にカービィ」

「さやかちゃんったら〜カービィにはこうだよ？『おはよう！カービィー！』」

《まろかくまろかく！》

「カービィったら昨日もまどかに会いたい会いたいってうるさかったのよ…だいぶあの子に懐かれてるのね…」



そう、カービィはなぜか物凄くまどかに懐いている。それは共に生活しているはずのほむらやおいしい食べ物を作って持ってきてくれるママ以上にだ。

「ほほう…つまりは嫉妬しているわけですか？ 転校生」

「愚か者ね。寝言は寝て言いなさい。私とカービィは協力関係を築いているだけ…あの子が誰と関係を持つとうが私には関係ないわ」

「ホントに…？ まあいいけど…」

まどかとカービィが仲良さそうに話をしている中、ほむらと会話していたさやか顔がふいに真剣なものとなる。

「ねえ、ちよつとあんたに話があるんだ。次の休み時間いい？」

どこかせわしない様子のさやかがほむらに耳打ちする。ここで話せばいいというのにわざわざ耳打ちするという事は一般人には聞かせられない話なのだろう。

ハア…と溜め息をついたほむらは頷き返し、席に着く。

(このタイミングでくるといふ事はおそろく…)

………

……

…

一時間目の授業も終わり、休み時間になるとさやかに促されるまま屋上へとやってくるほむら。何かに迷っているのか、思いつめた表情をしているさやかに用件の大体の見当がついたが黙って彼女の言葉を待った。

やがて、決心がついたのか緊張した様子でさやかは重々しく口を開く。

「転校生…あたしき、魔法少女になろうと思うんだ」

「……………そう」

何度も何度も考えた上での結果なのであろう、さやかの瞳に揺るぎはない。内心溜め息を吐きつつ、ほむらは素っ気なく返事を返す。そして…

「なるかならないかはあなたの勝手。でも、これだけは言わせて…一度魔法少女になってしまった者はもう救われる望みなんてない」

「どういう事よ?」

「言葉通りの意味よ。あの契約はたった一つの希望と引き換えにすべてを諦めるって事…その覚悟ができないなら軽々しく契約するなんて言わない方がいいわ」

「…っ! あんたが何を言ってるか全然わかんない。けど、一応あたしの事を考えて言ってくれてるのはなんとなくわかるよ」

「もう少しよく考えてみる」…そう言い残し、さやかはこの屋上を後にする。残ったほむらはそよ風になびく髪を軽く抑えながら再び大きな溜め息をついた。

「美樹さやかが魔法少女になるのも時間の問題かしら…刻一刻と時間が過ぎていく。大丈夫…今度こそこの手で…」

……………

あつという間に一日の授業も終わり、待ちに待った放課後となる。クラスメートたちは部活に出かける者、遊びに行く者と学生生活を謳歌するのだろうか：ほむらはそうはいかない。

彼女はホームルームが終わると同時に席を立ち、荷物をまとめていた。

「あれ：ほむらちゃん。そんなに急いでどうしたの？」

荷物をまとめ終わり、そそくさと教室を出て行こうとするほむらに気づいたまどかが声をかける。

「探している人がいて：隣町の風見野までいかないといけないの。悪いけど巴さんにパトロールはいけないって伝えてもらえないかしら？」

「あつ：うん、わかった！さやかちゃんも今日は無理って言うてたし：今日は中止になりそうだなあ」

「そう：じゃあ巴さんと一緒に遊びに行つてはどうかしら？」

「そう言ってみるっ！ばいばい、ほむらちゃん！『またね、カービィ！』」

《まろか！ばいちゃ！》

まどかに別れの挨拶を告げたほむらは見滝原中学校を後にして、この見滝原市に隣接する風見野市に向かう。風見野へはバスで10分〜20分といった所ですぐについた。

彼女がわざわざ風見野市へ来た理由、それは先ほども言った通り人捜しの為だ。その人物の名は佐倉杏子、ここ風見野で活動をするベテランの魔法少女である。

とりあえずスーパーの試食コーナーや彼女の行きつけのゲームセンターに行ってみるも佐倉杏子の姿はない。

「いない…こうなったら…！」

そう言ったほむらが向かったのは町から少し外れた所にある小さな教会だ。老朽化が進んでいるのか建物の外観は所々穴があいており、今にも崩れそうな印象を受ける。

訳あって佐倉杏子はこの教会を拠点としている。勝手に入るわけにもいかないのでとりあえずノックを試してみるほむら。

「返事は…ないわね。いないのかしら？」

《…じゅるり》

中からの反応がない事から留守であると考えたほむらが目を改めようとしたその時、なにやらカービイが中から何かを感じたようで声を上げている。

その為、諦めずに何度もノックを繰り返していると…

「あつ…ドアが…」

あんまり力をかけずに叩いていたはずののだが、木製のドアはバタンと音を立てて崩れてしまった。勝手に崩れたなんて言い訳しようと思いつつ、中を覗き込む。

中は外から見えるような今にも崩れそうなイメージとは程遠く、床に食べ物のゴミこそ転がっているものの意外と掃除は行き届いている。

そして…奥の祭壇でひび割れたステンドグラスから光を浴び、祈りを捧げている少女の姿が目に入った。彼女こそ…

「佐倉杏子…」

《アンコ…！》

よれよれのパーカーとショートパンツを身につけた赤いポニー

テール、祭壇の前で片膝をつき祈りを捧げる彼女が風見野の魔法少女である佐倉杏子だ。

## 14. 打倒！ワルプルギスの夜！

祭壇の前で何を思い、祈りを捧げているのか…佐倉杏子が入り口で自身を見つめるほむらに気づいているのかいないのか、その場からジツと動く事なく、片膝をついて両手を組んでいた、のだが…

《アンコ！アンコ！》

「…だあぁっ！うっせえなっ!!」

カービィは一般人には聞こえないようにテレパシーの要領で声を発している。何の能力も持たない一般人であればその声は聞こえないのだが、逆を言えばそれ以外の聞こえる人にはカービィの声はダダ漏れだ。

なので魔法少女である佐倉杏子にはアンコと連呼するカービィの声は耳が痛い程に聞こえており、もう堪えきれないという様子で祈りを中断し、ズカズカとほむらがいる玄関に駆け寄ってきた。

「さっきからうるさいんだけど！しかもアンコってアタシの事お？アタシは杏子きょうこ！佐倉杏子さくらきょうこだ！」

「えっ…ええ、ごめんなさい…カービィ、ちよつと静かに…」

《アンコ！》

「杏子きょうこだっつってんだろ！ったく…迷子のガキか？ここはアンタが来るような場所じゃねえ！とつとと帰んな！」

またもカービィにアンコと呼ばれて怒る杏子を見てこのままでは話が進まない見たほむらはいったん盾を具現化させて中から無邪気に名前を連呼するカービィを取り出す。

ㇿ

c (???) へはあい！

「ごめんなさい…少し椅子を借りるわね。カービィ、こつちで大人しくしていてね。ほら、ガムもあげるから」

ポーズを決めて現れるカービィを教会の会堂用の長椅子に座らせ、このような時の為に持ち歩いてるガムを彼に渡す。ほむらも最近気づいた事なのだが、ガムならば噛めば噛むほど味が出る為、カービィの早食いを僅かに抑える事ができるのだ！

突然、ピンクの生き物が現れたと思いきや、ガムを噛んで大人しくする姿を見て唾然としていた杏子、しかし、すぐに我に返り炎を纏った赤い槍を手元に具現化させる。

「そいつぁ…魔女の使い魔か何かか!?それにテメエ…どうやら同業者のようだな…!」

「ええ…話が早いようで助かるわ。佐倉杏子」

「アンタはアタシの事を知ってるようだが…アタシはアンタたちの事を知らねえな。何者だ?何しにここにきやがった?」

辺りの空気がビリビリと張り詰めたものとなる。鋭い眼差しをほむらと長椅子に座りガムを噛み締めるカービィに向ける杏子。

おそらく下手な事を言ってしまうとすぐさま戦闘に入ってしまうだろう。なので、慎重に言葉を選んで話そうとするほむらだが…

(っ?ゝ)っへガム!

「……………」

そんな中、どうやらガムの味がしなくなり、おかわりを要求するカービィがほむらの足元にやってくる。

ほむらはスカートのポケットからガムを取り出し、丁寧に包み紙をのけてあげてからカービィの口に突っ込む。すると、カービィは元の長椅子に大人しく座り、ガムを咀嚼していた。

しばらく何ともいえない雰囲気がこの場を支配したが、こほんどわざとらしく咳をしたほむらが話を続ける。

「…失礼。私は暁美ほむら、彼はカービー。私は見ての通り魔法少女よ。あの子は…まあその…私にもよくわからない。キュウベえが言うには宇宙人みたいよ」

「わけわかんねえ…まあてめえらの素性はわかった…敵じゃねえならいったいアタシに何の用だ？恨み言やグリーンフシードをわけてくれなんていうのは勘弁だぜ」

白旗と言わんばかりに両手を上げて淡々と話すほむらとくちやくちやと音を立ててガムを幸せそうに噛み締めるカービーに杏子も戦意も削がれたのか槍を地面に突き立て、腕を組んでいる。

その様子に内心ホツと一息つき、そして用件を切り出した。

「単刀直入に言わせてもらおうわ。佐倉杏子、私たちと手を組んでほしいの」

「何を言い出すかと思えば…ふざけてんのならさっさと壊した出口を直して帰んな。アタシも暇じゃないんだ」

会ったばかりで名前しかろくに知らない魔法少女から急に持ちかけられる共闘には杏子も溜め息をついていた。

しかし、ほむらの次の言葉によって杏子もその共闘について真剣に考え始める事となる。

「…最強の魔女、あなたも名前は聞いた事があるはずよ」

「ああ？そいつは確か…」

「【ワルプルギスの夜】ただ一度具現しただけでも何千…いや何万もの人間が犠牲になる…！ここでこの話をするという意味はどういう事かわかるでしょう？」

いきなりの話にちんぷんかんぷんだった杏子も気づいたようで興味深そうにほむらを見ている。



「なぜわかる？そんな情報でアタシが信用すると思うのか？」

「信じてもらえなくてもいい。でも三週間…三週間だけ手を貸してほしい。グリーンフシードも衣食住も全て私が保証するわ！」

「…ふうん…そいつは悪くない条件だね。アタシをからかってるってわけじゃなさそうか…」

杏子も真剣に考えてくれているようで両者の間に再び沈黙が流れる。その沈黙を遮ったのはやはり…

(???) へおかわり！

味のしなくなつたガムを飲み込み、おかわりを要求するカービイがほむらの足元にやってきた。ほむらがガムを取り出そうとしたその時！

「おい！カービイとか言つたっけ？そいつ…」

「ええ、そうだけど…」

(っ?~?c) へぼよ？

突然名前を呼ばれた事に振り向くカービイ。杏子はパーカーのポケットをガサガサとまさぐると何かを取り出す。それはチョコレート菓子のRockyで彼女は封を切るとカービイの身長に合わせてかがみ…

「食うかい？」

カービイに向かってそのお菓子を差し出した！もちろんカービイは…

c (???) っへぼよっ!!

「へっ…いい食べっぶりじゃないか。嫌いじゃないぜ、そういうの」

「杏子…？」

「ワルプルギスの夜」の話が本当ならここ風見野も相当な被害を受けるはず。ま、違っても雨風がしのげて飯も食えるならそれでいい！  
乗ってやろうじゃないか！その話にさー！」

……

そんなほむら達の事をどこからか見ている影が一つ。それは可愛らしい外見がどこか不気味に感じてしまうもう一つの宇宙生命体であるキュウベえであった。

“ 「ワルプルギスの夜」を倒す為に巴マミに続き、佐倉杏子とも手を組んだようだね…暁美ほむら”

“ でも、君がどう動こうが鹿目まどかの契約は止められない。たとえ星のカービイが手を貸した所で何も変わらないよ”

“ その為の駒はもう揃っているのだから…さあ、どんな未来がくるのか楽しみだね”

## 15. ハコの魔女 Battle! 前編

和室一間の部屋の中央にあるちゃぶ台を囲むように座る暁美ほむら、佐倉杏子、カービィ。相変わらず無表情でいるほむらとは対照的に杏子とカービィは何やらそわそわしていた。その理由は…

「3分、できたわよ」

Σ(？o?c)へぽよ!!

「キタキタ〜!」

「いただきます! (ぽよー)」

口で割り箸を割り、出来上がったカップ麺の汁をズズツと飲む杏子。カービィは立ち込める香ばしい匂いに興奮しながらもフォークでラーメンをすくい食べている。ちなみにカービィのものはパツクのラーメン五人分をバケツに入れているバケツラーメンだ。

「ふう…ふう…ずるずる…味が濃いわ」

「はふっ…それがいいんじゃないか。なあカービィ?」

\*;. . (？o?c)へズビズビポヨオ!

「もうっ…カービィ! 食べながら話さないの!」

そう言いながらカービィの食べかすを布巾で綺麗に拭き取っていくほむらを見て、お前はおかんか…なんて食べながら思う杏子であった。

「それでだ。あんたグリーンシードどれくらい持ってるのさ? 二人ぶんも用意できんのかよ」

「今グリーンシードは6つ。あっ…これもうマズいわね」

盾の中からグリーンシードを取り出すとその中の1つが溢れてしまふほどの黒い瘴気が溢れ出ていた。これは魔法少女たちのソウル

ジエムに溜まる穢れを取り除きすぎた為、その機能の限界を知らせるものだ。

これ以上、このグリーンフシードを使用してしまうと魔女の卵でもあるこれが孵化し、魔女が再び蘇る事になる。しかもその孵化した魔女がグリーンフシードを落とす保証もないのでやはり、処分するのが一番だ。

「げっ…ばっちな…早くあの白タヌキ呼んで処分してもらえよ」

「その必要はないわ。カービー、お願いっ」

c ( ??? ) っへはい！

バケツラーメンを食べ終えたカービーに瘴気が溢れ出ているグリーンフシードを与えると…なんと！カービーはそれを飲み込んでしまった！

なんとなく想像もついていたのか杏子はケラケラと笑っている。

「まあ…5つもありやあ三週間は余裕だな。問題はワルプルの時だけどね〜アタシらで戦うならもう何個かは持っておきたいかな」

「そうね。他に協力してくれる人はいるけれど…グリーンフシードがある事に越した事はないわ」

「ん？他に誰かいるのか？初耳なんだけど…」

c ( ??? ) っへマミー…マミー！

短い手をくるくると回して特徴的な髪型を伝えているカービー。その髪型と聞き覚えがある名前にビクツと杏子の肩が揺れた。

「マミってまさか巴マミの事かあ？」

「ええ、彼女にはまだワルプルギスの夜の事は伝えていないけど…きつと手を貸してくれるはず。私にカービー、あなたとマミの力があればワルプルギスの夜を越えるのも夢じゃないわ」

「マミの野郎と組むのは気が引けちゃうが…ワルプルまでの辛抱かあ

…はあ、まあ色々善処するよ」

「助かるわ…っ！この気配は…！」

「さっそく出たな…！ちようどいいや、アンタたちの力も見ておきたかった所さっ」

ほむらの指輪のソウルジエムが反応を示している。どうやら杏子のものもだ。それが現すのは魔女の誕生！

溜め息をつきながらグリーンフシードを盾へしまうほむらと拳を手のひらに打ちつけ、笑みを浮かべて立ち上がる杏子。

ほむらが残したラーメンも凶々しくも綺麗に食べるカービィ。彼を盾の中に収納し、ほむらと杏子は魔女が出現した廃工場へと向かった！

………

「酷い有り様ね…」

付近の廃工場までやってきたほむら達は音を立てないように屋根を壊して中の様子を覗くのだが…ほむらの言う通り酷い有り様であった。魔女に魅入られて正気を失った者たちがバケツを中心に囲い、虚ろな表情でそのバケツの中に薬品を混ぜていたのだ。

おそらくあの薬品で集団自殺を図ろうとしているのだろう。フンと鼻を鳴らした杏子が腕を組んでその様子を見下ろす。

「魔女の口づけが見えるな。まったく…どいつもこいつも死に急ぎやがって。バカじゃないの？」

魔女やその使い魔に魅入られた者は魔女の口づけと呼ばれるモノを受けた者は自殺や交通事故など、自らを滅ぼす行動に出るようになるのだ。今集まっている者たちの首もとにはくつきりとその印が浮かんでいた。

代表格の男がこれは神聖な儀式だと高らかに言い放つと集まった人たちは拍手でそれを称えている。よく見るとその人影の中に見慣れた見滝原中学校の制服を着た人物が目に入った。

！  
ピンクのツインテール、自分よりも低い背丈…あれは紛れもなく…

「まどか!？」

「なんだ？知り合いでもいるのか？…ん？ほむら？」

杏子が振り向いた時にはほむらの姿はなかった。彼女が中を覗き込むと薬品の入ったバケツを蹴飛ばし、集団自殺を阻止するほむらと盾から飛び出したカービイの姿があつた！

………

鹿目まどかは震えていた。友人である志筑仁美の様子がおかしい事に気づき、彼女に促されるがままついてきてしまった結果…魔女の影響を受けた集団自殺に巻き込まれてしまったのだ。

(怖い…怖いよお…でも、このままじゃ皆死んじゃう…！)

まどかは臆病な人間である。現に足は恐怖ですくんでしまっていた。しかし、彼女は逃げ出す事はしなかった。

もし、彼女が今逃げ出せばここにいる人たちを見殺しにしてしまう事になる。見て見ぬ振りなんてできなかつたまどかは覚悟を決めて

この集団を阻止するべく走り出そうとするのだが…

「どこにいくおつもりですか？まどかさん？」

「あっ…」

薬品が入ったバケツの元へ飛び出そうとしたまどかの手をグイッと引っ張るクラスメートの志筑仁美。彼女の目は虚ろで気味の悪い笑みをまどかに向かって浮かべている。

「離して！仁美ちゃん！だって、あれ危ないんだよ？ここにいる人達、みんな死んじゃうよ！」

「そう。私達はこれからみんな、素晴らしい世界へ旅に出ますの…それがどんなに素敵なことかわかりませんか？」

「い、痛いっ！痛いよおっ！」

まどかの腕を掴む力が徐々に強くなっていく。その力はとても女子中学生のものとは思えないほど強く、まどかの腕がメリメリと音が立てていた。

懸命に腕を振ってなんとかそれを振り払うもまどかの周りに正気を失った者たちがゾロゾロと集まってくる。

「生きてる身体なんて邪魔なだけですわ。鹿目さん、あなたもすぐにわかりますから…」

「い、いや…助けて…！ほむらちゃん…カービー！…」

囲まれてしまったまどかはもうどうする事もできなかった。涙が溢れる目を閉じて、自分の大切な友人の名前を口にすると…

すると、ドスン…と何かが倒れたような音がこの空間に響いた。続いて声にならない声を上げてドサドサと倒れ込む音が聞こえてくる。まどかが目を開けるとそこにいたのは…

「間に合って良かった…」  
（っ???) っへまるか!

長い髪を翻す暁美ほむらとカービィ。まどかの視界に彼女たちの後ろ姿が飛び込んできた!まどかを囲んでいた人たちは気絶しているのか皆倒れており、薬品が入っていたバケツは端っこに転がっている。

「ほむらちゃん…!カービィ…!」

涙を拭き取り、お礼を言おうとするまどかだがそれをほむらが手で制す。

「話は後よ。早くこの場から離れなさい。すぐに怒り狂った魔女がやってくるわ!」

「た、倒れてる人たち!皆も逃がさないと…!」

「っ…杏子!」

外で様子を窺う仲間へ呼びかける。すると天井から槍を持ち、赤を基調とした服を身に纏う佐倉杏子が降りてきた。しかし、その顔はどこか不満げだ。

「魔女がノコノコと出てきた所を不意について倒すつもりだったのに台無しじゃないかあ。それで…何だよ?」

「私とカービィが魔女を引きつけるからアナタはここにいる人たちを安全な場所に連れて行ってあげて」

「はあっ!?なんでアタシがそんな事…」

あからさまに嫌そうな顔をする杏子にどうやって説得しようかと思っていたほむら。そんな時、彼女の隣にいたまどかが深々と頭を下げた。



「あの…その…お願いします！私の友達もいるんです…！みんな、みんな…ホントはこんな事したくなかったはず…助けてあげてくださいー！」

「…ちっ！おい、ピンク…カービィ、テメエじゃねえ！アンタも手伝えよな！」

「あ、はいっ！」

まどかと杏子が動き出したと同時にこの廃工場が大きく揺れる！瞬く間に彼女たちのいた空間は青い水中のような円柱状の空間に変わってしまった。

すぐに杏子は炎を纏わせた槍で空間の壁に穴を開けて、現実の世界への抜け道を作り出す。そして、まどかと共に倒れている人たちを抱えてこの空間から姿を消した。

「カービィ！まだ回収できていない人たちもいる…みんなを守りながらの戦いとなるわ！」

(???) コクコク

そして、ほむら達の頭上に魔女が姿を現す。その魔女はテレビのようなモニターに黒いツインテールが伸びるシンプルなデザインだ。

そのモニターには放送休止を表すカラーバーが映し出されており、画面から次々と天使のような羽根が片方だけ生えた人形の使い魔が出てくる。

数十体はいるだろうか。今なお増え続ける使い魔にあつという間にはほむらとカービィは包囲されてしまった！

「この数は…厳しい戦いになりそうね…」

使い魔たちから人々を守る事ができるのか…！頑張れ、カービィ！ほむら！

## 16. ハコの魔女 Battle! 後編

空から襲い来るハコの魔女の使い魔の大群をほむらは玩具の拳銃を取り出し、魔法で強化したBB弾で使い魔の羽根を狙って撃ち落とすしていく。

しかし、ハコの魔女から無限に湧いて出てくる使い魔にほむらの射撃は追いつかない!

彼女の後ろにいる倒れている人たちがいなければ爆弾で一掃できるのだが…まどかにああ言ってしまったからにはほむらは必ず守りきる必要があった。

「数が多すぎる!こぼれたヤツはお願い、カービー!」

(っ、o、c) ミシミシ

そう言っただけでほむらがカービーの後ろに下がると、待つてましたと言わんばかりに口を大きく開けて吸い込み始める。

そして、近くにいた数匹の使い魔を吸い込み終えた所でカービーはそれを飲み込む。すると…

? (???) ?へやっ!

白い羽根がひらりひらりとほむらの前に舞い落ちてくる。頭上を見上げるとそこにはふわふわと浮かびながら弓を射て戦うカービーがそこにいた。

穢れ一つない真っ白な翼と頭に出来た輪っかという彼のその姿は神様に使える天使を連想させる。これはカービーがハコの魔女の手下をコピーして得た能力【エンジェル】だ!

「カービー!出来るだけで構わないわ。あなたが倒し損ねた敵は私が始末する!」

まどかと杏子がここに倒れている人たちを避難させ終えるまで魔女と使い魔が抑えられればそれでいい。避難させ終えた後は使い魔をおびき寄せて爆弾で一掃し、魔女までの道が出来た所で一気に仕留める！それがほむらの作戦だ。

その為、カービーが使い魔の数を減らし、ほむらがそれをすり抜けてやってくる使い魔を始末する今のこの状況を維持する必要がある。

「ほむらちゃん！頑張って！」

「もうじき避難が終わる！気張れよ、二人とも！」

ほむらの背後からそんな声が聞こえてくる。この調子だともうしばらくの辛抱だ。そうほむらは思っていたのだが…

？(？？？)？へぼよ！

「っ！カービー!？」

ぼびゅつと音を立てて降ってきたのはカービーだ。すぐさま立ち上がり、まだまだ余裕そうな表情を見せるカービーに安心するが…何故カービーが弾き飛ばされてきたのか…その理由はすぐに理解した。

「はっ…マズい！」

慌てて時を止めたほむら。彼女の頭の上にはハコの魔女の黒いつインテールが振り下ろされていた。

もう1秒でも遅れていたらほむらは地面に叩きつけられていただろう。カービーがやられたのは使い魔を生み出していた魔女に突然参戦されたからであった。

ハコの魔女の背後に回ったほむらが時間停止を解くと、ほむらを狙っていた魔女の攻撃は空を切る。そして、無防備なハコの魔女をゴルフクラブで打ちつけるほむら。しかし…

「効いて…いない…！」

？(？〜？)？へぼよ！

ハコの魔女はビクともせず、逆にほむらのゴルフクラブがひしゃげてしまう。危ないと声を上げたのかカービイの声が聞こえてくるが遅かった。ハコの魔女は画面をチカチカと点滅させながらほむらの方へ振り向くと…！

「…！それは…あつ…ああつ…！」

ほむらの方に振り向いたハコの魔女のモニターが何かを映し出す。それは傷だらけで横たわるまどかと…眼鏡をかけた三つ編みの少女の姿。その三つ編みの少女はどこことなくほむらに似ていた。

それを見てしまったほむらは激しく息を切らし、ペタリとその場に崩れ落ちてしまう。その瞳には涙も浮かんでいた。

「まどか…私…私はっ…」

？(？o？)？へぼむら！

動揺しているのか、いつもの彼女らしくないほむらの頭にツインテールを振り下ろそうとするハコの魔女だが、それは間一髪の所で飛び込んできたカービイの蹴りによって横に逸らされる。

ハコの魔女は二人から距離を取ると…再び使い魔を自身のモニターから召喚し始めた！

？(？〜？)？へぐぬぬ！

カービイはほむらの方をチラリと見る。彼女は虚ろな瞳で謔言のようにまどかの名前を呼んでいた。魔女の攻撃で正気を失ってし

まったようではむらのサポートは期待できないだろう。

まだ避難できていない人もいる。その為、今度はカービー一人ですの人たちを守る必要があった。

? ( ? o ? ) ? へうりやあ!

地上で飛んでくるハコの魔女の使い魔を撃ち落としていくカービー。しかし、その数は多すぎた。矢をすり抜けて撃ち漏らしてしまつた何匹かの使い魔がカービーの横を通り、守っていた人々を掴んでどこかへ連れ去ろうとする!

カービーが弓を射ようと構えるがそれでは守るべき人も傷つけてしまう恐れがある。絶体絶命と思われたその時!

「…でやあああつ!!」

青い閃光がその使い魔たちの羽根を切り裂き、この絶体絶命の状況を救つた。白いマントを身にまとい、颯爽と現れたのは…!

「危機一髪つて所だったね!カービー、転校生!」

? (???) ? へ……さやか!

そう!カービーの前に現れたのはまどかやほむらのクラスメートの美樹さやかであった。その手にはサーベルを持ち、騎士を思わせる衣装を身にまとっている。

そして、彼女のお腹には青く光るソウルジェムの輝きがあった。さやかは魔法少女となつて、この場に現れたのだ!

ちなみにカービーが名前を呼ぶのに間があったのはさよかの事を忘れていたからではない…はずだ。

「二人は倒れてる皆を守ってたんでしょ?ならアタシも手伝うよ!」

さやかは自分の周りに数本のサーベルを具現化させるとそれを向かってくる使い魔たちへと投げた。剣の何本かは使い魔の腹部を貫き、そのまま消滅させるが残りは明後日の方向へ飛んでいく。

撃ち漏らした使い魔はカービイが放った矢によつて消滅する。魔法少女になったばかりということもあつてか、さやかの攻撃は当たらない事の方が多かつたがそれでも心強い援軍だ！そして…

「おい！これで全員だ！…つてアンタいったい何者だ？」

「さ、さやかちゃん!? どうしてここに…！それにその姿…まさか！」

「あはは…まあ、話は後！二人は倒れてる人たちと倒れてる転校生を早く安全な所へ！ここはあたしとカービイがなんとかするから！」

釈然としない様子ではあつたが杏子とまどかの二人は倒れた人たちとまどかに対して泣きながら謝り続けるほむらを背負つてこの魔法結界を後にした。

これだと思う存分戦える…守るモノがなくなつたカービイとさやかは弾けたように動き出した！

「ここで決着をつける！いくよー！」

？ (???) ？ へぼよ！

クラウチングスタートの形となるさやか。そして、彼女の足元に魔法陣が描かれると…凄まじいスピードで青いオーラを纏つて魔法に向かい飛んでいく！

そのスピードに魔法や使い魔は反応できず、彼女に行く道を遮る使い魔は無惨にバッサバッサと切り刻まれていた。カービイは絶好のタイミングで射止めるべく、片目を瞑って狙いを定めている。そして…

「でやあああつ!!」

目にも留まらぬ速さで魔女の背後へと回ったさやかがサーベルを振り上げ、ハコの魔女を切り裂こうとする…も魔女は背後に振り向き、ツインテールをクロスにしてそれを受け止めた!両者一步も引かず、つばぜり合いの形となる。

「負ける…ものかつ!」

そう吼えたさやかだったが受け止められたまま動く事はない。そんな時、魔女のモニターがチカチカと発光し始める。さやかは知らないだろうがこれはほむらを戦闘不能に陥らせた精神攻撃だ。

それでもなんらかの攻撃である事は理解できたさやかが歯をくいしばり、その攻撃を耐えようとしていた時!不意に魔女が爆発する。突然の出来事に不意を突かれたのか魔女の力が少し緩んだ。

? (?o?) ? へさやか!

「わかってる!うおりやあああつ!!」

カービイの援護により、緩んだその隙をついてさやかが力を爆発させる!それにより、見事ハコの魔女に攻撃を与える事に成功。魔女は剣で切断するまでは至らなかつたものの思いつきり地面へと叩きつけられた。

画面はひび割れ、さやかの斬撃を受けた箇所からは黒い液体がだらだらと流れ出ている。しかし、それでもなお浮かび上がったハコの魔女…だが、地上にはカービイがいる。

? (?~?) ? へやつ!

魔女が最後に見たのは自分に向けて弓を精一杯引き絞る天使のような悪魔の姿であった。

## 17. 忘却の魔法少女

雲一つなく澄み渡る青空。朝の日差しがこの見滝原を優しく照らしていた。ほむらは息を切らせながらいつもと同じ通学路を通って学校へ登校中である。

そんな中、後ろからほむらの名前を呼ぶ声の一つ…それはやはりこの見滝原を守るベテランの魔法少女、バママであった。

ママの声に可愛らしく編まれた三つ編みを揺らし、赤フレームの眼鏡をかけたほむらが振り向く。

「暁美さん！おはよう！あら、イメチェンかしら？可愛らしくてとっても似合ってるわよ！」

「えっ…あつ…はい、ありがとう…ございます…」

彼女の口から発せられたぎこちない敬語と小動物のような大人しさと言うべきだろうか…いつもの堂々とした暁美ほむらではない事に少し違和感を覚えたママだったが、すぐさま昨日にあった魔女との戦いの会話へと移る。

「昨日はごめんなさいね…夜更かししすぎちゃいけないと思って寝ちゃったの。大丈夫だった？何か問題とかなかった？」

「えっと…その…その事なんですけど…実は問題があったようで…」

歯切れの悪いほむらにママはグイツと顔を近づけて何があったか聞いたです。それにはワツと驚いた様子で顔を赤くしていたほむらだったが…やがて衝撃の事実を口にした！

「私の記憶がちよっとだけ無くなっちゃったみたいなんです…！」

……





あろうその言葉に驚きを隠す事はできないでいた。

バマミに次ぐベテランである佐倉杏子は今のこのほむらの状態について様々な思考を巡らせる。やがて、一つの答えにたどり着いた。

「…おい、ほむら。アタシやカービィの事はわかるか？」

「…？佐倉さんはわかりますけど…カービィ？」

「「？」」

Σ（？o？c）へほよ!？」

なんと！ほむらはカービィの事を綺麗さっぱり忘れてしまったのだ。杏子に呼ばれ、ほむらの前に出たカービィを暁美ほむらは「魔女の使い魔!？」だなんて言って驚いている。

「…おそらくこいつは魔女の攻撃で記憶が飛んじまったんだ。だから、言葉遣いも変だし…このピンクヤローの事も忘れちまつてる」

「まつてよ！確かカービィはあたしやまどかより転校生との付き合いは長いはずだよ!?!なんであたしたちは転校生に覚えられてるわけ？」

さやかと言うとおりでまどかやさやか、杏子の本人たちはほむらに對してカービィよりも付き合いが薄い。

しかし、杏子はまどかに促されおそろおそろカービィへと手を伸ばすほむらを見ながらこう告げる。

「アタシもこないだほむらとあったばかりだったが…ほむらの方はどういう訳かアタシの事を知っていた。それにこいつ、カービィの好きな食いもんは知らない癖にアタシの好きな食いもんは把握していたんだ」

「…っ!?!まどかもなんか似たような事を言ってたっけ…転校生とは昔からの友達だったみたいとか、夢で見た事があるだとか…」

「…まあ、詳しい事は専門外だからわからねえ。明日、マミのヤローにでも話を聞いてみるんだな」

そう言うと杏子は変身を解いてほむらと彼女の腕に抱かれたカービィを引き連れてこの場を後にした。

帰った後に杏子が色々な質問をほむらにした所、基本的な事は覚えていたらしく、忘れているのは皆と出会った経緯と言葉遣い、そして：カービィの事だけのようで魔法少女に変身する事も問題なく出来るようだった。

その為、普通に生活は出来そうでたいした問題ではないと判断した杏子はふとしたきつかけで思い出すかもしれないと考え、これまで通りの生活を送るように彼女に言ったのだという。

……………今に戻り

「…という事があつたんです。巴さん、何かわかる事はないですか?」  
「えっ! ……ええと…そうね…」

可愛らしく首を傾げてそう聞く眼鏡をかけたほむらにママは少しドキッとしてしまう。彼女がいつも見ていたのはクールで冷静沈着なほむらで時折見せる年相応の自然な表情がママは好きであった。

目の前の暁美ほむらと以前の暁美ほむらのギャップにママは戸惑いながらも自身の知っている事を彼女に話し始める。

「本当に身体はなんともないのよね?」

「あつ…はい! カービィの事とか皆と出会った時の事とかの記憶がすっぽりなくなつて落ち着かない気持ちがありますけど、身体の方は平気へっちゃらですっ」

「なら、私も佐倉さんの言うとおりで今までと同じように生活して少しずつ思い出していくというのがいいと思うわ」

「そうですね…わかりました…」

「それにしても私がない所で凄い事になつてたみたいね…」

ハコの魔女により集団自殺がなされようとしていた所にほむらとカービィが乱入。一時的に仲間になった杏子とその場にいたまどかが周囲の人々を避難させ、ほむらとカービィがハコの魔女とその使い魔を抑える。

しかし、魔女の一撃でほむらが倒れ、絶体絶命となった所で契約を交わし、魔法少女となった美樹さやかが助太刀。カービィとさやかでハコの魔女の撃破に成功するがほむらの記憶がなくなってしまった……

昨日の間に起こったこの出来事に参戦できなかった自分を責めつつも杏子の協力とさやかの契約に彼女は喜びを覚えていた。

「美樹さんの契約で仲間が増えたのは嬉しいけど……まさか佐倉さんも力を貸してくれていたなんて……」

「そういえば二人は知り合いだと佐倉さんから聞きました。二人はどんな関係だったんですか？」

「……彼女が新米の魔法少女だった時に手を組んでいた時期があったの。あなたとカービィみたいな関係……あつ、ごめんなさい。覚えていないのね……」

「……カービィは私を友達って言ってくれました。彼の事だけでも早く思い出したいです……」

杏子に預けられ、今頃彼女と朝ごはんを食べているカービィの事を思い出すほむら。

記憶をなくしてしまう前のほむらとカービィは相棒のような間柄であったと杏子から聞かされたが、彼の事は一向に思い出す事はできなかった。

なので、ほむらはなくなつた記憶を取り戻す為、まずはカービィの事について調べる事にした！

## 18. なくしてしまった記憶

ガラガラガラ…とおそるおそるドアを開け、教室に入ってきた暁美ほむら。長く伸ばしていた黒い髪を三つ編みにして眼鏡をかけたほむらのその変貌ぶりに教室の視線が一斉に集まる！

クラスメートたちの注目にドアの前でカチコチに固まってしまっほむらだが、すかさずまどかとさやかとかが彼女に助け船を出す。

「…え、えつと…あつ！昨日、まどかに見立ててもらったんだって！よく似合ってるじゃない！転校生！」

「あ、そうそう！今日はそれでできてくれたんだね！ほむらちゃん可愛いよっ」

まどかとさやかのフオローにより、ほむらに対する視線は幾分かマシになる。ようやく立ち直る事ができたほむらは机に荷物を置くと早速、二人に自分の部屋に住まうピンクの同居人についてどう思っているか聞いていた。

「カービイについて？あの子はちよつと…いや凄く食い意地が張ってるけど、とても優しくいい子だよ！」

「あたしも悪いやつじゃないと思うよ。それにもしもさ、カービイが危ない奴だったとしたら前のあんたは絶対つるまないっしょ！」

まどかはもちろんの事、さやかもカービイに対してかなり好印象を抱いている。彼に関して記憶のないほむらから見てもカービイは悪い子とは思えないので信用はしていた。

「じゃあ…カービイっていったい…？魔女の使い魔ではないんだよね？」

「キュウベえは確か…ポップスターのププランドからきた宇宙人だとか言ってたような…？」

「う、宇宙人……!?」

ほむらが思い浮かぶ宇宙人というのはテレビとかでよく見る人型で丸い目と大きな頭をした奇形のエイリアン。しかし、カービーが宇宙人だと聞いて世間一般で広がっている宇宙人像は間違っている事を知る。

「そうだね〜カービーについて聞きたいんだったらキュウベえに聞いてみなよ!あいつ、カービーとも会った事があるみたいだったからさ」

「キュウベえが?わかった:そうしてみるね」

「ほむらちゃん:あれだけキュウベえの事嫌ってたのに今は大丈夫なの?」

まどかは彼女がキュウベえを苦手:いや、冷たい視線を浴びせ、強く憎んでいた事を知っている。なので、彼女に大丈夫なのかと問いかけるがほむらはしばらくキョトンとした後に首を傾げた。

「私がキュウベえを:何でだろう:??」

「どうせあいつに何か食べられた〜とかしようもない理由じゃないの?キュウベえのやつ、意外と遠慮を知らないからさ」

「:だどいいんだけど:あつ、一限目が始まっちゃう!ほむらちゃん!さやかちゃん!また後でねっ」

「うん! (キュウベえかあ:どうして前の私はキュウベえが嫌いだったのかな:理由もなく嫌いにならないとは思うけど:??)」

.....

学校が終わったほむらはまどか達と別れて大人しく家に帰宅する。

本人は魔女を倒すべく気合いを入れていたのだが、病み上がりが無茶しないようにとマミやさやかから念を押されてしまつては素直に頷く事しかできなかつた。

家には誰もおらず、机には『遊びに行つてくる。飯までに戻る』と紙に汚い字で書き置きされていた事から杏子とカービイはどこかに出かけているようだ。

「二人かあ…ちよつと寂しいな」

ハア…と小さくため息をつきながら制服を脱いでいくほむら。カービイと杏子が帰ってくるまで何していいようかと考えていたほむらの後ろから突然、聞き覚えのある声がかけられる。

“ やあ、ほむら。大変な目に…「ひやあああつ!？」 ”

突然聞こえてきた声にビクツと大きく肩を震わせ、普段のほむらからは考えられないような悲鳴を上げる。

運が悪い事に彼女は私服へと着替えている最中であつた。今の彼女の姿はスカートこそ穿いていたものの上半身は衣服を着る前で真っ白の獣の目にはしつかりと彼女の下着と肌色が見えていた。

我に返つたほむらはすぐさましゃがみ込み、脱いだ制服を抱きしめて胸周りを隠す。

「キュウベえーむ、向こうに向いてて!!」

“ 訳がわからないよ。確かに君の事は興味あるさ。だけど君のその貧相な身体になんてこれっぽっちも興味は…「いいから〜!!」 ”

やれやれ…と訳の分からないといった様子で彼は後ろを向いた。私服へと素早く着替えたほむらは台所へ行き、猫用の器に牛乳を注いでキュウベえへと差し出す。

“…なるほどね。確かに記憶を失っているようだ。僕をもてなすだなんて以前の君からは考えられないよ”

「あつ…その事なんだけど…どうして私はキュウベえと喧嘩してたの？」

“さあ…僕には覚えがないね。おそらくさつきみたいに君の怒りを買ってしまったからじゃないかな？”

差し出された牛乳を猫のようにペロペロと舐めるキュウベえの顔は見えない。ほむらはそれで納得したようで次にキュウベえがわざわざ会いに来た理由を聞く。

“君も記憶が早く戻る事を望んでいるんだろう？だから、君が忘れた事を僕が教えてあげようと思つてね。どうだい、ほむら”

「あつ…えつと…お願い、キュウベえ！」

——一方その頃、カービィと杏子は…

夕日が空を茜色に帰る頃、杏子はたい焼きを頬張りながら見滝原の町を歩いていた。彼女の肩には大きなトートバッグをかけられており、なにやらもぞもぞと蠢いている。

そのバッグの中から小さな声でたい焼きと呟く声が聞こえてきた。杏子はチツと舌打ちをしたものの食べていたたい焼きを半分だけ食べ、残りはトートバッグの中に突っ込む。

「…つたく…アタシから食べ物を奪うなんていい度胸してんなあ」



杏子の手にはもうたい焼きはなかった。かわりに涎がべつたりとついている。それを着ているパーカーで拭き取り、魔女の探索および食べ歩きを続行。するとどこからか肉を焼く、香ばしい香りが漂ってきた。

「…おっ！焼き鳥だってよ。どうだい？」

端から見ると道中で立ち止まり、独り言を言っているように見えてしまうがそうではない。その返事はトートバッグの中から聞こえてくる。

そう、そのバッグの中にはカービーがいた！彼は身動きが取れない為、窮屈そうにしていたが少し我慢するだけでおいしい物が食べられるので不満などなかった。

食べるという返事を聞いた杏子は屋台で売られている焼き鳥を頼んでいたのだが…指輪となっていたソウルジェムが突然、淡く光を放つ！

「…っ!?!近くに結界があるな…当たりかもしれないねえ！」

焼き鳥を受け取ってバッグへ入れた彼女はその反応がある方へ駆け出す。反応があつたのはここからそう離れていない所。

雑魚の魔女でなおかつグリーンフィードを落としてくれ…そう願いつつ彼女とカービーは町の裏路地にできた結界の前へやってきた。

夕暮れ時という時間帯ではあるが人通りのない裏路地である為、見られる心配もないと考えた杏子は焼き鳥を美味しそうに頬張るカービーを取り出し、地面に置く。

「カービー、今から…あつ！てめえ…！焼き鳥全部食いやがったなっ！」

c ( ??? ) っへうまつうまつ

10本買っていた焼き鳥は全てカービイの口の中でご丁寧に串ま  
で食べるカービイの頬を両手で杏子はぽよぽよする。

だが、食べ物の借りは後：そう思い、彼女はげふつと可愛らしく  
ゲップをしたカービイと共に結界の中へ侵入した。

中は巨大なクレヨンや積み木が散乱する子供の玩具箱のような空  
間だ。そこで二人は奇声を発しながら結界内を小さな飛行機で逃げ  
回る使い魔と：

「そつちにいったわ！美樹さん、お願い！」

「任せなさい！まどかっ！あたしがカツコ良く決めちゃう所、見て  
てよねっ」

Σ(？。o？c)へまろか!?マミ!?!…さやか？

リボンを伸ばして逃げ場を塞ぐ巴マミと積み木を足場にして飛び  
上がり、使い魔を切ろうとするが盛大にスカッしてしまう美樹さやか、  
そして遠くからそれを見て苦笑いする鹿目まどかの姿がそこにあっ  
た。

## 19. 魔法少女達の集結

「美樹さん、落ち着いて！佐倉さんも…！こんな事…意味がないわー！」  
「こいつは…こいつは！使い魔を逃がすんですよ!?そのせいで襲われる人たちがいるにも関わらず…！許せないっ」

「へえ…じゃあアンタはグリーンフシードが勝手に生えてくるものだと思っているわけだ…いったい誰に似たのか、おめでたい奴だねえ」

「マミさんの事をバカにするなっ!!」

今にも杏子に飛びかかりそうなさやかを腕をマミが掴む事により、二人の衝突はなんとか回避されていた。がこのままではどちらかが先に攻撃を仕掛け、戦いとなるのは時間の問題であろう。

人々を守るはずの魔法少女たちが今、争おうとしている。まさに一触即発のこの状況を変えるべくカービィを抱えたまどかが杏子とマミ&さやかの間に入った。

「なんで…なんで魔法少女どうしで喧嘩しなくちやいけないの!?こんなのおかしいよっ!」

(っ?..ゝ)へぼよっ!

マミやさやか、杏子とも関わりがあるカービィもまどかと共に止めに入るが険悪なこの雰囲気は収まらなかった。いったいどうしてこのような事になっているのかというと…

……

結界は魔女だけでなく人を襲う為に使い魔も作る。この結界内に魔女はいなかったのだ。マミとさやかの二人はこの結界を作り出した使い魔を倒そうとさやかの特訓を兼ねて戦闘していた。

「チツ…バカだね、アイツら…使い魔なんか倒したって何の得もありやしないのに」

(っ?~?~?c)へぼよ?

それを見た杏子は舌打ちを一つと苛立ちを抑える為か、ROCKYを口に運ぶ。杏子の苛立ちの理由をカービーが聞いた所、魔法少女にとって使い魔は必ずしも倒さなくてはならない存在ではない。むしろグリーンシードを落とさないぶん、戦うだけ無駄な存在だ。

しかし、使い魔は人を襲い、力をつけると魔女へと進化する。なので、邪魔にならない使い魔は見逃してその使い魔が成長した魔女と戦う…それが本来の魔法少女のあるべき姿なのだと杏子は彼に説明する。

「…それにしてもちんたらしてやがるな…マミのヤロー後任の魔法少女でも育成してんのか?」

(???)へさやか!

「さやかか…そういやこの間の時にもいたあいつか。あの時はこっちの大将がへまこいたからたいした挨拶も出来なかったが…」

何か悪戯を考えついた子供のような笑顔を見せる杏子。すると、杏子のソウルジェムが赤く光を放ち、彼女の姿を変えていく!

瞬く間に赤を基調とした魔法少女姿になったかと思うと手に炎を浮かび上がらせ、その炎で自身の身を上回る程の槍を作り上げる。

「アタシ流の挨拶を叩き込んでやるかな…どいてろ、カービー」

もう片方の腕でカービーを掴んだ杏子は彼をピヨコンとピンク髪が飛び出している積み木の方へと投げる。突然、降ってきたカービーに驚く声が聞こえるが知ったこっちゃない。

杏子は近くの積み木を足場に三角跳びの要領で縦横無尽に飛び回

る使い魔の元へジャンプすると…その脳天を槍で貫いて見せる。そして、そのまま勢いよく地面に落下し、使い魔を絶命させた。結界は消え、辺りは夕日が差し込む裏路地の風景に戻っていく。

「あ、あんたは…この間の…?」

「佐倉杏子、アンタと同じ魔法少女さ。だけど、あまりにも不甲斐ない後輩を見ちまったもんでつい手出ししちゃったよ」

使い魔から槍を引き抜いた彼女は駆け寄ってくるさやかとマミに向き直ると蔑むようにさやかを挑発。それを聞いたさやかはしばらくの沈黙の後、真つ赤に顔を染め上げて杏子を睨みつけていた…のだが、そんな彼女の後ろから複雑な表情のマミが前に出る。

「…佐倉さん。久しぶり、ね」

「…ああ、相変わらずこんな甘つちよろい事を続けているんだな。倒しても何のメリットもない使い魔なんて放っておけばいいのにさ」

「…っ!? 暁美さんやカービィと仲間になったって聞いたからあなたも変わってくれたんだって思ってた。残念よ…」

「はっ! アイツらとは利害の一致ってヤツだ。人はそう簡単に…「ちよつと待ってよ!」」

杏子とマミとの会話に割って入ったのはさやかだ。その顔は先ほど同様…いや、先ほど以上に怒りに燃えていた。その理由は簡単だ。

「あんたがママさんと昔何があったのかは聞かない…だけど、あんた! 使い魔を見逃すっていうの!?!」

「何か大元から勘違いしてるようだから説明してやるよ。食物連鎖って知ってる? 学校で習ったよねえ? 弱い人間を魔女が食う。その魔女をアタシたちが食う。これが当たり前のルールでしょ? そういう強さの順番なんだから」

「っ…このお!!」

——以上がこの無意味な争いの理由である。

まどかとカービィとマミがヒートアップする二人を止めようとする。しかし、自身の正義感から頭に血が上ったさやかと笑いながら挑発し続ける杏子を止める事はできない。やがて…

「まさかとは思うけど。やれ人助けだの正義だの…その手のおちやらけた冗談をかますためにアイツと契約したわけじゃないよね？アンタ」

「だったら…なんだって言うのよ!!」

「美樹さん!」「さやかちゃん!!」「ぽよ!!」

マミの制止を強引に振り切り、さやかが杏子へ駆け出す!技術はなもののスピードだけなら並大抵の魔法少女を上回る彼女に杏子は少し驚いたがそれだけだ。

大きく振りかぶった剣が杏子の身体を切り裂く前にさやかの腹部に重たい蹴りの一撃が入られる。その後、槍の柄の部分で怯んださやかの身体を吹き飛ばした。

「さやかちゃん!?!」

「ま、トーションローじゃこんなもんだらうな…ん?」

荒々しく息を吐きながらもさやかはゆっくりと立ち上がる。その口元からは血も吐き捨てられたが、彼女の闘志は消えていないようだった。

「あんななんか…あたしは負けない…っ!」

「…うぜえ。超うぜえ!」

杏子が槍を回しながらふらふらなさやかに向かって駆け出した。さやかも迎え撃つべく剣で構えをとるのだが…杏子は空中から降っ

てきたピンクの影の蹴りで武器を落とされ、さやかは地面から生えてきたリボンでその動きが止められる。二人を止めた人物はやはりカービィとママミである。

「いい加減にしなさい！それ以上あなた達が戦おうとするなら私とカービィが黙って見ていないわ！」

「もがもが！」

「…アンタの言うことをアタシが聞くと思うか？ようやく楽しくなってきたトコなんだ。カービィ！後でまたなんか奢ってやるからそこをどけ！」

（っ？っ、）へ…ダメ！

杏子の行く手を塞ぐカービィ。彼女の食べ物物の誘惑にもカービィは負けない。なぜなら、ママミとまどかに先に餌付けされたから…だけでなく仲間が無意味な争いをするのはカービィも見ていられなかったからだ。

「チツ…なら、さっきの食べ物物の借りも含めて少し痛い目を見てもらうよ！カービィ！」

再び槍を作り出した杏子はカービィへと穂先を向けた。ぽよ！と少し驚きつつもカービィもすぐに戦闘態勢に入る。緊迫したその間にまどかが割り込んできた。

「も、もう止めて…こんなのってないよ！魔女じゃないんだよ？どうして味方同士で戦わなくっちゃいけないの！」

「…まどかの言うとおり。佐倉さん、槍を収めてください！」

人通りのない裏路地に入ってくる影が一つ。カチツと機械音がしたかと思うとその影は一瞬にしてまどかの隣に現れる。

（???）へほむら！

長いロングの髪を三つ編みに束ね、眼鏡をかけた魔法少女。曉美ほむらがこの場に現れたのだ。いつの間にかさやか動きを止めていたりボンもバラバラに引き裂かれている。

「曉美さん!?!どうしてここに…!」

「キュウベえから皆が戦ってるって聞いて駆けつけちゃいました。間に合って良かった…!」

ほむらは杏子の方へ向き直る。カービィに邪魔され、ほむらにまで乱入されてはさすがに分が悪いと見たのか杏子はそっぽを向いていた。

その様子にホッと一息ついた後、彼女はその場でスーハーと深呼吸をする。そして…

「2週間後…ここ見滝原に『ワルプルギスの夜』が現れます。カービィ…佐倉さん…巴さん…美樹さん…そして、まどか…!私に力を貸してください!」

隣にいるまどかを横目にワルプルギスの夜の話を切り出したほむら。カービィにはその視線はまるでまどかに契約を進めているように思えてしまうのだった。



## 20. 敵か味方か…

【ワルプルギスの夜】 またの名を舞台装置の魔女。超大型の魔女でこの世の全てを戯曲に変えるまで世界を回り続けると言われている。他の魔女とは違い強大すぎる力を持つ事から結界内に身をひそめる必要がなく、出現しただけで現実世界に自然災害として多大なる被害をもたらすという。

「これがワルプルギスの夜よ。わかったかしら？」

c (???) っココココ

【ワルプルギスの夜】 について知らないまどかときやかとカービイはマミから簡単に説明を受ける。ようするにとてつもなく強くデカイ魔女という訳である。

「協力するのは構わない…だけど、どうしてこの見滝原にくるのがわかるの？」

「それは…その…」

“それは僕が彼女に教えたんだ”

どこからともなく現れたキュウベえが素早くほむらの足を上って肩に座る。キュウベえ曰わく、今日観測できた情報でほむらに教えたのだという。

「ん？アタシはほむらから前もって知らされたぜ？こいつらと共闘してるのもワルプルが出るって聞いたからだからよ」

「えっと…それは記憶が曖昧で…なんでキュウベえより先に知っていたのかは私にも…」

“ほむらが持っていた記憶は僕も興味がある所だけど、今は…”

ほむらはココつと頷くとまどかの方へ向き直り…

「まどか…お願いがあるの。私たちと一緒にワルプルギスの夜を倒してほしい」

「えっ…それって!？」

Σ (?・o・?) c) へほむら!？」

あのほむらがまどかに契約を迫っている。おそらく以前のほむらはまどかが契約してしまえばどうなるか…ほむらは知っていた。なので止めていたはず。

しかし、今のほむらは魔女の攻撃が原因で記憶を失っている…偶然か必然か、そこをキュウベえは突いたのだろう。心なしかキュウベえの赤い瞳は輝いているように見える。

「キュウベえ、この場にいる魔法少女とカービーが力を合わせたらワルプルギスの夜は倒せるかな？」

“…確実に勝てる…とはいえない。相手は最強の魔女だ。カービーがいるとはいえ厳しい戦いになる事が予想されるね”

「そんなにその…なんちゃらギスって強い!？」

「ワルプルギスよ、美樹さん。そうね…噂では誰も倒せない魔女だと聞いているわ。正直、私も一人じゃ倒せる自信がないわね」

「ふん、それで?…こいつの契約すりゃあ何かが変わるのかよ。その話が本当なら魔法少女が一人増えた所で何の解決にはならねえはずだ」

ふるふるとキュウベえが首を振る。そして、オドオドとして回答を待つまどかへと赤い瞳を向けた。

“…いいや、まどかが持つ力…それは普通の魔法少女が持つ力を遥かに越えている。いや、凄いなんていうレベルは控えめな表現だね。最強の魔法少女になるのは間違いないだろう”

「……………本当に私が契約すれば…その魔女を倒せるの?見滝原の町を守れるの?」

“君が本当にそれを望むならね。だから、まどか…僕と契約して魔法少女になつてよ!”

キュウベえがまどかの前に行き、耳から生えた毛のような物を彼女に伸ばす。まどかは一瞬、躊躇いを見せたが目を閉じ、それを受け入れ…

(?~?) ^ぽよ!

「カービィ!」

契約がなされようとしたその時、カービィが耳毛を伸ばすキュウベえとまどかの間に入る。カービィは懸命に首を振って、困惑するまどかに契約はダメだと伝えていた。

「邪魔しちゃダメだよ。こっちで待とう?」

(?~?) ^けくやく!ダメ!

「カービィ?どうしたの?」

とほむらがカービィの腕を掴むもそれを振り払い、まどかの契約を阻止しようとキュウベえを睨み続けている。

おそらくこれは記憶をなくしたほむらをそそのかし、契約させようとキュウベえが仕組んだ展開なのだ。カービィは考えた。

契約を邪魔し、睨みつけるカービィをキュウベえはただ黙って見つめていたがやがて…

“…なるほどね、君がわざわざ遠い星からやってきた理由がわかったよ。そういう事だったんだね”

(っ?~?) ^???

“君の目的はこの星を自分の物にする事。そうだろう?カービィ

”

その言葉に皆が衝撃を受ける。カービイはすぐにはキュウベエの言葉が飲み込めず、キョトンとしていたがしばらくしてぽよ!?と大きな声を上げた。

「ど、どういう事!? キュウベエ!」

“ 僕の仮説だけど…ワルプルギスの夜を倒すには君が契約し、魔法少女となるのがベストだ。しかし、その契約を阻むという事…それはすなわち君が契約し、魔法少女となって強大な力を持つてしまうのを恐れているという事だ!”

“ このままワルプルギスの夜を迎えれば君たち魔法少女たちは全滅、そして、それを覆す力を持つ君も死んでしまう。やがて…ワルプルギスの夜も通り過ぎてしまえば邪魔をする者はもういない…カービイはこの星を好きにする事ができる”

「そんな…まさか、カービイがそんな事するわけないよ! 皆、信じてあげて!」

まどかはキュウベエの言葉が信じられないようでそばにいたカービイを抱きしめている。カービイがこの星を侵略する為にやってきた宇宙人だなんて信じる事はできなかった。しかし…

「カービイから離れて…! まどか!」

「さやかちゃん!」

さやかはカービイに剣を向けていた。カービイの事を信じたい。だけど、信じられない…そんな顔をさやかはしていた。

続けて沈黙を保っていた杏子も小さく息を吐きながらカービイに槍の穂先を向ける。まどかの腕に抱かれたカービイはこの状況に目をパチクリとさせていた。

「…マミさんとほむらちゃんもカービイが悪い子って思ってるの…?」

「私は……この子が悪い子だとは思えない。カービイが鹿目さんの契約を邪魔するのもきつと何か意味があるんだわ！」

マミはさやかと杏子に武器を向けられる二人の間に立ちふさがる。彼に命を助けてもらった……自分の作った食べ物を美味しそうに食べてくれた……そんなカービイが悪者なわけがないとマミは確信していた。

「……今の私はほとんど付き合いがないからカービイの事はわかりません。だけど……キュウベえが間違っているなんて事は……」

(っ?ゝゝ) へけけやくやく! 魔女! けけやくやく! 魔女!

カービイは必死に魔女化の真相を伝えようと声を上げる。しかし、単語だけでは意味は伝わらない!

唯一その事実を知っていたほむらも記憶がない為、カービイの言葉の意味がわからず怪訝な顔をしていた。

「カービイ? 私は魔女と戦うのは平気だよ。町のみんなを守れるなら……私は怖くない。それにさやかちゃん、マミさん、杏子ちゃん、ほむらちゃんもいてくれる! 私は大丈夫だよ?」

(っ?ゝゝ) へ魔女! なる! 魔法少女! 魔女!

「えっと……それはいつたい……?」

“まどか! カービイは信用できない。その言葉に耳を貸しては駄目だ!”

有無を言わさぬキュウベえにカービイもムツとしていたがこれ以上の説得は不可能であると考え、彼は空に向かってその短い手を掲げた。すると、オレンジ色の空からぴゅるるると音を立てて何かが飛来してくる!

「っ?! なにあれ!」

“ワープスター……!”

「あれは……あの時の! ひゃあつ!」

文字通り星の形をしたワープスターなるものが空からカービイの目の前に現れる。カービイは素早くまどかを吸い込むとその星に乗り込み、そのまま空へ飛び立っていった!

「まどか! カービイ!」

“これでわかったはずだ! カービイを信用してはいけない! まどかを早く取り返すんだ!”

まどかを吸い込み、この場を立ち去ったカービイ。彼のその行動にある者はさらなる不信感を抱かせ、ある者はそれでもなお信じ続け、そして、またある者は彼の発した言葉の意味を考えさせられる事になった。

## 21. 魔法少女と魔女

日が落ちて夜の闇が落ちた空を駆ける星が一つ。おそらくこの星は地上からみれば流れ星か隕石かと思うだろうが、これは流れ星でも隕石でもない。

カービィがキュウベえと魔法少女たちから逃げる為に呼び出したワープスターでその背にはカービィも乗っている。

「か、カービィ…ど、どうなってるの〜」

カービィの口の中には鹿目まどかがいる。彼女を安心させる為に『ぽよっ!』と声を出した後、ここまでできたら追ってこれないと考え、どこかの廃れた公園へと下降していく。錆び付いてボロボロの看板には神浜と書いている事が窺えた。

もう夜の為か、元々そういう土地であるからか周囲に人の姿はない。カービィはワープスターに手を振って空へと返してやった後…

(っ?・0・) へびゅー!

「わあっ!?!」

大きく口を開き、中のまどかを外に出す。カービィの涎で彼女の制服がべつとりと濡れている為か、まどかはもじもじと動きづらそうにしている。

(っく?) へごめんなさい…まろか

「ううん、怒ってないよ。それより…」

まどかは聞きたかった。なぜ、カービィは自分の契約をみんなに誤解されてまで止め、あの場から逃げ去ってしまったのか。そして、彼が発した【魔法少女】【魔女】【なるー】の言葉の意味が知りたかった。

まどかは今、恐ろしい想像をしている。カービィが言った言葉を繋

げると…とんでもない事が浮かび上がってしまうのだ。

「カービィ、あなたは魔法少女が…魔女になるっていうの？」

(っ?ゝゝ) コクコク

「でも、キュウベえはそんな事!それにそれに…!」

それはいかにカービィを信頼しているまどかでも簡単に信じる事ができなかった。去り際のほむらが言ったようにキュウベえが嘘をついてるとは思えないでいた。

「カービィはそれが本当だと思ってるんだよね？」

(っ?ゝゝ) へぼよ!

「…わかった。そこまで言うんだったら私…魔法少女の事を確かめてみてから答えを出す!」

どうやら、まどかは契約を全ての真実を知ってからする事にしたようだ。ひとまず星の危機は去った事にホツとするがまだ油断はできない。

誤解をさせてしまった魔法少女たちの事も気にかかるがなによりキュウベえがどうアクションするのか…まどかを契約させる為にある手この手で誘惑するであろう。

(っゝゝ) へむゝ!

「ね、ねえ…カービィ…」

難しい事を考えていた為、注意力が散漫になっていたのかまどかの声でハツと我に返るカービィ。彼女の声は震えていた為、何事かと思いまどかの方へ向くカービィだが…その理由はすぐに理解できた。

この公園の下真ん中にグリーンフィールドが刺さっていたのだ。もう溢れんばかりのどす黒い穢れが貯まっている事からそれは今にも孵化しかかっていた。



「もし、こんな所で魔女が孵化したら…！あつ！」

カービイが吸い込もうとした瞬間、タイミングの悪い事にグリーンフシードが孵化してしまう！それにより、この公園は魔女の結界へと変化した。

公園には変わりないものの夜であった空はオレンジに染まり、辺りには子供が使って遊ぶようなフォークやキューブが散乱している。

そして、カービイとまどかという侵入者に結界の主が気づいたのか

：

「か、囲まれちゃった…！」

(?~?)へむう…！

瞬く間にアリののような使い魔が二人を囲んでしまう！ぞろぞろと集まる使い魔にまどかは身体を震わせてうずくまってしまうが、カービイは彼女を元気づけると飛びかかってきた使い魔を一匹飲み込んだ！

「カービイの姿が変わった！あれは…：ヨーヨー？」

星マークのついた帽子、頬には絆創膏と少年を思わせる風貌をしたカービイ。そして、彼のその手には一つのヨーヨーが握られていた。彼は群れをなして自分たちを囲む使い魔を見ると…

(?o?)へまろか！頭、上！

「乗せればいいの!?わかった！」

まどかはすぐさまカービイを頭の上に乗せた瞬間、囲んでいた使い魔たちが一気に動き出す。自分の周りにカサカサと迫りくる巨大なアりにまどかはひっ…と悲鳴をあげるがその使い魔たちがまどかに

触れる事はなかった。

c (???) つゝゝ〇

「すつ…すづい…い…すづいよ！」

頭の上にいるカービイが手にしたヨーヨーで前へ後ろへ攻撃していたからだ。飛びかかってくる使い魔や前後から同時に迫る使い魔にも的確に対応してヨーヨーをぶつけている。

カービイの技に魅せられている間に何十もいた使い魔たちはもう残す所、数匹となっていた。戦意を失ったのか、その場に立ち尽くすアリの使い魔にトドメを刺そうとした時！

「あつ…い…青い槍…？」

その使い魔たちは突如空から降ってきた青い槍が突き刺さり、耳障りな声を上げながら消滅していく。まどかとかカービイは空を見上げると上空から何者かが彼女たちの前に降り立った。

「…この神浜にまだ私以外の魔法少女が残ってたなんてね…」

「えつ…えつと、私は…魔法少女じゃないです。魔法少女の事は知ってますけど…」

長く伸ばした美しい青髪をかきあげる女性。そこから覗かせる整った顔立ちについまどかは見惚れてしまう。しかし、彼女のその瞳は生気が感じられず、虚ろで…どこか悲しげであった。

「あなたは…魔法少女…なんですか？」

目の前の女性の胸に輝く青い宝石、それはどこか見覚えがあった。確か、キュウベえとの契約で出来上がるソウルジェムというものだったか…となれば彼女は魔法少女という事になる。

彼女はその言葉を無視してまどかとかカービィにきびすを返して歩き出す。その方向は結界の深層…すなわち魔女が巣くう所だ。

「まって…！まってください！」

「…この魔女は私が刈る。ケガをしたくなければ…」

「け、結界の出方…わかる？カービィ」

(？…？) ブンブン

頭の上にいるカービィは首を降っているようだ。魔法少女の女性はこちらを向く事はなかったものの歩みを止め、手でついてこいと二人に答える。なので、大人しく彼女についていく事にした。

「私にあまり近づかない方がいい。死にたくなければ、ね…」

進んでいく中でふいに彼女がそんな事を言い出した。言葉の意味がわからずまどかとかと彼女に抱かれているカービィは首を傾げている。

「どういう事ですか？」

「そのままの意味よ。さもなければあなたも死ぬか、絶望する事になる…」

そう答える彼女の声色は真剣そのもので冗談を言っているようには聞こえない。やがて、もう話す事はないと言わんばかりに彼女は足早にこの結界内を進んでいく。見失わないように懸命に追いかけるまどか達。そして…

〇〇(？…？) へ魔女！

「でかい…あつ…！」

砂場を進んでいくとたどり着いたその先には家のような大きさの何かが蠢いていた。

それは砂場で遊んでいる魔女で赤のバケツとシヤベルが刺さった茶色の髪を揺らしながら、砂場の砂で子供のように砂の城を作り上げている。

そんな魔女にトップスピードのさやかかスピードに匹敵する程の速さで魔女に駆け出し、杏子のような槍さばきとマミに負けるとも劣らない技で砂場の魔女を圧倒していく！

「でも…あの人…」

(っ?ゝ) へ…ダメ！

圧倒的な力を見せる彼女だが、彼女を振り払う魔女の反撃をかわそうともせず血を吐きながらも立ち上がり、再びその槍で何度も何度も攻撃している。

防御を考えない女性の身体を守っていた胸のプロテクターはひび割れ、頭からは血も流れ出ていた。それでもなおソウルジエムに対する攻撃だけかわし、それ以外の攻撃はかわそうとしない。

それを見ていられなかったまどかと彼女に抱かれたカービイは顔を見合わせると頷きあい…

「お願い！うえい!!」

まどかは助走をつけて魔女に向かってカービイを思いっきり投げる！ヒューンと放物線を描いて飛んでいく彼は魔女の顔を目掛けてヨーヨーを投げた。

砂でできた魔女の顔はバシヤアと音を立てて崩れるがすぐに再生し、元の形に戻っていく。間髪入れずに複雑な面持ちで青の魔法少女はそこへ持つていた槍を突き刺し、落ちてきたカービイを持って距離をとると…

「…アブソリユート・レイン！」

目が塞がり、動かない魔女に水を纏った槍を身体の周りに具現化させた彼女はそれらを連続で放ち続ける！魔女の腹部に一つ、二つ、三つと槍が突き刺さり…それが10を越える頃にはもう魔女は動かなくなっていた。

「…せめて、安らかに眠って…私も直に…」

粒子となって空に向かって消えていく魔女に変身を解いた彼女は悲痛な面持ちでそんな事を口に出している。カービィはその言葉の意味は理解できなかったが、彼女が何かを抱えているという事はわかった。

オレンジの空は元の星空に戻り、あたりの風景も元の廃れた公園に戻る。まどかがこちらに駆け寄ってきていた。

「…私と会った事は忘れなさい。それがあなた達の為よ」

そう言っただけで立ち去ろうとする彼女だが、その身体はふらふらでもう立っている事すら辛そうであった。しかし、彼女はそんな事はお構いなしに次の魔女を探すのか…濁ったソウルジエムを手にして闇の中へ消えていこうとする。

「まって！まってください！どうしてあなたはそこまでして…」

「…これが私の罪だから…願いのせいで死なせてしまった子達と魔女にさせてしまった子達への…ね」

Σ(？。o？。c) へ魔女！

「そ、その話…もしかして魔法少女は魔女になるって話!？」

「っ…話しすぎたわ。もう私に関わらないで…」

と、立ち去ろうとする目の前の女性の前へまどかは立ちふさがる。どうしても、聞いておかなければいけない事があったからだ。

「お願いします…一つだけ、一つだけ教えてもらえませんか？お願いします！」

「……………」

腕を組んで目を閉じた彼女はどうかやら話を聞いてくれるようだ。まどかは頭を下げて聞きたかった事を聞く。残酷な魔法少女の仕組みを…

「魔法少女が…魔女になるって本当ですか…？」

「……………ええ、このソウルジェムに穢れが満ちる時…その時にこの身は魔女になり果てる。そうやって魔女化した子を何人も見てきたわ。そう何人も…」

悲しみ…怒り…諦め…そう語る彼女の瞳の奥はそんな感情が入り乱れていた。魔法少女が魔女になる…それはすなわちこれまで見てきた魔女の元は自分達と同じ人間という事。

「あつ…ああ…そんな、じゃあ…みんな、みんなっ！」

「…気の毒だけど運命は変わらない。魔法少女は例外なく魔女になる…それが現実よ」

## 2.2. ほんの少しの僅かな闇

キユウベえとの契約によって出来るソウルジエム…それは自分の魂を抜き取って出来上がったモノ。すなわち、ソウルジエムこそが自分の命そのものという事。

さらにそれだけではなく魔法を使ったり、負の感情を抱く事で貯まる穢れ。それらが貯まりきってしまった時…その時には…！

「魔女に…なる？みんな…さやかちゃんも？マミさんも、杏子ちゃんも？ほ…ほむらちゃんも!？」

全員が全員そうじゃないかもしれない。助かる方法もあるのかも？そう思ったまどかは一筋の望みをかけて目の前の女性に問いかける。

ふう…と軽く息をついたモデルのように美しい風貌の魔法少女の彼女から返ってきたのは…

「…例外はないわ」

最悪の言葉だった。ポタツ…ポタツ…と雫がカービイの頭に落ちてくる。何かと思いカービイが見上げるとそれはまどかが零す涙であった。

自分の大切な人たちはみんなこの世を憎み、人々を襲う魔女になつてしまう…中学生の少女であるまどかにはそれを受け止めるのは不可能であった。

(っ？っ、) へまろか…

「ひどい…ひどすぎるよ…ぐすっ…みんなみんなっ…願いの為に死ぬかもしれないのに戦ってる…なの…あんまりだよ!!」

「……………希望を信じて戦っていた者はその真実を知り、絶望して魔女となる。ふっ…魔法少女とはよく言ったものね。いずれ魔女になる

私たちは魔法少女と呼ばれるのがふさわしい…」

雲が隠す半分かけた月を見上げる青の魔法少女。その瞳は何を映しているのか…かつての仲間たちか？それとも魔法の姿か？二人にはわからない。

「…あなたはずっと…戦い続けるんですか？ここで一人ですつと？」

「…ここで散っていった仲間たちの為にも私は戦い続ける。この命が尽きるまで…」

「そんなの…悲しすぎるっ！それでいいんですか…？」

女性はほんの少し驚いたように目を見開くと…涙を流し続けるまどかに近づき、その瞳からこぼれる雫を優しくぬぐい取った。そして、戸惑うまどかの顔をジッと覗き込むと薄く微笑んだ。

「あなたは…優しいのね。最後にあなたのような子に出会えてよかった…ありがとう」

「あつ…」

そう彼女は言い残すとまどかとカービィに背を向けてボロボロに傷ついた身体を動かし、次の魔法を探しに出かけていった。

彼女はおそらく死ぬ気なのであろう…しかし、二人には覚悟を決め、去りゆく青の魔法少女を止める事はできなかった。

やがて、ゆつくりと顔を上げるまどか。その目にもう涙はなく、彼女はカービィの背に合わせてしゃがみ込み…

「カービィ…私、契約するよ」

Σ(？o?c)へまろか!?!魔法女!なる!

突然の宣言にカービィも面食らってしまう。今の魔法少女の話聞いて、なぜ契約をしようという気になったのか…?カービィは魔法



になつてしまふと何度もまどかに説明するが彼女の瞳は揺るがない。

「今までずっと誰かの為に戦つてきた魔法少女たちを絶望で終わらせたくなんかない……みんなを……助けたい！」

(っく?) 〈??〉

彼女には何か考えがあるようであつた。しかし……とカービイが思つていたその時、まどかがギユウと身体を優しく抱きしめ、震える声で彼に告げる。

「お願い……カービイ……力を貸して……！」

その言葉に彼はいつもと変わらない笑顔で『ほよっ！』と返すのであつた。

—— 一方その頃……

姿を消した鹿目まどかとカービイを探していた魔法少女達はカービイならまどかに危害を加える事がないだろうというマミの言葉でしづしづ搜索を中断し、各自自宅へ戻つていた。

腹を空かせた杏子と共に家に戻つたほむらは夕飯を用意しながら、ずっとカービイの言つたあの言葉が気にかかつていた。

(魔法少女が魔女? そんなわけない……はずなのに……)

カービイが苦し紛れに放つた言葉だと杏子は一蹴している。キユウベえも「魔法少女でもない彼の言葉が信じられるのかい?」なんて言つていた。しかし……

(何かが気にかかる…大事な事を忘れてしまっているような?)

「…い…！おい！ほむら!!」

「へっ?にゅああっ!」

自分を呼ぶ声でハッと我に返る。エプロンをつけて簡単な野菜炒めを作っていたほむらだが、ずっと考え事していた為か、フライパンの中には真っ黒い炭と何かの塊が出来上がってしまった。

家の中にはもくもくと煙があがり、口元を抑えながら杏子は慌てて呆けた顔で立つほむらを押しのけてフライパンに通る火を消しにきていた。

「火事でも起こす気か? ったく…」

「ご、ごめんなさい…！すぐ作り直すから!」

「チツ…アタシがやるよ。アンタは向こうで座ってな。野菜とか肉焼くぐらいならアタシにもできる」

食べ物を無駄にした為か、少しイラついたのか? 杏子はシツシツとほむらをテーブルへ追いやり、手際よく調理にかかる。そんな杏子にほむらは謝ると同時にいなくなった二人の事を聞いた。

「あん?…アタシはキュウベえの話はあんまり信用してねえからさ。あのピンクがあっちのピンクさえ返してくれりゃ別にどうこうしようだなんて思わないね」

「えっ?」

「アイツの話を全部鵜呑みにするなって事さ。アイツと長くつき合ってるいやわかるが…まあ、そこはいいか。アタシはワルプルギスさえ越えられりゃ後はどうでもいいんだ。それに鹿目まどかの力があるんだったら仕方ないだろ」

彼女はちよくちよく肉をつまみ食いしながらそんな話を話す。どういうわけか佐倉杏子はキュウベえをさほど信用していないらしい。

その理由を問い詰めて聞いてみた所、彼女曰くたいした理由もなく気にしすぎかもしれないが彼が話す内容はどこか胡散臭いんだという。

「マミのヤローやトーシローのアイツはなんとも思っていないようだが、前のアンタはアタシ以上にキュウベえを物凄く警戒してたぜ」  
「…そうですか…ところで佐倉さん、言いづらいんですけどお」

あん？と振り向いた彼女は口をもがもがさせながら振り向く。ほむらが席を立ってキッチンで野菜を炒める杏子の横にいき、先ほどから肉をつまみ食いしているフライパンの中を覗き込むと…見事に緑一色となっていた。

「バレた…？」

「むう…当然です！お肉が全部ないじゃないですかっ！絶対にお肉目当てでしたよね〜！」

「わりいわりい…あはははっ」

—— さやかの家

まだ20時で年頃の少女ならばまだまだ起きている時間帯だ。しかし、美樹さやかは真つ暗な部屋の中で一人、布団にうずくまっていた。その手に淡く輝くソウルジェムを握りしめ、彼女はずっと考え事にふけこんでいる。

「……………」

“ どうしたんだい？さやか…志筑仁美と会ってからえらく塞ぎ込んでいるじゃないか…”

窓も扉も締めていたはずなのにどこから入ってきたのか…布団の外から頭に響く無機質な声が聞こえてくる。プライバシーもクソもないその生き物に不機嫌になりながらも彼女は身体を起こすと…やはり、勉強机の上にキュウベえの姿があった。

「…いろいろあるのよ…ほっというて」

“ ……なるほどね。どうやら君も…使えそうだな”

「…？出てってよ。今、機嫌悪いからアンタに当たっちゃうかもしれない…」

………

カービーがまどかを連れ去り、二人を探していた時…街を走り回っていたさやかに聞き覚えのある声がかげられた。それは…

「さやかさんー！」

まどかとさやかの友達である志筑仁美という少女。ちなみにハコの魔女の集団自殺の時にいたあの少女である。彼女は何かを戸惑っているようではあったがやがて、重々しくその口を開いた。

「…明日お話ししようと思っていたのですが…いえ、私も覚悟を決めました。この後、お時間はありますか？」

「えっ？あ…うん」

彼女はさやかに話があったらしく、聞いてみると…なんとさやかの幼なじみの上条恭介に惚れているというのだ！そうとは知らなかったさやかは絶句してしまふ。

なぜなら、実はさやかの契約はその彼を思っただけの願いで美樹さやか

もその幼なじみの上条恭介の事が好きなのだ。そして、仁美はさらなる追い討ちをかけてくる。

「私、明日の放課後に上条君に告白します」

「えっ!? こ、告白って…」

「…丸一日だけお待ちしますわ。さやかさんは後悔なさらないよう決めてください。上条君に気持ちを伝えるべきかどうか」

“では…”と会釈して立ち去る仁美を見つめて道端のド真ん中で固まってしまう。心ここにあらずというのはまさにこの事でさやかの頭にはずっと上条恭介と志筑仁美がぐるぐると回っていた。そして、気がつけば家に戻り、ベッドで転がっていたというわけだ。

(あたし…あたしは…どうすれば!)

《こぼっ…》さやかの手にする青い宝石の光が微かに闇が差し込み始めた。それはほんのわずかの穢れではある…けれども確実にさやかのソウルジエムを蝕んでいる。

## 23. 悪夢の始まり

「出てっつてよ。キュウベえ…今は誰とも…」

“…そうはいかないよ。この近くに魔女の結界が現れた。放っておくと被害が拡大してしまう…！僕はこの事を知らせにきたんだ”

それには布団にうずくまっていたさやかも無視する事はできず、人々を救う為に顔を歪めながらも立ち上がる。この時間帯に出掛けるとなれば十中八九家族に止められてしまうだろう。

なので、彼女は変身を済ませると部屋に鍵をかけて窓から外へ飛び出した。彼女は目を閉じ、魔女の気配を探ると…確かに近くに反応があった。

「んと…向こうかな？」

彼女は人目につかぬように家の屋根や電柱を駆け、その反応がする方へ向かう！そんな中、キュウベえの声がさやかの頭の中に響いた。

“僕はこの事をママやほむら達に伝えてこよう。さやか…君は魔法少女になったばかりでまだ弱い。だから、一人で無理は…”  
「…っ!?あたしを馬鹿にしないで！そんな事わかってるわよ!!」

真実をありのままに話すキュウベえに恋煩いの事もあって不機嫌なさやかはつい顔を赤くして反発してしまう。彼女のへその辺りについたソウルジュエムもその怒りに反応し、青く光を放っていた。

“どうやら怒らせてしまったようだね…だけど、くれぐれも…”  
「早く行ってー!」

彼女はキュウベえを自身の肩から降ろし、彼に怒鳴ってしまう。やれやれ…と言わんばかりに顔をふるふる振ったキュウベえの態度

にはカチンときてしまうさやか。

しかし、悪いのは不機嫌な自分であると彼女もわかっている為、何も言わず彼を置いて魔法の元へ向かう。

残されたキュウベえはさやかの背中をその赤い瞳で見つめていたが…彼女が見えなくなるとその口から何かを吐き出した。それは…

“せつかく魔法美樹さやかが孵化しかかっているんだ。使わない手はないよね”

キュウベえの吐きだしたモノ…それは限界ギリギリまで穢れを吸いきったグリーンフシード。おそらくこのまま置いておけばものの数分で魔法が孵化してしまうであろう。

彼はこれをマミのマンションの近く、それとほむらと杏子が共同で生活しているボロアパートの近くに設置する。そして、それが孵化し、魔法が出現した後何食わぬ顔でマミとほむら&杏子へ声をかけにいくのであった。

……………

「ああーもう…ウザったい!!」

ザツと大地を蹴り、サーベルのような物を持った影が周囲を囲む黒い触手状の使い魔を切り裂く…この影は美樹さやかでこの魔法の能力か、結界に入った時にさやかは影のように黒く塗りつぶされてしまった。

「くっ…あたしの邪魔をしないでよ!」

魔法を倒せば使い魔も消える…ならば、奥にいるであろう魔法の所

に一直線で向かい、速攻で倒せば万事解決だ。

そう思ったさやかは身体に纏わりつこうとする影の触手を無視し、魔法の反応がする方へと一気に駆け抜ける。

並みの魔法少女を優に越えるスピードを持つ彼女は立ちふさがり使い魔の間をすり抜け、いよいよこの結界の主【影の魔法】と邂逅を果たす！

「あれが…魔法！」

影の魔法というだけあり、全身真っ黒で祈りを捧げるロングヘアーの少女の姿をしていた。自分に構う事なく背中をむけ、一心不乱に祈りを捧げる魔法にさやかは思わず息をのむ。

隙だらけではある。しかし、何か嫌な予感がする。果たしてこのまま攻撃を仕掛けてもよいものかとさやかは足を止めてしまうが…

(いや…大丈夫！あたしには癒やしの魔法もある…！少しのダメージなら！)

契約時の願いにより自分の固有の魔法が決まる。彼女は他者の怪我を治す為に契約をした為、【癒やし】の魔法が備わっていた。

多少無茶をしても回復できる為、いける！と考えたさやかはサーベルの剣先を背をさらす魔法へと向け…今自分が出せる最大のスピードで飛びかかった！

祈りに集中し、背を向けている為か気づいていないはず…だと思っていた。しかし、それは大きな間違いであった。魔法はこちらを見る必要がなかったのだ。

「なっ?!髪が伸びっ?!ぐうっ!!」

祈りを捧げる魔法までもう目と鼻の先という所まできたさやかは剣を突き立てようとしたその時、魔法のロングヘアーがさやかへと襲



いかかった。

突き出した剣はうねうねと蠢く髪によって掴まれ、その予想外の反撃にさやかはその手から離してしまう。さらに、そのまま魔女のロングヘアーはさやかの身体まで伸びてくる！

「うぐぐっ!?!はな…れ…!」

身体を這いずり回る髪の毛から逃れようと振り払ってもがくさやかだが、腰まで伸びる程長い魔女の髪から逃れる事はできない!それは瞬く間にシユルシユルと首にまで伸ばされ、一気に締め付けられてしまう。

「がっ…ああっ…!?!」

首を圧迫されて息を吸う事ができないさやかは徐々に強まっていく力に意識も遠のいていく…このままでは死んでしまう!

さやかは震える手を懸命に伸ばし、こんな時でもこちらを見向きもせずに祈りを捧げている魔女の上へと剣を具現化。そして、その手を振り下ろす!

【ギヤアアアアッ!?!】

魔女の悲鳴がこの空間をこだまする。彼女の頭にはさやかのサベルがずっぽりと突き刺さっていた。その傷口から黒い液体が噴き出し、影の魔女は両手で頭を抑えて苦しんでいる。

「今しか…かはっ…げほっ!」

それにより髪の毛の拘束も緩んだ為、強引に振りほどいて咳き込みながら距離をとるさやか。首には髪の毛で絞められた痕があり、剣を杖代わりにしてなんとか立っている状態である。

「っ…うっええ…！か、回復を…」

魔女が怯んでいる間に自身に癒やしの魔法をかける。身体から青い光が溢れ出したかと思うと首の痕が薄くなっっていく。

治療が完了すると魔女も戦闘態勢に入ったのか、こちらを見ていた。真っ黒く塗りつぶされており、表情は窺えないがその様子から怒りが読みとれる。

「ハア…ハア…お怒りってわけ？奇遇だね…あたしも虫の居所が悪いんだ。後悔しないですよ!!」

怒りを向けてくる魔女に負けじとさやかは自分の周囲に剣を何本か具現化させて魔女と対峙する。万全の状態へと回復したさやかとそれなりのダメージを負った魔女。

有利なのは新人とはいえ回復能力を持つさやかだと言える。しかし、怒り焦る彼女が魔法を行使する度に真っ黒な光は魔女結界内の中で青く輝く彼女のソウルジェムを蝕んでいった。

……

暗く人通りもなくなった歩道をマミは急いで走っていた。その肩にはキュウベえがいる。

「さすがマミ…魔女を一瞬で倒すなんてね。僕の予想以上だ!」  
「キュウベえー美樹さんはこの先にある魔女結界にいるのよね!」

マミのマンションの近くに出没した魔女はキュウベえが知らせを知らせる前に反応を見つけたマミが撃退していた。

そして、他の反応もいくつかあったのでそこに向かおうとしていた所でキュウベえと出くわしたのだ。そこで彼からはさやかが危ないから救援を頼むと言われ、今に至っている。

“今のさやかは少し精神が不安定だ。僕も無茶はしないように引き止めはしたけど…聞いてもらえてるかはわからない。急いだ方がいいよ!”

「そう。無事でいてよ…美樹さん!」

……

「勝利…頂いたよ!」

「な…なんとかなりました〜」

自宅の近くにでた魔女を今し方倒し終えたほむらと杏子はハイタッチをかわしていた。そして、三つあった反応は一つはすでに潰れ、一つは今潰した為、残るもう一つの反応がある場所へ彼女たちは向かう。

「おい…まだ記憶は治んねえのか?」

その最中に杏子からそんな言葉が投げかけられた。彼女はどうかやら心配してくれてるようでそれが少し嬉しくなるほむら。

最初は自分勝手にいつも食べ物の事しか考えていない子という認識だった。しかし、共に暮らしていてわかったのだが、口では杏子は厳しい事を言うものの実際は彼女も非情に徹し切れていない部分があるのだ。

簡単にいえば素直になりきれていないツンデレ少女といった所か?

「ええ、でも少し心に引つかかるような…？そんな違和感はあるんです…」

「へえ…まあ、その…少し調べてはみたが、そういうのはやっぱり何かきっかけがあればすぐに戻るってものも多いんだってよ。もしかしたらふとした事で一気に思い出すかもしれないねえぞ」

「佐倉さん…私の事、調べてくれたんですね！」

そう言うことやはり素直じゃない彼女はほむらから目をそらし、そっぽを向く。そして…

「あつ…か、勘違いすんな。アタシはアンタが早く本調子になってもらわねえと困るから言ってるんだぞ!!ワルプルギスだってくるんだ!万全の状態じゃないとマズいだろう!」

「ふふっ、そうですね…ふとしたきっかけ、か…」

…  
後にほむらは記憶を取り戻す事となる。それは最悪の形となって

## 24. 絶望に沈む人魚姫

何で出来ているかわからない黒い床を蹴る美樹さやか。その瞬間、先ほどまで自分が立っていた場所は槍のように鋭利となった物が突き刺さっていた。

それは魔法の頭部から生えた髪の毛で魔法は髪を変幻自在に伸ばしたり、広げたりしながらさやかを攻撃していた。

「ハアハア……これじゃ近づけない！」

さやかのスピードであれば真正面からくる髪など避けるのは容易い。しかし、問題は彼女に攻撃の手立てがない事であった。

近づこうにも髪に阻まれ近づけず、剣を投げようにも髪によって掴まれる。魔法はそれをわかっているのか、先ほどからこうして牽制の一撃しか入れてこない。おそらく自分の間合いに入ってくるのを待っているのだろう。

「くっ……魔法の使いすぎかな……？身体が少し重い……！」

このままではいずれスタミナが尽きて負けてしまう事は明らかだ。一応キユウベえが救援を呼びにはいったものの、このままいつくるのかわからない救援を信じて待つより戦って倒した方がいい。そう判断し、彼女は勝負に出る！

「これで決める……！」

多少のダメージは覚悟してさやかは真つ正面から突撃する！当然、魔法は髪を伸ばして応戦。さやかの身体にズブズブと槍のように鋭い髪の毛が突き刺さった……かのように思われたがそれは彼女が身につけていた白いマント。

さやかはヒットする直前に自身のマントを広げ、それを身代わりに

して回避していた。そして、彼女が今いる場所…それは。

「ここだっ!!」

髪を伸ばす魔法の遙か頭上!髪で覆われていた為、魔法が見る事のできない死角にさやかはいた。足元に素早さと勢いを上昇させる為の魔法陣を描き、彼女は空を蹴る。そして、標的を見失ってキョロキョロと周りを見渡す影の魔法の脳天目掛け、その剣を突き出した!

【ギシャアアアアツ!】

黒い液体が勢い良く噴き出す。頭を二度に渡って貫かれた魔法の絶叫が響いた。しかし、絶命するまでには至らず、魔法の頭に剣を刺すさやかの腹部に鋭い髪の毛が突き刺さる!

「うぐっ!ああああっ!」

魔法の最後っ屁と言うべきか、力を振り絞った魔法の攻撃が超至近距離にいるさやかの足を、肩を、腕を貫いていく。かわりにさやかも魔法の身体の周りに剣を作り出し、影の魔法の身体を串刺しにする。

どちらかが倒れてもおかしくないこの競り合い…先に倒れたのは

…!

「ハア…ハア…」

【……………】

ドサツと全身の至る所に剣が刺さった黒い塊が地面に倒れ伏せる。それを見下すさやかは荒く息を吐き、今にも倒れてしまいそうなくらい傷ついていたものなのか生きていた。

「あたしの…勝ちだ…!」

血混じりの咳をしつつ、彼女は自らに回復の魔法をかける。勝因はやはりこの回復魔法の存在が大きかった。

何度も自分に重ねがけしながら戦っていた為、腹をえぐられるような攻撃を受けても彼女は剣を振るう事ができたのである。

“…魔女を倒せたようだね。さやか”

傷を塞ぐため尻餅をついて癒やしの魔法をかけていたさやかの後ろから入った者の色を失わせるこの魔女結界の中でも変わらない姿を保つキュウベえが現れる。

「キュウベえ!？」

“皆に連絡したからすぐに来るはずだ。僕はママから君のサポートをするように言われてここにきたけど一人で倒すなんて…お手柄だね、さやか”

「へへん、どんなもんよ!これがこの魔法少女さやかちゃんのこと…」

“でも、残念だ”

“君はここで終わりだよ”

え…?と呆気にとられた顔でキュウベえを見るさやか。キュウベ

えは前足を伸ばして何かを指差しているようだ。それは、さやかへのそのあたり：そう、魔法少女である証「ソウルジェム」

しかし、その色は元のサファイアのような美しい青の輝きではなく…この魔女結界の影よりもドス黒く禍々しい光を放っていた。

「真つ黒…うど、どうなってるの！これ…」

“君が持つ負の感情、魔女との戦いで生じた大幅な魔力消費…それらの穢れは少しずつだけ君の魂を蝕んでいったんだ”

「魂？…どういう…!?!」

“言葉通りの意味さ。君たち魔法少女の身体は単なる外付けのハードウェアでしかない。君の命とも言えるのはそのソウルジェムなんだ”

「えっ…う…あ…う…」

魔法少女の身体は外付けのハードウェア、命はソウルジェム…という事はすなわち…!その事実には背筋が凍りつく。そんな事は知らされていなかった。おそらくママも杏子もほむらも知らないのだろう。思わずさやかは立ち上がり、いつもと変わらず無表情に見つめてくるキュウベえに怒りの形相で詰め寄った。

「それ…じゃあ、あたしは…!あたしはゾンビにされたようなものじゃない!?何てことしてくれたの!?元に…元に戻してよ!!」

“それは不可能だ。君はもう魔法少女、二度と人間に戻る事なんてできないね”

「そんな…嘘でしょ…!?!嘘だって言っつてよ…ねえ!」

その場に膝をつき、地面を何度も殴りつけるさやか。彼女の手は血で染まり、彼女の目から涙がこぼれる。へそのソウルジェムは徐々に微かに残っていた青の輝きが消えていく…

しかし、それだけならまだ良かったと言えるかもしれない…この話には続きがあった。ソウルジェムの事を知らされ、絶望しているさや



かにさらに追い討ちがかけられる。

“ さやか、よく聞くんた。君は手遅れだと僕は言った…その意味を教えてあげる”

「いや…もう何も聞きたくない！やめてよ…！」

ポポポポツと背後から騒がしい足音が聞こえてくる。この足音はカービイのもの…こちらに近づいてきているのであろう。そこにまどかがいれば幸運だと思い、目の前の少女にキュウベえはあまりにも残酷な真実を告げる。

“ そのソウルジェムが完全に濁りきった時、君たち魔法少女は魔女になる。魔女の正体…それはこうしてソウルジェムが濁りきった魔法少女なんだよ”

「あつ…」

変わっていく。さやかのソウルジェムが魔女が持つグリーンフシードへ…それはすなわち穢れが溜まり、魔法少女が魔女へ変異する事を現す。

自分が戦っていたモノは自分と同じ人間だった者…そして、自分もいずれそうなってしまふ事を悟ったさやかは身体の底が急速に冷えていくのを感じていた。

「……………」

やがて、彼女は…いや、さやかであった肉体はドサリと崩れ落ちてしまう。その目に輝きはなく、もう二度と動く事はない。美樹さやかは死んでしまったのだ…

彼女の亡骸からグリーンフシードが禍々しい光を放ちながら宙へ浮き、そこで何かを形作っていく。出来上がったそれは甲冑を被った巨大な人魚と言ふべきだろうか…魔女はさやかの剣を持ち、この結界内

を揺るがす大きな雄叫びを上げた。

「<sup>ゼツ</sup>魔女の完成だ。<sup>オククタヴィア</sup> Oktavia <sup>フォン</sup> Von  
Seckendorff：それが今の君の名。まどかの契約の為、せいぜいその力を貸してもらおうね！」

この結界が上書きされていく：影の世界は塗り替えられ、その魔女を中心にこの場が書き換えられていた。

そこはオーケストラやコンクールなどで使われる劇場のよう：瞬間に巨大なホールが出来上がる。それと同時に何者かがこの場に足を踏み入れた！

“：遅かったね。今し方終わったよ”

(っ?ゝ)へさやか…!

現れたのは悲しそうな目で倒れているさやかを見るカービィだ。彼は魔女やキュウベえに目もくれず、倒れ伏したさやかへと駆け寄ろうとする。しかし、それはさやかが持っていたサーベルを手にする巨大な半魚人により遮られる。

その半魚人こそ：美樹さやかが魔女へとなり果てた姿【人魚の魔女】だ。

## 25. 悲しき結末

“さて、僕は失礼させてもらうよ。まだやるべき事が残って…”

ぴよんぴよんと俊敏な動きを見せ、人魚の魔女から距離をとったキュウベえはそう言つてこの場から立ち去ろうとする。

しかし、この結界の主はそれを許さなかつた…彼が動いたその瞬間、カービイと睨み合つていた人魚の魔女が手にしたサーベルを彼へと振り下ろしたのだ！

当然、キュウベえがそれを避けられるはずもなく、地面を揺らす程の一撃を叩き込まれた彼は出来上がったクレーターの中でバラバラとなつていた。

グチャグチャになつた真つ白な肉片を見るにおそらくキュウベえは生きていないだろう…

( つ?~c ) ^:~!

最後を迎えたキュウベえに複雑な気持ちを抱きつつも魔女の注意がそちらに向いているその隙に動かないさやかを救おうと駆けるカービイ。

近くまでいき、さやかを吸い込むと魔女さやかから急いで距離をとる。カービイが接近した事に気づいた魔女は逃がすものかと身体の周りから馬車の車輪のような物を出して走るカービイへ発射！

『カービイ！そのままジャンプして！』

どこからともなく聞こえてきた声に従い、カービイがジャンプすると数発の光の銃弾がその大車輪をかき消した。光弾が放たれた方を見るとそこには…

c ( ??? ) つ ^ マミ！

マスケツト銃を構えたバママミがそこにいた。彼女はカービイにウインクするとリボンで彼を優しく巻き上げ、自分が立つ場所まで引き寄せる。

「カービイ！美樹さんは無事!？」

（っ?0,）へびゅ!

吸い込んださやかを吐き出し、ママミへと見せる。カービイはさやかを彼女に任せ、向かってくる魔女を迎え撃つべく駆け出した!

「…!美樹さん…」

やはり、美樹さやかは死んでいた。魔法といえど怪我は治す事はできても死んでしまった人を生き返らせる事はできない…

彼女の亡骸を戦闘の被害を受けない場所へ置き、ママミはふつつと湧き上がる怒りを魔女へと向ける。

（…くっ!許さない!あの魔女は美樹さんの仇!）

「絶対に許さないわよ!」

……

（?~?）へさやか!さやか!

大剣で横になぎ払われるもののそれをジャンプでかわし、そのまま鉄仮面を被った魔女の顔を蹴りつける。しかし、仮面に守られている

為か蹴りではびくともせずそのまま頭突きで地面に落とされてしまった。

しかし、カービィは諦めず必死に呼びかけを続けていた。もしかしたら…とそんな希望を抱き続け、懸命にさやかの名前を呼び続ける。

そんな中、自分の背後からとてつもないエネルギーの高まりを感じたカービィは振り返る。すると、そこには以前に見た「ティロ・フィナーレ」を大きく上回る巨大な大砲を構え、涙を流しながら魔女を睨むママがそこにいた。

(っ?。o?)へま、ママ!?

「ボンバル…ダメントオツ!!」

止めようとしたが間に合わなかった。ママの大砲から光のレーザーが放たれ、人魚の魔女を吹き飛ばす。消滅までは至らなかったようだが、顔を覆っていた仮面はひび割れており片腕を抑えて瀕死に近い状態であった。

「美樹さんの仇!消え…!」

c (???)へダメ!

マスケット銃を手にし、怒りの形相で魔女へと詰め寄るママの前にあるカービィ。あの魔女はさやかなのだ!まだ…まだ助ける手だてがあるかもしれない。それがわかるまでカービィは見捨てるつもりはなかった。

「…?どいて、あれは魔女。美樹さんの仇なの!」

(???)へさやか!

ママは魔女化の事を知らない。なのでカービィは伝えようとするがママは何を言っているのかわからない様子だ。

「どいて、カービィ…どきなさい！」

c (???) フルフル

と、カービィとマミが言い合っていると…不意に背後で大きな爆発が起きる。何事かと思い、振り返るとそこには盾を構えた暁美ほむらと彼女に掴まっている佐倉杏子がいた。

そして、人魚の魔女は…燃え盛る炎に中で身体を焼かれて苦しんでいる。必死に手を伸ばし炎から逃れようとする人魚の魔女。しかし、トドメと言わんばかりに杏子に投げつけられた槍により、魔女は動かなくなり…やがて、消滅した。

「おい、楽勝だったな！…？…？…どうした、ほむら？」

「美樹…さん？美樹さん…なの？」

……………時は数分前に少し遡る。

ほむらと杏子は時間が止まった世界で動かない使い魔の横をすり抜け、影の魔女結界を上書きし出来上がった人魚の魔女結界の中を進んでいた。

なお二人は現在仲良く手を繋いでいるのだが、それは別に特別な関係というわけではなく、時を止めている間はほむらに触れていないと杏子も止まってしまう為である。

「…奥に魔女だけじゃねえ…なんか別の反応があるな」

「これは…巴さん？それと…この反応は誰だろ？」

「さあな、さやかかって奴じゃねえのか？」

魔法の反応、それと近くに二つの反応がある。これはマミとカービイのものなのだが二人に知る由もない。豪華なホールの廊下を走り、彼女たちはカービイたちのいる大ホールにやってきた。

すると、入り口近くに何かがある事に気がつく。それはマミが避難させていたさやかの亡骸である。

「ん？こいつ…なんでこんな所にいるんだ」

「ケガをして下がってるんでしょうか？まあそれよりも…！」

「あの魔法だな。なんでかカービイもあそこにいるが後回しでいいだろ」

なにやら言い争いをしている様子のカービイとマミの横を通り、すでに満身創痍でボロボロの人魚の魔法の前へといく二人。傷口を見るにマミの砲撃にやられたのであろう事がわかる。

「こいつは半分魚に半分人間みたいなナリしてんなあ…まるでガキの頃に聞かされた人魚だ」

「人魚…の魔法…オクタヴィア…」

「ん？なんだ、顔見知りの魔法か？」

「いいえ？…あれ、なんで私…名前を知ってるの？それに…」

ほむらはこの魔法をどこかで見た事があった。もちろん見た事も聞いた事もない。となれば答えは一つ…

(私のなくなった記憶が関係してる…前の私はこの魔法を知っていたの?)

「おい…ほむら?」

「はっ…ごめんなさい！爆弾で倒します。うち漏らした時はお願いしますね」

何か引つかかる事はあるもののほむらは盾から爆弾を取り出し、魔法の足元にセット。時間が止まっている為、爆発を告げるカウントも止まっている。

爆発の範囲外まで逃れ、時間停止を解いたほむら。世界は色を取り戻し、爆弾のカウントダウンが始まる。

言い合いをしているマミとカービィはほむら達には気づいていないように魔法も足元に置かれた爆弾には気づかず、突然現れた二人を威嚇していた。

「3, 2, 1...終わりです」

0：魔法が大爆発を起こす。それと同時に断片的にだが、ほむらの頭に自分が知らない記憶が流れ込んできた。

それは今と同じようにこの魔法を倒すほむらの姿...あの魔法をさやかと呼び、顔を歪めて悔しがる杏子。どういうわけか魔法少女となったまども涙を流してうなだれていた。そして...

『ソウルジェムが魔法を産むなら...みんな死ぬしかないじゃない!』

自暴自棄となったマミが近くにいた杏子のソウルジェムを砕いて命を奪い、ほむらに銃を向けていた。思い出せた記憶はここまでだ。

焼かれる魔法を見ながらほむらは考える。すでにまどかが契約していたり、カービィがいなかったりする理由はわからないものこの際それはどっちでもいい。

ソウルジェム...魔法を産む...それはつまり、マミの言葉を信じるならば魔法少女は魔法になるという事になるのではないだろうか。

〔魔法少女〕〔魔法〕〔なる〕あの時、カービィの言っている事は本当...だった?という事は...)



記憶の中の杏子は人魚の魔女をさやかと呼んでいた。となると…  
今、ほむらが爆弾で消し去った魔女は…魔女の正体は…!

「美樹…さん？美樹さん…なの？」

## 26. 寂しがり屋の少女は月下に眠る

(そうだ…思い出してきた…まどかを守る為に、弱い自分を捨てる為にキュウベえと契約した)

床に落ちた美樹<sup>グ</sup>さやか<sup>リー</sup>であつた<sup>シ</sup>ものを拾<sup>ド</sup>う。これはさやかの形見と呼ぶべきものだ。友を失った事にその身体を震わせ、涙を流しそうになるほむら。しかし…

(伝えなきや…皆、キュウベえに騙されてる!)

伝えなくてはならない。魔法少女について、ソウルジェムについて…そして、魔女について。ほむら達がキュウベえに何をされたかを! ほむらの横にいた杏子は突然、情緒不安定になったほむらを訝しむように見ていたがそんな彼女の手を引いてさやかを抱いて泣き崩れているマミとカービイの所へいく。

「お、おい!なんだよっ…ほむら!?今はそつとしておいてやろうぜ…」  
「ごめんなさい!美樹さん!間に合わなくて…私はまた…!」  
あああああ…」

マミは自分がもつと速く駆けつけていれば…さやかにちゃんと戦い方をレクチャーしていれば…と後悔していた。カービイはそんなマミの背中をさすって慰めている。

「巴さん…」

「……………」

「聞いてください!巴さん!…美樹さんについてです!」

さやかの遺体を抱き締めて泣き崩れるマミの身体がピクリと反応した。そして、おそろおそろほむらの方に顔を向ける。

彼女の整った顔は涙やら鼻水でぐちゃぐちゃになっていた。そんなバミは見た事ないはず、見た事ないはずなのに頭の中にはそんな彼女の記憶がある。

その事に疑問を抱きながらもほむらは皆に魔法少女の残酷な運命を告げていく。

「カービィ、ごめんなさい。私はあなたを疑ってた…あなたの言う事は本当だったんだね…」

（ つゝ？ ）へぼよ？

「私は少しだけ記憶が戻りました。どうしてかはわからないけどあの魔女を見て思い出したんです」

こうしてほむらは話した。ソウルジェムは魔法少女に変身する為の道具だが、それは自分の魂を形にしたモノだという事。

ソウルジェムが完全に濁りきった時、それは死ではなく魔女へと姿を変え自我がなくなってしまう事。

キュウベえに騙されていた事をみんなに告げると、元から知っていたカービィは特に変わらないでいたが…

「なっ!? なんだとお…! 嘘だろ? なあ…!」

「いいえ、おそらく本当の事です。そして、美樹さんもその犠牲になった…」

「…どういう…事…? 美樹さんはあの魔女に殺された! 間違いないわ!」

「いいえ、美樹さんの身体には外傷がないはずです。そして、彼女のソウルジェムもない。そのソウルジェムはこのグリーンシードに変貌してしまっただから…」

みんなに人魚の魔女のグリーンシードを見せるほむら。それには微かにさやかなモノと思われる魔力の反応が感じ取れる。それは確かな証拠であった。

「まじかよ…あの白狸…やってくれたねえ！」

「…あ、ああ…ああああっ!!」

怒りに震える杏子と違ってママは頭を抑えてうずくまってしまおう。変わり果ててしまったとはいえ、さやかに銃を向けて本気で攻撃をしてしまった…戦い傷つき、絶望して魔女へと変わってしまった彼女を知らなかったとはいえ…

「わ、わた…私はなんて事を…美樹さん、美樹さんがあっ!!」

「巴さん!? (しまった!)」

「おい!どこにいくんだ!? マミ!」

c (???) ミミ

涙を流しながらどこかへ走り去ってしまったママ。頭に被ったベレー帽についた彼女のソウルジェムは明るい黄色だったのが、その光の中に闇が差し込み始めていたのを見たカービィは急いで彼女を追いかける。

「おい!アタシたちも追うぞ!」

「…はい!二手に別れましょう!私は巴さんの家を探します。佐倉さんは彼女が行きそうな場所を!」

「ああ、心当たりはある!」

(巴さんに真実を教えてしまったのは失敗だった…!憎んでいた魔女が美樹さんだったという事に巴さんは耐えきれなかったんだ…私のせいだ)

……

夜の闇に覆われ、誰も寄りつかないような山の中。月明かりはその中でうずくまり、一人涙する巴マミの姿を映し出していた。

「……………」

知りたくなかった。自分が戦っていたモノの正体。そして、友達だと思っていたキュウベえが自分や他の魔法少女に何をしていったのか。

“ やあ…今日は月が綺麗だね。マミ ”

感情のこもっていない声でそんな口説き文句が聞こえてくる。顔を上げたマミの前には兎のように真っ白な毛並みをした赤い瞳を持つ獣がそこにいた。

当然、彼は幽霊でもゾンビでもない。人魚の魔女に殺されたキュウベえとは別個体のキュウベえだ。彼はたとえ死んだとしてもこうして別の個体が送られてくるのだ。

「全部、全部騙してたの？」

“ 騙した？なんの事だい？ ”

ギリツと歯を軋ませ、マミはキュウベえに掴みかかる。しかし、キュウベえは動揺する事もなくやれやれと言わんばかりに首を横に振っていた。

「とぼけないでよ！なんで…なんでみんなが魔女になる必要があるの？どうしてこんな事をするのよー！」

“ 君には最初に説明したじゃないか。いくつか説明を省いた事もあったかもしれないけどね ”

「…なんて事を…！あなたのせいで…美樹さんが！美樹さんがっ!!」

キュウベエの目的を知らない彼女からしてみれば願いを餌に何の罪もない少女たちを戦わせ、最後には化け物へ変える。これは紛れもなく悪魔の所業と言える。彼がそんな事をする理由がわからなかった。

“彼女の犠牲に意味はあった。まどかに契約させる為に…それにしてはさすがベテラン魔法少女、バママミだ。なりたてとはいえ魔女さやかを一撃で瀕死にするなんてね”

「や、やめっ…違う。違うの…そんなつもりじゃ…!」

“違わないよ？君はその手で美樹さやかに攻撃してたじゃないか。今みたいに怒りに身を任せてね”

ハツとなってキュウベエを掴むその手を離す。憎しみを向けて人魚の魔女を攻撃した事を思い出したママミは地面に膝をついて謝罪の言葉を口にしていた。

「あああああつ…ごめんなさい…ごめんな、さい!」

“どうしたんだい？怒ったり、悲しんだり…君たちの感情というものは不思議だね。わけがわからないよ”

「…どうして…?どうしてこんなひどい事するの？私たち友達だったんじゃないの？」

“友達？僕と君がかい？それは面白い冗談だ。感情のない僕にも感情が生まれそうな程にね…”

やめて…やめて！聞きたくない。ママミは耳を塞いでキュウベエの声を遮ろうとするが無駄だった。キュウベエの声が頭に直接響いてくる…

“僕は君を友達だと思った事はないよ。一度たりともね”

……

お菓子作りとティータイムを趣味としているママの匂いは特徴的だった為、それを頼りに彼女の行方を追っていたカービィ。

匂いをたどり、山の中へやってきたカービィはそこで巴ママの姿を見つけた。少し遅れて杏子もこの場所へやってくる。

(っ?ゝゝ) へママミ…

「……………クソが!」

「アラアラ、新しいお客様? ウフフ…嬉しい、嬉しいわ! 新たな私の誕生日にようこそ!」

【さあさあ…ももいろさんとあかいろさんをお茶会へとご招待♪楽しんでいってね?】

## 27. マミさん救出大作戦!

( つ?~c ) <キョーコ…アンコー!アンズ!

「…うつ…くつ…」

頭を抑えてよろよろと立ち上がった杏子。彼女は何が起こったかわかっていない様子だったが、周囲を見渡してすぐに理解したようだった。

「ここは…魔女の結界か…!」

( つ?~? ) <マミ…

今、カービイと杏子がいる場所は薄暗い山の中ではなく所々に煌びやかな装飾が施されたどこかの屋敷の部屋の中だ。

どうやら、バマミが魔女に変貌した瞬間に立ち会ってしまったようで魔女となったマミが二人をここに呼び寄せたのだと杏子が説明する。

「…魔女になっちゃったんだなあ。あいつも…」

( つo? ) <キョーコ?

深く息を吐き、杏子は悲しそうに目を伏せていた。それはただの魔法少女どうしの関係だけではなく、なにか特別な関係であった事がわかる。

しばらく沈黙が両者の間に流れたが、やがて杏子がカービイに目を向け…

「…なあ、こんな事を聞くのもなんだが…あんたは魔女になったマミの事をどう思う?」

( つ?~? ) <…マミはマミ…



カービイのその言葉に面食らっていた杏子だが、満足した様子で笑みを浮かべる。そして、彼女はポケットに手を突っ込んだ。カービイはお菓子をくれるのかな？なんて思っていたが…

「…いいや、やっぱやめだ。菓子で釣るなんてアタシらしくねえ…頼む、アタシに手を貸してくれ」

なんと、カービイに向かって杏子は頭を下げた。お菓子でカービイを釣るなんて事はせず、彼女は自らの誠意を示す事で彼に訴えかけたのだ。

それに対するカービイの答えは決まっている。杏子の事は大好きだ。ぶつきらぼうだがそこはかとなし優しいさがある、お菓子もくれるし遊んでくれる…そんな彼女の頼みを聞かないはずがない。

それに、おそろくだが…杏子の頼みとカービイの思いは一致している。マミを思う気持ちはカービイも負けない。

c (???) c) ^マミ…助ける！

「…ああ、アタシも同じ気持ちだ。あいつを救ってやりたいんだ…アタシの師匠を！」

(???) ^キョーコ！

やはり、同じ気持ちだった！杏子もマミを助けたいと思っていたのだ。まだ間に合うかもしれない…まだ助けられるかもしれないのだ。それがわかるまで諦めたくはなかった。

「いくぞ、カービイ！マミを探すぞ！」

∩

c (???) ^ぽよ！

ここにカービイと杏子のマミ救出同盟が立ち上がった！彼らは部屋から飛び出し、廊下に出る。赤い絨毯が敷かれ、壁には見るからに

高そうな絵が立てかけられていた。

「やて…どこにいる。マミー！」

「?。o?。」っへぽよー」

カービーが指差す先、そこにはまるで杏子のような赤いポニーテールをしたメイド服の少女が立っていた。彼女は無表情でカービーと杏子を見据えるについてこいと言わんばかりに手招きしている。

「…畏の可能性が高いな」

「?。?。?。」へ…マミー！」

「わかつてる…!たえ畏だろうが何だろうが突き進むまでだ!」

こうして二人はメイドの少女についていく。彼女に連れて行かれたのはこの館のホールへと繋がる扉。どうやらここに入れという事らしい。

ゴクリと息をのむ杏子。カービーはどうかのかと思い下を見ると彼は扉に手をかけようと必死にジャンプしていた。警戒など全くしていない彼に思わず杏子は吹き出してしまう。

「…ははっ、緊張感のないヤツだな。どけ、カービー！」

いつでも動けるように警戒しながら杏子は扉を蹴飛ばし、中へ入る。彼女たちを待ち受けていたのは…

「この気配…!探す手間が省けた…省け…あれ?」

「???」  
「へマミ?」

「あかいろさんにももいろさん!あなた達がくるのをずっと待ってたの!」

豪華な飾り付けがされたホール、その中央に置かれたテーブルの

方からママの声が聞こえる。二人はママの姿を探すもののその姿はない。

【(っ)こよーん(っ)こーん!】

いた。よくテーブルの上を見てみると確かにママはいた。いたのだが…小さい。彼女の姿は物凄く小さかった。

その大きさはカービィはおろか、お茶会でも開くつもりでいたのかテーブルの上に用意されていたティーセットのティーカップ程。

【ごきげんよう…私はC<sup>キャ</sup>a<sup>ン</sup>d<sup>デ</sup>e<sup>ロ</sup>。あなた達の名前を教えてくださいな!】

テーブルの上にちよこんと立っていた彼女は身につけた緑のワンピースの裾をつまんで上品に挨拶をする。C<sup>キャ</sup>a<sup>ン</sup>d<sup>デ</sup>e<sup>ロ</sup>、それが魔女となってしまったママの名前らしい。

「忘れちゃったのか…アタシは佐倉杏子。あんたの…巴ママの弟子だ!」

(?・o?・c)へカービィ!…ママ!ママ!

【…ママって誰かしら?そんな事より…さあ、佐倉さん!】

「っ!?!うわあ!?!」

C a n d e l o r o は杏子の名前を呼ぶと…引き寄せられるかのように杏子がテーブルへと近づいていく。杏子が驚いているのを見る限り、どうやら強制的に引き寄せられているようだ。

【カービィも!座って座って!】

Σ (?・o?・c)へほよっ!?!

同様に名前を呼ばれたカービィは抵抗する事も出来ず、C a n d e

loroが待つテーブルへと引き寄せられてしまう！

椅子は3つあった。1つはもうすでに杏子が座った椅子。動く事ができないのか彼女は歪んだ表情で金縛りにあったかのようにその椅子で座っている。

2つ目はカービイの進行方向からおそらくカービイが座る椅子であろう。そして、3つ目。カービイの隣にある椅子だが、遠くからではわからなかったがもうすでに先客がいたようで…

「君たちもここに連れてこられたのかい？やれやれ…ママには困ったものだね」

(?..?)へキュウベえ！

「てめえには聞きたい事がいくらでもある…！が、今はそれどころじゃねえ…！くそ、動かねえ…！」

カービイの隣の席には猫のように毛繕いをするキュウベえの姿がそこにあつた。彼がなぜここにいいのかは気になったが今はそれどころではない！

【ウフフ♪今日は私の為に集まってくれてありがとう！】

全員が席に着いた事を確認し、彼女は上機嫌で両手をいっぱい広げる。いったい彼女は何をするつもりなのか…動きを封じられ、見る聞く話す事しかできない杏子は同じ状態となっているカービイを見た。

流石にカービイも警戒しているのか真剣な顔つきとなってママを見ていたが…チラリと今、別の所を見た。カービイの視線の先にあつた物、それは…

(お菓子かよ!?)

色とりどりのマカロンにイチゴ、チョコレート、チーズといった各

種ケーキ。さらにはマフィンにクッキーなど紅茶によく合うであろうお菓子がテーブルの上に置かれている。カービイの目はそっちに向いてしまっていたのだ。

(…確かにうまそうだ…くくり)

“君たちの為に言っておくけど、ここで出された物は絶対に口にしておは駄目だ。ここのお菓子を食べた者はこの結界の住人になってしまう”

「なっ!? 『そうなると…どうなっちゃうんだ?』」

“魔女結界の一部となってしまうから…おそらくは永遠にこの結界から出る事は叶わなくなるだろうね”

魔女となったママが皆がきてくれて嬉しいだの最高の誕生日パーティーになりそうなの言っている中で彼女に聞こえないようにテレパシーをする杏子とキュウベえ。

(くっ…こいつの言う事は信用ならねえが…こんな時にしようもない嘘をつくほどじゃねえな。というかこいつ、嘘は今までついていなかった。ぼかしたり、隠したりはするがな)

『おい! 聞いたか? カービイ…絶対に…食べた…ら…!』

さつきからやけに静かなカービイに目を向けると、彼はよだれをダラダラと垂らし、目の前のお菓子を凝視していた。

動きが束縛されている為、カービイがお菓子を食べる事はできないが…束縛が解除された時、おそらくカービイは誘惑に負けて食べてしまうだろう。そうなってしまえば無事でいられる保証はない。

(くそ…どうすりゃいい…! マミは攻撃してくる素振りはないが…)

【…挨拶はこれくらいにして、そろそろお茶会を始めましょうか! 皆辛かったでしょう? 今、拘束を解く…!】

「っ!? ちよっ…ちよっと待ってくれ! マミ!」

「…佐倉さん？どうかしたのかしら？」

(ええい！もうどうにでもなっちまえ！)

「もう一人…あんたの誕生日パーティーにきてくれそうな奴がいるんだ。こっちに向かつてるみたいだからよ…そいつがくるまで待たねえか？」

## 28. マミさん救出大作戦2!

「もう一人…あんたの誕生日パーティーにきてくれそうな奴がいるんだ。こつちに向かつてるみたいだからよ…そいつがくるまで待たねえか?」

これは杏子の賭けであった。このままお茶会が開かれてしまえばカービーが危ない…というより、お茶会とマミは言っているものの何が起こるかもわからない。

なので、出来る限りこの現状を維持するのが最善策であると杏子は判断していた。マミの顔は杏子の位置からは見えないが果たして…?

「…あらあら、そうなの!?そんな大事な事早く言ってくれないとく椅子を用意しておかないといけないわね!」

ティーカップ程の大きさの彼女が魔法で椅子を作り出す姿を見て、ホツと一息つく杏子。これでまだしばらくはこの状況が続くはずだ。

「す、すまねえ…アンタに喜んで欲しくてな。サプライズのつもりだったんだ」

(…?…?)へじゆるり…

マミによる拘束が解かれてしまえば動けるようになったカービーはおそらく目の前のお菓子を食べ尽くしてしまう。

キュウベえの言葉を信用するならそうなった場合、カービーは二度とこの結界から出られなくなってしまう。そうでなくても魔女の結界の中のものだ。何かしらの毒が盛られている可能性も否定できない。

マミを元に戻し、皆でこの結界を出る。その為にカービーがお菓子を食べてこの結界の中から出られない状態になってしまったときたら

元も子もない。

“ なかなか口が回るじゃないか。感心するよ、杏子”

『はっ、てめえにそんな事を言われるなんて思ってたなかつたぜ』

( ？ ？ ？ ) 『ママのお菓子…』

『バカ、それはアイツを連れ戻してからだ！これで時間は稼げる…が、長くは持たねえ！このままほむらを待つか…それとも…！』

言いよんだ彼女には何か思う所があつたようだ。何かいい方法があるのだろうか？そう思ったのはキュウベえも同じだったようだ。

“ …？何かこの状況を脱する方法があるのかい？”

『ああ、ママのヤローは他の魔女と違う所が二つある。一つは魔女は人間を見ると攻撃を仕掛けてくるようなヤツばかりだ。だが、ママは攻撃を仕掛けてくるどころか友好的に接してくる』

“ なるほど、魔女は基本、人間だった頃の望みのまま動く。ママは繋がりを欲していたようだったから、この結果は入った者を攻撃するのではなく繋ぎ止めようとしているんだ”

( ？ ？ ？ ) 『ママは寂しがり？』

そんな情報を持っていたのなら最初に話せと言いたくなる杏子だったが、今はこらえて続きを話し始める。円形のテーブルの中央にいたママが上機嫌でカービィの前にやってきてお喋りを始めたのを見る杏子。

『そして、もう一つ…こうして会話ができる事だ。会話ができるという事はアタシたちの言葉がアイツに届く可能性はある。もしかしたら、アイツを元の姿に戻してやれるかもしれないねえ』

“ …まあ可能性は否定しないよ。僕の見限りでは元の姿に戻るなんて事はないけど。ママの弟子だった君なら起こりうるかもしれない”



『なら…やってみる価値はありそうだ！カービィ、ここはアタシに任せろ！』

(???) 『ぼよー！』

ママはカービィとのお喋りも終わり、ルンルン♪とどびっきりの笑顔で楽しそうにテーブルの上をスキップしていた。そんな彼女に杏子は真剣な面持ちで声をかける。

「なあママ…待ってる間、少し話しねえか？大事な話だ」

【いいけれど…もう、また佐倉さん！私の事をママって…私はC a n d e l o r o ！】

小さくなくても変わらない豊満な胸を張ってプンスカと怒るC a n d e l o r o 。しかし、その姿はまさしくバママそのものだ。杏子は首を横に振って彼女を見つめた。

「…いいや、アンタはバママ。アタシの師匠で仲間のバママなんだ」

【っ!?師匠?仲間?何の事かしら…】

「忘れちゃったのなら思い出させてやる。見滝原の魔法少女、バママの事を！鹿目まどか、暁美ほむら、美樹さやかに先輩なんて言われて慕われてるアンタの事を！」

【鹿目さん…暁美さん…美樹さん…?】

彼女たちの名前を聞かされて戸惑うママに手応えありと見た杏子は記憶が戻る事を願って一気にたたみかけていく。

カービィもお菓子半分こちらの様子をうかがっていた。椅子から動けはしなが会話ができるという事は吸い込む事ができる…いざという時はママを吸い込んで行動を封じる事も可能なのだ。

「カービィの事だってそうだ。アンタ、得意のお菓子作りでアイツにたらふく食わせてやってたじゃないか！うまそうにそれを食ってた

こいつの顔も思い出せないのかよ！」

「カービィ……？カービィは今日会ったばかり……あなたもよ！知らない！知らないわ！」

「アタシは……アンタの事を忘れた事なんて一度もねえぞ。アンタだって本当は覚えてるはずだ！……アンタが魔女に変わる前にいた場所……それはアタシたちの出会いの場所」

そう。マミが皆の前から姿を消して向かった場所。それは初めてマミと杏子が会おう事となった思い出の場所だった。

1年ほど前、風見野の新人魔法少女だった佐倉杏子は逃げた魔女を追って見滝原にきていた。そして、その魔女と戦い、苦戦していた所を彼女に助けられた……というのが彼女との始まりだ。

それ以降、初めて出会ったあの山はマミにとっても……また杏子にとっても忘れられない大切な場所であった。

「マミは寂しい時や悲しい時、いつもあそこに行っていたよな？ほむらに魔法少女の運命を聞かされて……優しいマミの事だ。さやかや他の魔女になっちゃった魔法少女たちの事、それといずれ自分も魔女になって町や人間をめちゃくちゃにしてしまう事に耐えられなくなつて絶望しちまったんだろ？」

【やめ……やめて！知らないわ……そんなの！】

“ 杏子……！それ以上は…… ”

続けて杏子が話そうとしたその時、キュウベえが何かテレパシーで話しかけてきていたがここまできたら止まらない。彼女は必死に魔女となつてしまった巴マミを呼びかける！

「思い出してくれ！巴マミ……そして、また帰ろう。寂しいんならまどかだってほむらだってカービィだって……そして、あたしだっている」

【……………】

「アンタはもう一人じゃないんだ。だから…！」

【…嘘つき…嘘つき！嘘つき…嘘つき！嘘つき！！】

突然のママの叫びと共に彼女の纏うオーラが禍々しくなり始める。  
この空間の空気もビリツと張り詰めたものとなってしまう。

今のママから感じられる力…それは今までの魔女とは比べものにならないほど強大なものでそれは以前、カービィとほむらが倒したお菓子の魔女をも越えていた。

「な…何を言ってるんだ!?嘘つきって…?」

【知ってるんだからあ…ホントは私の事なんてなんとも思っていない。カービィは私が作るお菓子が目当て…キュウベえは自分の迷惑の為…佐倉さんはそうね、私が受け持つ縄張りとかグリーンフィードとかかしら?】

「っ…キュウベえはともかくアタシとカービィはお前を…！」

【口では何とでも言えるわね。みんな私から離れてく…1年前の佐倉さんがそうだったように！】

「…っ！それは…」

【うるさいっ!!】

ママが吼えるとともに小さな身体から出たとは思えない程の衝撃

波がカービィと杏子とキュウベえを襲い、彼らは壁へと叩きつけられてしまう！

彼女が用意したテーブルは全て吹き飛んでしまい、お菓子やティーセットも床に落ちてしまっていた。ぐちゃぐちゃとなってしまったその残骸の上に浮かぶCandleloroは黒いオーラを纏い、怒りにも悲しみにも取れる表情で虚空を見つめている。

“…どうやら作戦は失敗みたいだね。君の言葉は彼女には届かないようだ。これじゃ状況が悪化したにすぎないよ”

「……………」

(?~?) 『キョーコ!…キョーコ?』

なにやらショックを受けている杏子に声をかけるが返事は返ってこない。そうしてカービィが彼女の元に駆け寄ろうとした時に気づく。動かなかった身体が動く事に。

何か条件があるのだろうか…だが、考えた所で答えは出てこない。カービィは考える事をやめて反対側の壁へ吹き飛ばされた杏子を見る。どうやら彼女の身体も動くようで立ち上がって中央で浮かぶマミを悲しそうに見ていた。

【もういや!信じてたのにもう裏切られるのはもういやなの!!】

「…っ!?アタシのせいなのか…?マミ、アタシがそこまでなっちゃったのは、アタシがアタシから離れてしまったから…」

【みんなが私から離れていくな…離れていかないようにしてあげろ。結界から出られなくなってしまうばみんなここにいてくれる!フフツ…アハハハハツ!!】

マミの悲しい笑い声だけがこの煌びやかなホールの響く。杏子は様子がおかしい。キュウベえは何を考えているのかわからない。今動けるのは自分しかない!そう考えたカービィは彼女を…バマミを救う為に動き出した!

## 29. 佐倉杏子と巴マミ

「アハハハハッ!!あなた達は私の大事なお友達…だから、私と遊んでよ。いつまでも、永遠に！」

ポツと20cm程しかないカービィよりもっともつと小さな身体を持つ彼女の手が光ったような気がした。すると、ゴゴゴゴゴツと音を立てながら床が大きく揺れ、この部屋の窓や扉が全て閉まる。どうやらカービィ達が逃げる事ができないようにマミが魔法で鍵をかけたようだった。

“これは…僕たちを逃がさないつもりのようなだね”  
「くっ…マミ…！」

体重を槍にかけ、もたれ掛かるようにして立っている杏子。彼女はバラバラになったテーブルの上に浮かび、悲しい笑いを上げているマミの元へ向かおうとするが足がもつれて倒れ込んでしまう。

「はあ…はあ…あいつを止めるんだろ…動け！動くんだ…！」

立ち上がろうと足に力を込めるが…どうにも身体がいうことを聞かない。単身マミへと近づき、呼びかけを続けているカービィ、彼に続いて自分も続かなければならないのに思うように身体が動かなかった。

その理由はマミに拘束されているから…というものではなく、彼女の心にあつた。

これは、今から2年前ほど前の出来事だ。

新しい時代を救うには、新しい信仰が必要だ：そういった信念を有する聖職者の父が彼女にはいた。彼女はその父親が誇らしかった。大好きであった。しかし、彼が説くその理念は教会の本部の人間や信者には理解されなかった。

家は貧しくなり、教会からも異端であると見放され、日に日にやつれていった父。そんな中でも食料を自分と妹に食べさせてくれた母。杏子は我慢ができなかった。

『少しだけでもいい：耳を傾けてくれさえすれば父さんの言う事は正しい事であるとわかってもらえるのに：』

とうとう食べる物もなくなり、信者から恵んでもらえたと嘘を吐いてスーパーやコンビニから物を盗むというそんな生活を続けていた時：彼女に転機が訪れる。奇跡を売って歩く白い獣が彼女に目をつけたのだ。

“君の願いを何でも一つだけ叶えてあげる！”

『えっ…？』

“だから僕と契約して：魔法少女になってよ！”

胡散臭い話だと思った。しかし、藁にもすがりたい状況だった杏子は二つ返事でそれを了承した。彼女がキュウベえとの契約でもたらされた願い：それは、“父の話に人々が耳を傾けてくれるように”するというもの。そう願ったその翌朝からこれまでの地獄から一変。騒がしい声に目が覚め、半信半疑ながらも教会を覗くと：

『いっぱいだ：人がいっぱいだ！』

願いは叶っていたのだ。父が所有する教会の中はこれまで見た事もない程に人々は溢れかえり、熱心に父が説く話を聞いていた。それは毎日続く事となる。

“さて、君の願いは叶えた。次は…”

『ああ、わかってる。いっちょ派手に行こうじゃない!』

願いを叶える代償に魔法少女となった杏子は意気込んでいた。いくら父の説法が正しくともそれでこの世にはびこる魔女がいなくなるわけじゃない。ならば、それは魔法少女になった自分の出番だ。自分と父で、表と裏からこの世界を救っていくんだと…杏子は思っていた。彼女と出会ったのもそんな時だ。

『危ない所だったわね…私はバママミ!あなたは?』

『…えっ?あ、ああ…アタシは杏子。佐倉杏子だ』

逃げた魔女を追い、隣町である見滝原までやってきた杏子。魔女を追いつめたままでは良かったが思いも寄らぬ反撃を受け、絶体絶命のピンチとなっていた。もうすぐそばまで迫っていた死に全てを諦めかけていたその時、彼女が駆けつけ魔女を蜂の巣にしていたのだ。

そんなママミの強さと優しさ…それと彼女が趣味にしていたお菓子作りに惹かれ、杏子は彼女の弟子として行動する事に決める。そんな生活が半年程続いたある日、色々ありながらも幸せだったと胸を誇つて言える彼女の人生を大きく狂わせる出来事が起こってしまった。

『ハア…ハア…!くそっ!間に合ってくれよ!』

ママミとの修行も終わり、家である教会へと帰っていた杏子。そんな中、突如魔女の気配を感知する。それは杏子が向かう先、すなわち教会に在るという事を示していた。彼女はがむしやらになつて駆け出し、魔女の結界に飲み込まれてしまった教会の前へと辿り着く。

『父さん!母さん!モモ!!』

杏子の祈りも通じてか、魔女が震える家族に襲いかかろうとする瞬間に彼女もやってくる。固有の魔法【幻覚】を駆使して、なんとか家族を救い出して魔女を討伐する事に成功。

怯える妹のモモをなだめて、両親に自分は魔法少女で願いを叶える代償としてさっきのような魔女と戦っていると隠していた事実を公表した。杏子は最初、褒めてもらえると思った。

自分がやっているのは人々を襲う魔女を倒すという世界を守る仕事だ。だから、父さんもさすがは我が娘だと、よくやったと、言ってくれる。そう思っていた。しかし、現実には残酷だった。

『願い…お前は私の願いを聞くようにと人々を仕向けたのか…？私の話は信仰によるものではなく…魔法の力で集まってきたというのか！？』

『えっ…と、父さん？痛い…痛いよ！』

この時はなぜ自分が腕を締め付けられ、怒鳴られているのかがわからなかった。しかし、今思い返せば父の気持ちはよくわかる。

父は異端と称されていた自分の話が人々に聞き入れられたと思っていた。しかし、それは違っていて実際は魔法の力で強制的に自分の元へ向かわされ、強制的に話を聞かされたものだった。裏切られた父の心は計り知れるものではない。

『お前は娘などではない！人の心を惑わす魔女だ…消えろ！二度とその面を見せるんじゃない！』

『あっ…えっ？…いい、嫌だっ！嫌だよ!!父さん!』

それからほどなくして父は人々に教えを説く事をやめた。魔法の力で何を言おうが受け入れる人々に教えを説くのは無駄だと悟ったからだ。それでも信者たちは父の話を聞こうと教会に押し掛けてきた。

そのストレスもあつてか父は酒に入り浸るようになった。夢と現



実の区別がつかなくなる程に酒に溺れ、聖職者であった父は狂い、そして…

『……アタシの祈りが、家族を壊しちまった。はっ…はははっ！あははははっ!!』

自分のみを残して家族は皆錯乱した父によって殺されてしまった。父も最後には自害したようで教会にはこの世からいなくなった家族が安らかに眠っていた。冷たくなった妹の手を握り、彼女は心に誓う。

他人の都合を知りもせず、勝手な願い事をしたせいで結局誰もが不幸になった。だから、もう決して他人の為に魔法を使ったりしない。この力は…全て自分のためだけに使い切ると。

そんな考えを持ったからか杏子の固有の魔法「幻覚」はいつの間にか使う事はできなくなっていた。いや、自分が無意識で封印してしまったていたのだ。使う度にあのトラウマを思い起こしてしまうから…それが原因で師匠のマミとの関係にも軋轢が生じてしまう。

『佐倉さん…いい加減にして！あなたの家族の事は残念だったけれど…そんな意地をはっているといずれあなたは死んでしまうわ！』  
『マミさん…あなたに…！事故で偶然家族が死んでしまったお前に、何がわかるってんだ!!』

つい勢いで発してしまったその言葉。涙を流してしまった彼女を見て罪悪感が生まれる。しかし、もう後には引けない。自分を心配してくれたマミを傷つけてしまった。それにこれまでのように魔法が満足に使えない自分がいればマミに迷惑がかかってしまう。そう思った杏子は…

『…アンタとはもうここまでだ。世話になったな…マミ』

『あっ…ま、待って！佐倉さん…！待って！』

『あなたは独りで平気なの？孤独に耐えられるの？』

それに『あんたと敵対するよりずっとマシさ』と答えた杏子は見滝原を後にした。以上が杏子の過去だ。ママは…独りで平気ではなかった。孤独に耐えられなかった。杏子が離れてしまってから彼女にはキユウベえしか心のより所がなかったのだ。

杏子は知らないがそんなキユウベえにまで裏切られてしまったママが絶望してしまうのは仕方がない事だろう。

「…ママ」

過去を振り返った事により、もう杏子の心に迷いはなくなった。ママは裏切ってしまった自分の言葉などもう聞いてくれないかもしれない…しかし、原因を作ったのが自分なのだとしたら。

「アタシが止めるしかねえじゃねえか…！」

再び立ち上がる杏子を見てキユウベえは首を振っていた。おそろくこのまま絶望し、魔女になってくれる事を期待していたのだろう。だが、立ち直ってしまったものは仕方がないと意識を切り替え、被害に合わないようにシャンデリアから彼女たちを見下ろしていた。

「っ!おっとー！」

(っ〜?) (っ へぼよ！)

ママを救う為にずっと呼びかけを続けていたカービーがゴムボールのように跳ねながら杏子の元へ飛んできた。それを受け止めてやり、降ろしてやる杏子。

「どうだ？へばったりなんかしてないよな？」

c (???)  
っココココ

笑顔で頷いてみせるカービィに釣られて杏子も笑みをこぼす。遠くで離れてそれを見ていたマミは身体の周りに魔法陣を展開させて、魔法少女の時に使っていたマスケット銃を展開させていく。その数10を越え、50を越え…100を越える！

「よし！いかか、カービィ！」

∩

(???)  
っへぼよっ！

その無限の魔弾とも言えるマスケット銃を意に介す事なく突っ込んでいく二人。この悲しき戦いの終わりはもう近い…

### 30. 絶望を抱いた少女に希望を!

小さな身体の周囲に浮かぶ無限の魔弾とも言えるであろうマスケット銃がマミの号令で一斉に放たれる!それはまるでマシンガンのように凄まじい音を上げながらダツシユで駆け寄っていくカービィと杏子を襲った。

【生きていればお話はできるんですもの:聞き分けのない二人にはちようどいいわ!】

「チツ!目え覚ませよ、マミ!」

目前まで迫る光を槍で弾きながら叫ぶ杏子。それらを全てを防ぎきる事はできず、露わとなつている肩や太ももに被弾してしまつていた。しかし、苦痛で顔を歪めながらも彼女が歩みを止める事はない!

( つ?~c ) <マミ!

カービィは自身の伸び縮みする身体を器用に使い、ペしやりとしやがんだり、タイミングを合わせてジャンプしたりして光弾をうまくかわしていた。今度こそ:今度こそ自分の友達を助けられるように必死に手を伸ばし、マミの名前を呼び続ける。

【うるさい:うるさい!うるさいうるさい!!これならどう!?!】

攻撃をされながらも自分呼び続けるカービィ達の声にマミは思わず耳を塞ぐ。さらに二人を拒絶するかのようにな彼女の前で巨大な大砲が作り上げられる。そう、マミの十八番【テイロ・ファイナーレ】だ。

(?・o?) <キョーコ!後ろ

「つ!?!わかつた!」

彼の言葉を受け、歩みを止めた杏子は一向に休まる所を知らない光弾を弾きながらもカービィの後ろに下がる。魔女をも一撃で仕留める程の火力を持つ【ティロ・ファイナーレ】を彼は受ける気ではないだろう。

本来ならば避けるのが正解だが、杏子はカービィを信じている。彼がいけるといふならばいけるといふ信頼があった。

そして、マミは声にならない声を上げて二人へ渾身の一撃を放つ！ズズズツと石造りの床を割りながら死の光が近づいてくる！カービィは少し後ろのめりになったかと思うと…お得意の吸い込みに出た！

(っ、っ、っ、っ) ミシミシ

光は渦となってカービィの口の中へ吸い込まれていく！しかし、魔女となり強化された【ティロ・ファイナーレ】にカービィも少しずつ…少しずつだが後ろに押されてしまっていた。

さらに、これを勝機と見たマミはマスキット銃の砲撃をやめてこの【ティロ・ファイナーレ】に全神経を集中させる！それにより光の勢いは増し、珍しくカービィの顔にも焦りの色が浮かぶ。だが…！

(っ、っ、っ、っ) ミシミシ

ここで負けてしまうわけにはいかない…さやかは救う事ができなかった。マミまで失ってしまうわけにはいかない！カービィに諦めはない。あるのはマミを救うというただ一心…それだけを考え、彼は無我夢中で吸い込み続ける！

【なんで?!なんでよ…!あなた達も裏切るんでしょ?!また私を捨てるんでしょ!!大人しく倒されてよ…!】

【私の、私のそばにいて!カービィ、佐倉さん…!】



そんな杏子の足を何かが止める。目を凝らして足を見ると微妙に黄色に光る布が見えた。それはマミの能力であったリボンだ。目視するのが難しい限りなく極薄のリボンが杏子の足を止めていた。

【終わり！私の勝ち…】

「カービィ！いけっ!!」

足を封じられ身動きが取れなくなった杏子。やがてリボンは身体全体を縛るべく徐々に足から上がってくる。だから、杏子は両手が縛られてしまう前にマミに向かってカービィを思いっきり投げ出した！

（ つ?? ） へぼくよく！

【投げっ…キャアツ!】

マミは飛んでくるカービィに対応できず彼に抱きかかえられてしまった。そのまま二人は床をゴロゴロと転がっていくがカービィは決して彼女を離さない。

【離して！離しなさい！カービィ！】

（??） フルフル

自分を包み込む柔らかかで暖かいカービィにマミは不思議と心が安らいでいくのを感じた。魔女になって湧き上がっていた負の感情が少しずつだがキラキラと彼女の身体から抜け出ていたのだ。

【ああ…マシユマロみたいに柔らかい…それに暖かい】

（??） へマミ…

そのままどれほどの時が流れただろうか…ふいにママが口を開いた。

【私…私ね。佐倉さんがいなくなっただけでずっと寂しかった。ようやくできた可愛い後輩達も良いところ見せなきゃって本当の意味では心を開けてなかったの】

ママの心からの言葉にカービィは静かに耳を傾ける。リボンに縛られている杏子は顔を歪めていた。自分のせいだと彼女は自分自身を責めていた…

【でも魔法少女の真実を知って…取り乱して、友達だと思っていたキュウベえにも裏切られて…こうして魔女になっちゃった】

【バカみたいだよね…一人で勝手に傷ついて…魔女になっちゃうなんて】

そんな事はないと言わんばかりにカービィは強く彼女を抱き締める。冷たかったママの身体もカービィの熱を帯びて暖かくなっているのを感じた。

【こんな私でもずっと一緒にいてくれる？友達だって…あなたは言うてくれる？】

（??）へぼよ！

もちろん！ママにはそう聞こえた。それを聞いた彼女は不敵な笑みを浮かべて…パチンと指を鳴らす。すると、自分を抱き締めるカービィの足元が歪み、黒い渦が彼を包んだ。カービィは闇へと吸い込ま



れていた！

「カービィ!? マミ!!」

「一緒に…ずっと一緒に！」

マミはカービィを自分の結界の奥底へ引きずり込もうとしていた。そこは入れば二度と抜け出せないマミだけの部屋。そして、そのまま入り口を消し去ればマミすらも出る事は叶わない。彼女は永遠にカービィと共にあろうと彼を闇へ引きずり込む。しかし…

「…こんな事をしてあなたを私を拒絶しようとしなのね…」  
(???)

狂気に満ちた自分を見てもカービィはいつもと変わらない笑顔を向けている。自分がどうなるかもわからないというのにマミの事だけを一心に案じ続けるカービィ。彼には魔女となったマミも心が洗われたような…そんな気がした。

彼女はカービィの足元の闇を消し去ると共に彼女本来の優しい笑みを浮かべて…

「ありがとう、カービィ。あなたに会えて良かった。私は幸せ者ね…」

c (???) つへマミ!

「正気に戻ってくれたのか?…おわっ!？」

縛られていたリボンも消滅し、倒れ込んでしまう杏子。彼女は二人の元へ向かうと…目を見張る出来事が起こっていた。

カービィに抱かれたマミの身体が徐々に薄れていっていたのだ。感じられる魔力もそれに応じて少なくなっている。最初は人間に戻るのかと思っていたがどうやら違うようだ。

カービィは驚いたような顔で彼女を見る。マミにはこの結果がわかっていたのか瞳から流れる涙を拭い、二人に笑いかけた。

「ごめんね…私に残されてる時間も少ないみたい…」

……

“…君たちが僕らの観測を越えた結果を引き起こす事。僕たちはそれを奇跡と呼んでいる。まさか、こんな現象が見られるなんて思わなかったよ。カービー、佐倉杏子”

キラキラと空に向かって光放たれているマミを見ながらキュウベえは推理していた。それはキュウベえも見ただ事もない初めての現象であつたからだ。しばらくして彼はある仮説にたどり着く。

“これには僕も見事と言う他ない。だけど、心は戻せた所で彼女の肉体はもうすでに魔女そのもの。絶望をエネルギーとし、人々を襲う負の存在だ”

“そんな彼女は絶望を捨てて、それとは正反対の希望を抱いてしまった。だから、絶望を糧にしていた魔女の身体が朽ちている…と、そういう所かな？これはとても興味深い現象だよ”

ついにはカービーの身体からすり抜けてしまうマミ。彼はそれでも彼女を必死に短い手で引き寄せようとしていた。そんな中、杏子は顔を見せないようにして俯き、肩を震わせている。

カービーも杏子も悟ってしまった。マミの心は救う事ができたが、たどり着く運命は変える事ができない事に。もう薄れゆく意識の中、彼女はそんな二人を見て…

「…私、一人が怖いって…イヤだつて言ったでしょ？でも、もう大丈夫みたい」

パアアアと花が咲いたかのようにとびっきりの笑顔のマミは浮か

べていた。もうそこに魔女Candleloroの姿はない。まどかやほむら、さやかの頼れる先輩で杏子の師匠。そして、カービイの友達であるバマミであった。

「たとえみんなと離れてしまっても、私には素晴らしいお友達がいるんですものーうふふっ…」

「もう…何も怖くない！」

……

……

…

「はあはあ…！バさん！」

ドアが勢いよく爆発したかと思えば息を切らしたほむらがホールの中へ入ってくる。ほむらはその中央に集まるカービイと杏子を見て駆け寄るが二人の様子がおかしい事に気づく。

「カービイに佐倉さん…バさんは…？バマミはどうなったの？」

「…………満足そうな顔してあいつは…マミは逝ったよ」

（っ？っ）へマミ…笑ってた

その言葉とカービイが大事に握り締めるグリーンフシードではむらは何が起こったか理解した。そして、危険は去った為か、シャンデリアから降りてきて近くで猫のように足で顔をかいていたキュウベエを睨みつける。その瞳には記憶をなくす前の彼女と同じ憎しみが宿っていた。

### 31. 明かされる真実

“遅かったじゃないか…暁美ほむっ!?”

結界の主が消滅した事により屋敷の一室のような部屋から殺風景な山へ戻ってくる一同。そして、遅れてやってきたほむらに声をかけたキユウベえがいきなり爆ぜた。

ぐちゃぐちゃになった白い肉片が辺りにまき散らされほむらはそれを踏んづける。その顔に溢れんばかりの怒りを滲ませて何度も何度も…

「その感じ…ほむら、お前!記憶が…!?”

(???)へ戻った?

今のほむらは三つ編みで眼鏡こそかけているものの、この間までのふんわりとした雰囲気はガラリと変わって…いや、記憶をなくす前の彼女に戻っていた。

キユウベえを殺した事で落ち着いたのか、ほむらはその場に崩れ落ちてしまう。そして、パープル色の瞳からポロポロと涙を流し始めた。

「記憶は取り戻す事は出来た。だけど…何もかもが遅すぎた!美樹さやかもバママももう死んだ…!今回は…今回こそは全てがうまくいくと…そう思ってたのにつ!?”

(っく?)へほむら?

「これじゃあ今までと何も変わらない!まどかを…救えない…!!”

「お前…何を隠してる?何を知ってやがる?!”

“それは僕が説明してあげるよ。佐倉杏子”

それは先ほどほむらに殺されたであろうキユウベえの声。声が聞

こえてきた方へ振り向くとそこには爆発し、弾け飛んだはずのキユウベへの姿があった。

夜の闇の中でも色を失う事のない彼は不気味に輝く瞳を泣き崩れるほむらに向けている。そして、衝撃の事実を口にした。

“ 何となく察しはついてたけれど…君はこの時間軸の人間じゃないね？おそらく…そう遠くない未来からきたんだろう。暁美ほむら

”

それを認めるかのようにビクツとほむらの肩が揺れる。ピンときていないカービィはよくわからないのか、別にそんなに驚く事でもないのか、(？…？) この顔から変わらない。

しかし、隣にいた杏子は暁美ほむらが未来人であるというカミングアウトに驚くばかりで口をあぐりと開けていた。

「は？み、未来から来たって…わけがわかんねえ！冗談だろ!？」

“ …攻撃を受けた事、それとさっきの言葉を聞いてようやく君の正体が掴めた。何か間違っている事があるかい？”

「……………いいえ、あなたの言うとおり。私はまどかの契約を阻止する為に未来からきた。みんなとは違う時間を生きる人間」

邪魔な眼鏡を外し、涙を拭き取った彼女はそのまま眼鏡を盾へとしまい込んで三つ編みにされている髪をほどく。そして、すらりと伸びた髪の毛をファサアとかきあげた。そんな彼女にいまいち状況が把握できていない杏子が声をあげる。

「まどかの契約を…？どういう事だ、ほむら。わかるように説明してくれよ」

「…明日で構わないかしら？あの子を、まどかも交えて全部を打ち明けるわ…(…ここまでできたら隠す理由もないしね…)」

ほむらがそう言うのでこの日は解散となった。カービイは記憶が戻ったほむらと一緒に帰ろうかと迷っていたがまどかを一人にしておくのは危険であると彼女が言うのでまどかの家にカービイは帰る。帰り道に誰かに見られてはいけないのでほむらの盾の中に入れてもらい、彼女に送ってもらおうカービイ。そんな中、ほむらが誰にも聞こえないような声で呟いた。

「…美樹さやかは死に、マミもこの世から去った。ふふっ…やっぱりこうなってしまうのね」

夜の闇に飲み込まれるほむらの声。それをカービイの耳は捉えていた。やっぱりとはどういう事なのだろうか？彼は悲しそうに目を伏せて歩く彼女に問いかける。

(?..?) へぼよ？

「未来から来たって言ったでしょう？私は…これまで何度か似たような体験をしてきたの。美樹さやかが契約する所も数え切れない程見てきたし、巴ママが作るケーキを何回も食べてきた」

「でも、私が彼女たちと親密になった時間軸では必ずこうやって皆死んでしまう…今回は、今回こそは彼女たちが死ぬ事はない。そう思ってたのに…それを私が崩してしまった。どうして…どうしてこうなっちゃうの？」

幾度となく出会いと別れを繰り返し、同じ時の中をループしてきたのだと言うが、少女の身である彼女はいったいどれほどの過酷な道のりを歩んできたのか…いったい何がそこまでほむらを掻き立てるのか…

みんなの前で抑えつけていたほむらの感情が一気に爆発する。彼女のこのような声を聞くのは初めてだったカービイは黙ってほむらの言葉に耳を傾けていた。

「あの二人が死ねばまどかは必ず契約を踏み切る。二人を生き返らす為には…あの子は自分を犠牲にしてしまう！それじゃあダメなのに…！あの日に交わした約束…それを私は守らないといけないのに！」  
(?…?) へほむら…

「……………ついたわ。明日全てを話す…まどかをお願いね」

もう日付も変わり始める遅い時間だというのにまどかの部屋の電気はついていた。ほむらはカービイを取り出すと涙を拭い、どこかへ消えてしまった。

……………  
……………  
……………

「まどか…」

「ほむらちゃん…」

翌日、皆はほむらの家に集まっていた。この場にいるのはほむらとその正面に座るまどか、壁を背にもたれかかる杏子に机でお菓子を頬張るカービイ…それとどこからともなく現れたキュウベえである。まどかに美樹さやかと巴マミの死は伝えており、可愛い彼女の顔には泣き腫らした跡が残っている。

「さあ全てを話してもらおうぞ、ほむら。それともこいつがいちやあ話しづらいか？」

”きゅっぶい”

射抜くような視線を受けるキュウベえだが、何食わぬ顔で毛繕いしている。ほむらは静かに首を横に振った。

「聞かれた所で問題はないわ。インキュベーターのやる事は変わらない」

” そうだね。まどかの契約が僕らの最優先事項。その為にどんな犠牲を払おうとも成し遂げてみせるさ”

(?~?)へむっ！

名前を呼ばれた事でビクツとまどかの肩が揺れる。キュウベえの生気を感じさせない赤の瞳がこれほどまで恐ろしく見えた事はないだろう。カービーが庇うようにまどかとキュウベえの間に立つ。

「長くなるわ。今から話すのは私の全てよ」

そうして、ほむらは語り出す。魔法少女となった彼女の願い、それはこことは異なる世界で出会い、友達となった鹿目まどかが死んでしまふのを防ぐ事。その為にワルプルギスの夜がくるまでの時間を繰り返しているのだ。

そのループの中で巴マミ、佐倉杏子、美樹さやかと幾度となく交流し、魔法少女の真実を知った事や些細なすれ違いで仲違いをした事で殺し合いをしてきたのだという。

カービーと出会ったこの時間軸はこれまでとは違い、全てが上手く回っていた。だが、自分が記憶を失った事でキュウベえに利用され、積み上げてきたものが一気に崩れ落ちてしまった。

そこまで言った所で自身に対する深い怒りと失ったものの大きさでほむらの慟哭がこの部屋に響く。一人の少女が背負うには重すぎる誓いに皆は絶句してしまふ。

「ほむら…ちゃん…?それじゃあ…ほむらちゃんは私の為に!」

「ちっ、なんでそれを最初に言わなかった…?っていつでもアタシも信



じなかったか…くそっ!!」

(ー|ー)へほむら?まろか?

話が複雑すぎて理解出来なかったカービイだが、ほむらはまどかの事を大切に思っているという事…それだけは理解出来た。

ならば自分に出来る事は何か。どうすればいいのだろう。しばらく考えた後にまどかが以前に言っていた事を思い出す。チラリとまどかの方を見ると胸に手を当てて考え込んでいた彼女も同様にカービイを見た。

c (??) つへぽよ!

「カービイ…?まどか?」

「……………そうだね、カービイ…!私、やっぱり皆を…!ママさんも、さやかちゃんも!杏子ちゃんだって!皆を救いたい!」

「あん?…いったい何をするつもりさ?」

「すう…はあ…すう…はあ…」

杏子からの問いかけに答えずに深呼吸するまどか。ハツと俯いて涙を流していたほむらが顔を上げた。彼女の行動、それはこれまで時間軸と同じで覚悟を決める前の鹿目まどかそのものだった。

「私、魔法少女になる!」

### 32. ハッピーエンドに終わらせる為に

「ああ…そんな…まどかあ…」

まどかの名前を呼んで泣き崩れたのは完全に記憶が戻った暁美ほむらで彼女の嗚咽がこの場に響く。それを顔こそ向ける事はないが、悲痛な面持ちで目を瞑り彼女の代わりに言葉を発する者がいた。

「アンタ、それが何を意味するのか…わかって言ってるのか？」

「…うん。私は魔法少女になるって事は私の為に頑張ってくれたほむらちゃんの想いを踏みにじる事になる…でも、私は叶えてみたい願いを見つけたの」

佐倉杏子の鋭い視線と言葉にも一歩も引く事なく、毅然とした態度で言葉を返す鹿目まどか。それだけで言葉での説得はもはや不可能であると考えた杏子はそうか…と一言。そして…

「…部外者のアタシが兎や角言う筋合いはねえ事はわかってる。けどな、一つだけ言わせろ」

「うん」

「マミやアンタの親友の死を絶対に無駄にするな。アタシが言いたいのはそれだけさ」

そう言うと杏子は机に中身のつまったビニール袋を置いて出て行ってしまった。半透明な袋から見えるその中身はグリーンフシードでほむらから貰ったもの以上の数が入っている。

「杏子…まさか…」

「シヨッキングな出来事が続いたからかな？彼女はもう絶望して死ぬ気なのかもね。まあいようがいまいが変わらない…そうだろう

？曉美ほむら〃

「黙れ……誰のせいでこんな事になったと思っっているの!？お前が……!!」

〃そうだね……僕にも落ち度はあったのは認めてあげよう。でも、元はと言えば君が無駄に時を巻き戻したりしななければ結果は変わっていた。君の話では一番最初に犠牲になったのは鹿目まどかと巴マミだけだったと言うじゃないか〃

「あ……あぁっ……ち、ちが……そんな！そんな、つもりは……!」

〃違う。君がしているのはただの自己満足だ。第一約束とか言っただけ、この時間軸の鹿目まどかと君の時間軸の鹿目まどかとは別人だろう？何の意味も……〃

「キュウベえ!」

非情な言葉でたたみかけようとするキュウベえと顔を抑えてわなわなと震えるほむらの間に庇うようにまどかが立った。その胸にはむっとした表情でキュウベえを睨むカービーもいる。

「これ以上ほむらちゃんを絶望させるようなら私は絶対に契約しないよ。だからもうやめて!」

ほむらがパツと涙に濡れた顔を上げる。キュウベえのルビー色の瞳も一際大きく輝いたような気がした。やれやれと言わんばかりにキュウベえは首を振ってまどかを見る。

〃待ちわびたよ、まどか……さあ、叶えたい願い事を言っごらん？僕がなんでも叶えてあげるよ〃

「まどか……ダメ……ダメっ!」

まどかの背後からさがるような声が聞こえる。記憶が戻り、クールだった彼女からは想像も出来ない程に動揺していた。

「…その前に少しだけほむらちゃんとカービィとで話させて。最後に伝えたい事があるの」

「それくらい、いくらでも待つてあげるよ。じゃあ宇宙の為に死んでくれる気になったらまた声をかけてね！」

そうしてキュウベえも窓から立ち去っていた。ふう…と一息ついたまどか。

その時、しどろもどろになりながらもほむらが立ち上がったかと思えば…突然変身する。そして、左手の盾に手をかけて時間停止をしようとしていた。

「私は…何度でも…繰り返す！」

「あつ!?ダメっ!!」

( つ > o < c ) ミシミシ

だが、それはするりとまどかの胸をすり抜けたカービィの吸い込みによって阻止され、怯んだその隙にまどかがほむらを押し倒す。

魔法少女の力ならば一般人に過ぎないまどかを振りほどく事などが容易い事だろうが、まどかを傷つける事はしないほむらにはそんな事が出来るはずもなく。力無くもがく事しかしない。

「は、離して…まどか！」

「離さない!!絶対に離さないからっ！」

ほむらは手首も掴まれてまどかに馬乗りになられていた。それでももがき続けるほむらの頭にポンポンと手が置かれた。カービィだ。

( つ???) ( つへだいじょーぶ！

「…?大丈夫なんかじゃ、ないわっ！マミも美樹さやかも死んで杏子もいない…武器もロクにない私一人ではワルプルギスの夜を越えられない…まどかも契約してしまっ…!!もう…これ以上は無理よ!!」

「ほむらちゃん…ありがとう」

「えっ?」

驚いた様子でほむらが顔を上げた。そこにあつたのは自分を犠牲にする事も厭わない優しく強い少女の笑顔。馬乗りをやめたまどかはお尻をはたいて立ち上がると驚愕するほむらの手を握って立ち上がらせる。

「ほむらちゃんが今日まで頑張ってきてくれた事…私は無駄になんてしない。ね、カービー」

( ??? ) へぼよっ!

任せろと言わんばかりに胸を張るカービー。まどかは彼を撫でた後に再びほむらへと向き直る。

「ずっとカービーと一緒に考えてきたの。どうすれば皆を救えるか…ハッピーエンドで終わられるか」

「そんな事…出来ないわ。何を願おうと最強の魔法少女であるあなたが奇跡や魔法で誰かを救う事は同時に世界の崩壊を意味するわ。いつかあなたが魔女となつて世界を滅ぼす事になるのよ?」

「見てきたんだね。私がそうなってしまふ所…」

「ええ…魔法少女に希望も幸せもないわ!だから、まどか…お願いだから考え直し…「ほむらちゃん」」

ギョツとほむらの身体を優しく包み込むまどか。そして、彼女の耳元で自分の願いを告げた。それを聞いたほむらは目が点となり、離れたまどかと足元にいるカービーを交互に見ていた。

「……………えっ?ほ、本当にそんな事が出来るの?」

「えへへ、本当の事言うとうわかんない。でも!」

( つ ??? ) つへみんすくう!!

「うん、だからほむらちゃん！力を貸して!!」  
「希望を掴む為に！このまま絶望で終わらせない為に！」

……  
……  
……

台風などとは言えない程の強い風に轟々と建物が軋むような音を立てていた。やがて、地響きがしたかと思えば外から何か崩れるような大きな音が響いてくる。

少女、鹿目まどかの隣には彼女の両親と弟、だけではなく気まずそうに座る暁美ほむらの姿もあった。さらに周囲には不安に揺れる百人余りの人々がここ見滝原中学校の体育館に避難していた。

「確かにいくらでも待つとは言ったさ……でも」

どこからともなくキュウベエの声がまどかとほむら、盾の中で気合十分といった様子のカービーへ届く。

午前7時を過ぎた所で突発的異常気象に伴う緊急避難指示が見滝原全土に発令されていた。そう今日は……

「ワルプルギスの夜がもう来てしまったよ。君は一体どうする気なんだい？まあ……気が向いたら外に来るといい」

「……ママ、ちよつとトイレ行ってくるね」

「あ、まどか……私もいくわ」

パツと停電が起きてどよめく人々。チラリと時計を見たほむらがまどかに対して頷いたかと思えば、二人はあらかじめ示しておいたトイレ作戦でこの体育館から出る。そして、雷鳴の灯りを頼りに渡り廊下を駆け出していく。人もいない為、カービィも飛び出して併走していた。

「……カービィ……まどか……」

「……カービィ……まどか……」

窓からはまだ朝だと言うのに空に立ちこめる暗雲と町中に起こっている停電のせいで真つ暗だ。そんな中、不意に立ち止まったほむらが口を開く。うん？とまどかとカービィが揃って振り返った。その顔はとても穏やかで迷いなどもはや存在しないだろう。

「ふっ……やっぱりあなた達は似てるわね……」

「えっ？そ、そうかなあ……えへへ」

「っ？っ？っ？」

「まどかとカービィの言う通りになってもならなくても、多分これが私達の最後になるわ。だから、今のうちに全部伝えておきたくて……」

### 33. なんて事ない日常

渡り廊下の外は雷鳴が轟き、突風で打ち上げられた瓦礫や人工物の残骸の嵐となっていた。空には暗雲に包まれた巨大な何かの街に向かってゆっくりと進行している。

歩を止めた鹿目まどかと星のカービィは現在、彼女：曉美ほむらの言葉を待っていた。

目を閉じているほむらは微かに微笑んでいるようである。しかし、笑っているはずなのに楽しいとか嬉しいとかの感情は感じられず、むしろ逆のものを一人と一匹は感じていた。やがて、ほむらがゆっくりと目を開け…

「今までの私ならこの絶望的とも言える状態…こんな壊れた世界なんて捨てていたでしょうね。そう、そこに住む人達を見捨てて、切り捨てて…全てはまどかを救う為だけに」

「ふっ…つまるどころインキュベーターの言う通りだったのかもしれない。私のやってきた事は全て無駄…いや、それどころか繰り返せば繰り返す度にどんどん悪化していった気さえする」

「ほむらちゃん…それは…!」

C (?~?) つへまって!

自嘲気味に語るほむらの言葉を遮ろうとするまどか。しかし、カービィがそれを止めた。ある意味まどかよりも付き合いの長いと言える彼はなんとなくほむらの言いたい事が伝わっていた。それは彼の思っていた通りだ。

「でも、今回は違う…カービィ、貴方がいてくれる。こうやって振り返ってみれば出会ってからまだ一ヶ月も経ってないけど、貴方に巻き込まれて馬鹿やっていたこの時間はかけがえのないものだった…本



当に楽しかった」

「知らず知らずのうちに擦れていった心が少しずつ癒されて…切り捨てる事を躊躇わなくなっていた美樹さやかや巴马ミだって守りたいと願うようになっていたわ。全ては貴方のおかげよ、カービー」

c (??) つへぼよ！

優しい微笑みがカービーに向けられていた。それは久しく見ていなかった心からの笑顔だ。

その笑顔は記憶をなくし、眼鏡をかけていた時のあどけない笑顔に良く似ている。ありがとう、そう感謝の言葉を述べた後にまどかへ向き直った。

「そして、まどか…貴方が願おうとしているその願い…それが叶えられたとして、どうなるのかは全く見当もつかないわ。だけど、貴方も彼に賭けてみたくなったのよね？」

(っく?) へぼよ?

僕?と言わんばかりに首を可愛らしく傾げて見せるカービー。まどかはコクリと頷く。

「彼に全てを賭けたくなる気持ちはわかるわ。とっても食いしん坊で子供みたいなこの子だけど…まどかと同じで優しく強い彼なら本当になんでも出来そうな気がするもの」

「うん!だから、私もカービーに頼んだの。もう一度さやかちゃんと遊べるように、ママさんの美味しいケーキが食べられるように、杏子ちゃんとも改めて友達になれるように…ほむらちゃんが幸せになれるように!だから、一緒に奇跡を起こそうよ!」

「ふふ、そうね…私もまた皆と一緒にいたい。今度はこんな無理して作った私なんかじゃなくて…本当の意味で一緒に」

「ほむらちゃん…うん!」

c (???) つ

「本当にこれが正解なのかは私にはわからない。もしかしたら、他にもっと良い方法があるのかもしれないわ。でも！」

「カービイとまどかを信じて…私は全てを貴方たちに託すわ。皆を救って、お願い…！まどか！」

「お願い…！カービイ！」

……

……

…

ほむらより意思を託されたまどかとカービイ。二人は降りしきる雨と吹き荒れる突風の中、積み重なった残骸の上で静かに佇んでいた真つ白な小動物の元へ歩く。彼はまどかとカービイに気づくとぴよんぴよんと器用に跳ねながら下へ降りてくる。

“やあ、随分と遅かったじゃないか…鹿目まどか、それと星のカービイ”

(?..?)へキユウベえ！

“暁美ほむらの姿が見えないようだけど…うん？あれは…”

暗雲に覆われていたワルプルギスの夜の高層ビルと同等かそれ以上かの巨体がいきなり大爆発を起こした。それは花火のように連続で打ち上がっていく何かがそうさせているようだった。

あれはロケットランチャーだ。それが確認出来ると同時に戦っている者の正体に気がつくキュウベえ。彼はやれやれと首を横に振った。

“無駄な事だね…早く君たちが行つてあげないと暁美ほむらは死ぬよ？まあ僕の知った事ではないけれど…”

その言葉の通り、ワルプルギスの夜はそんな暁美ほむらの攻撃にビクともせずに嘲笑ったかと思うと手から黒い衝撃波を放つ。それは真つ直ぐに暁美ほむらの場所まで伸び、爆発を起こす。

あれは当たれば間違いなく致命傷だ。だが、カービイには見えていた。爆発する直前に見慣れた赤い光が飛び込んでいくのが。おそらく彼女が来てくれた。ならばしばらくは問題ない。そう判断し、性悪な白い生物へと向き直る。

“暁美ほむらも知る由もないけど、幾多の世界の因果を束ね、因果の特異点となった君ならどんな途方もない望みであつても叶えられるだろう”

「…本当、だね？」

まどかが聞き返すとコクリと彼の頭が揺れる。さあ、ここまでくれば後は流れに身を任せるのみ。まどかはカービイを見る。彼もまどかを見ていた。その表情はいつもと変わりない笑顔でそれは全て任せろと言っているようにも見えた。そんな彼に勇気をもらおう。

“さあ、鹿目まどか！その魂を対価にして、君は何を希う？”

「私…」

一度、深呼吸をして…彼女は願いを口にする。

「私の力を、目に見えるように…カービイがコピー出来るようにしてほしい。最高の魔法少女としての力を…世界だって変えられる程の力を、全部っ！」

その瞬間、まどかの胸に光が宿る。それは小さく頼りない光であったが、次第に大きく強く輝き始めていく。

“……………えっ!?ま、待ってくれ!”

しばらくの沈黙の後に今まで聞いた事のないインキュベーターの狼狽える声がまどかを制止していた。

“君は自分が何をしようとしてるのかわかっているのかい!?カービイに力を与えようとしているんだよ!?彼が神の如き力を持ったらこの宇宙のバランスが…均衡が崩れてしまう!!”

Σ(?!?c)へぼよ!?”

彼にそこまで言われ、自分はそう思われていたのかとほんの少しショックを受けるカービイ。だが、そんな事はすぐに気にならなくなった。なぜなら…

「これは…トマトっ?」

まどかの手には一つのトマトが現れた。まるまるとポリウム満点なそのトマトの中心にはMと一文字書かれている。まどかには見覚えのない不思議なトマトでしかなかったが、カービィにとっては違う。

それは彼がもつとも好物にしているマキシムトマトそのものであった。だが、それはただのマキシムトマトではない。鹿目まどかの魔法少女としての全ての力と祈りが込められた特別なものだ。

C (? v?) つへぽよ!ぽよ!

「まどかの力を得て何をするつもりだ。カービィ!これはもはや地球という小さな星の問題ではなくなった!星を書き換える事すら出来るようになるその力を君が持つのは危険すぎる!この宇宙の全てを巻き込み、破壊しかねない!」

「ううん、そんな事ない。カービィの願い!それは多分私たちと同じで彼らしいただ一つの願いだよ」

「やめるんだ!まどか!やめつ」

まどかはヨダレをダラダラと流すカービィに合わせてしゃがみ、彼にそのトマトを差し出す。カービィは手でそれを掴むと大きく口を開いて!食べた!

(っ?o?c)へんあつ…

その瞬間、カービィから溢れんばかりの光がそのピンクの身体に宿る。それはまどかの持っていた力とカービィの持つ無限の可能性が結びつくものであった。まどかもキュウベえもあまりの輝きに目を開けていられない。

(っ?c)へう…

C (? ? ?) つへうまああああい!!!!

カービイのそんな無邪気な声が響く。それはワルプルギスの夜と戦っていた魔法少女達の耳にまで届く程大きいものだっただろう。

光も収まり、まどかが目を開ける。そこには…

?? c  
??(???)  
?? ♪ へはあい!

頭の白いリボンを揺らして反対を向いていたカービイが驚くまどかとキュウベえに振り返る。

この星のものではない宇宙を彷彿とさせるような金色の瞳と花の蕾をイメージさせる弓。その背には美しく透き通る羽根という風にカービイの姿が変化していた。

### 34. 見滝原の魔法少女

「カービィ……すごい……なんだか神様みたい……」

「君が本来持つべきだった力だ。それがカービィの無限の力と合わさって……僕達の想像を遥かに越える力を生み出した……!」

?? c (???)  
?? ♪へはあい!

すつとぼけた顔でただそこに立っているだけだと言うのにはとばしる圧倒的な威圧感と神々しいオーラが周囲を覆っていた。

それと同時に空がパツと明るくなる。澄み切った空はどこまでも青が広がっていて、吹き荒れていた暴風も気持ちのいいそよ風へと変わる。

「これって……カービィの力?」

「いや……違う……まだ彼は何もしていない。なのに、何故……ワルプルギスの夜が消えた……? いや、消えたんじゃない……まさか、暁美ほむら!」

?? c (???)  
?? ♪へほむら?

「……まさかここまでやるなんて思わなかった……彼女は、暁美ほむらは……見滝原を守りきってみせたよ。ワルプルギスの夜を越えたんだ」

「いったいどうやって!? 杏子ちゃんと一緒に倒したの!」

「……違うよ。彼女は倒したんじゃない。彼女は自らを犠牲にしてワルプルギスの夜を移動させた。そう……」

……  
……

……時が遡る事、数分前。

「はあ…はあ…くっっ！」

瓦礫を押しつけて出てきたのは黒髪の少女、暁美ほむら。頭からとめどなく流れる血を拭い、彼女は暗雲立ち込める空を見上げる。その視線の先には最悪の魔女「ワルプルギスの夜」が顕現していた。何もかもが規格外なワルプルギスの夜は結界を持たず、姿を現せば最後までここにいる人も文明も…何もかもが破壊される。

古来より伝えられてきた伝説の魔女を相手にこれまでに幾多の魔法少女が戦いを挑んできたが、そのいずれも討伐はおろか進行を防ぐ事すら出来ていない。そんな魔女に対して暁美ほむらは絶望的にも思える戦いを挑んでいた。

「まだ、私は生きているわ…ワルプルギスの夜！」

天より響く愉快げな笑い声は何をしても無駄だと言っているように聞こえていた。そんなワルプルギスの夜に対し、ほむらはそう啖呵をきつて銃口を空へと向ける。伝説を相手にするには頼りない武器だが、ほむらにはもうこれしか残されていなかった。だが、その攻撃でさえも放つ事がままならない。なぜなら…

アハハハハッ!!

「…っ…しまっ…」

地上で叫ぶ少女を意に介する事なく進行を続けるワルプルギスの夜。そんな超特大の魔女に注意が向いていた為、ほむらは左右から音もなく迫り来る影に気がつかなかった。鋭利な槍と剣を持つ影はそれらを突き出して彼女を貫かんとする。

まずいと思い、咄嗟に左腕に手をかけるほむらだが、そこに本来あ



るべきものではなく、ただ空を切ってしまう。

「ちっ…バカヤロー！」

目と鼻の先までできていた影がそのまま武器を振り上げたその時、突然影の足元より赤い槍が伸びた。それは武器を振り上げていた影を正確に貫き、ほむらは事なきを得る。

「助かったわ…杏子…！うっ…」

「おい、テメエ…ふざけんじゃねーぞ！」

立っているのもやつとな状態のほむらの隣に佐倉杏子が降り立つ。杏子の顔は誰が見ても不機嫌である事がわかる程に怒りを滲ませていた。

「戦えないならもう下がれ！時間停止も出来ない！武器もないテメエなんざもう足手まといでしかねーんだよ！バカ！」

杏子の怒りの理由はただ一つ。言い方こそきついもののほむらの身を案じての事であった。残された武器もワルプルギスの夜を相手にするには頼りないマシンガンのみ。攻撃を防ぐ為の魔力も尽きた。そして、時を止める為に必要な小盾は希望に託してその手にはなかった。

そんな状態でありながらもなおワルプルギスの夜を睨み、闘志をみなぎらせるほむらは杏子にとってはただの死にたがりにしか見えず、ヤケになっているようにしか見えない。だから、杏子は半ば強引にも彼女を下がらせようとしていたのだが…

「そうかもしれないわね…だけど、このままじゃ見滝原の町も人も…全てが滅んでしまう！そんな事は絶対にさせないわ」

「…!?何がアンタをそうさせる？そういうタマじゃなかったはずだ、

アンタは…」

「それが今私の出来る唯一の贖罪になるからよ。もっともこれもただの自己満足でしかないけど…」

「あん？贖罪だあ…？」

そこまで言った所でワルプルギスの夜が動きを見せた。口元にメラメラと燃えたぎる炎。攻撃を仕掛けてくる…瞬時にそう判断した二人はその場を離れ、周囲の瓦礫の影へ隠れる。読み通り炎が口から吐き出された。それは姿を隠したほむらと杏子をあぶりだす為に周辺を念入りに焼き焦がしていく。

『きつとこの時間軸で全ての片がつくわ。その結果、どうなるかは私にも全く想像がつかない』

『カービーがまどかの力を手に入れるとか言ってたな…はっ、確かにどうなるのやらだ。でもそれじゃあアンタがこうまでして戦う理由にはならねえだろ？』

凄まじい熱気と溢れる煙にたまらず姿を現してその場から離れる二人はテレパシーで会話を続ける。出てきた二人にワルプルギスの夜が生み出した影が襲いかかる。

『…ワルプルギスの夜が進行するあの方向。あの先に何かがあるかわかる？』

回り込んできた影に応戦するほむら。だが、持っていたマシンガンの弾薬が切れた為か引き金を引いてもカチカチという音しかならなくなってしまう。それを見逃す影ではなく、丸腰の彼女に対して剣と槍が突き立てられた。ほむらの鮮血が影を赤く染める。

「っ!!ほむらっ!!」

貫かれた腹部や腕から血を吹き出す。同様に襲われていた杏子は魔力を最大まで高めて周囲の影を薙ぎ払うと慌てて彼女の元に駆け出し、得物を突き立てる影を貫く。

霧散した闇は穢れとなつて消えたが、ほむらは血を吐いて片膝をついた。ソウルジェムへの致命傷こそ避けているものもはや限界だ。ワルプルギスの夜が再び口元に炎を溜めているのを確認しつつ、舌打ちした杏子は彼女を背負つてこの場から撤退する。

「…げほつ…あつちにはママの家もあるし、美樹さやかの家だつてある。風見野も…奴の通り道に近いでしょう?」

「っ…ホントどういう風の吹き回しだよ。まるで…アイツらみてえじゃねえか…」

「この町を守っていた魔法少女はもういない。でも、思い返してみれば…私もこの見滝原で生まれた魔法少女の一人で…かつこいい…あの人達に…憧れてた…」

火を吹くワルプルギスの夜と襲い来る影の猛攻をほむらを背負いながらも懸命に耐える杏子。手を組んで鎖の結界を生み出した彼女だったが、ワルプルギスの夜の攻撃を前にその鎖も徐々にヒビ割れていく。

「…貴方もそうなんでしょう?杏子…だから、来てくれた…」

「…気まぐれだよ。何一つ守れない…何も出来なかったクソみたいな人生だったんだ。最後に華々しく散つてやろうと考えただけさ!」

燃えたぎる炎は幾多にも重なる鎖を焼き焦がし、杏子とほむらに向かつて伸びる。鎖の数を増やして二重、三重、重ねていくがそれでも炎の勢いは止まらない。

なんとか押しとどめる杏子の手にかが重なる。それは彼女に背負われていたほむらの手だ。

「ふっ、私も最後に皆が守りたかったものを……これまでまどかの為に、自分の為に見捨ててきたものを守りたい……そう思ったのよ!」

その言葉と同時にほむらの残った魔力が杏子へと送られる。重ねられたその手に光るソウルジェムは黒く変色し、今にも溢れ出しそうな程に穢れを放っていた。

「まさか……お前!!」

パキ、パキ。パキツ……ほむらのソウルジェムは音を立ててヒビ割れていく。それと同時に莫大な魔力が杏子へと流れ込む。強まった魔力は暴走し、ワルプルギスの夜の放った炎を防ぐどころかかき消す事に成功した。だが、その代償は大きい。

「くっ……ほ、ほむら!?!」

爆風で後方へと吹き飛ばされた杏子は瓦礫に叩きつけられながらもダメージはない。だが、背負っていたはずのほむらはいない。彼女は……いや、彼女だったものはワルプルギスの夜と共にこの見滝原から完全に消えていた。あるのは砂時計、それと彼岸花を組み合わせたような魔女の結界のみ。

「あのバカ……! 魔女に……魔女になったってのかよ」

策も武器もない。保有していた魔力も全て使い切った。そんな暁美ほむらの最後のとっておき。それが魔女化。彼女はわざと魔女になる事でワルプルギスの夜を自らの魔女結界へと引き込んだのだ。

呆然と立ち尽くす杏子の前にはほむらの魔女結界がある。そして、その反応もすぐに消えた。そう、いくら魔女になったとはいえ相手は伝説の魔女で到底勝ち目がない。結果は見えていた事だった。杏子は槍を構え、いつでも動けるように警戒する。しかし……

「出てこねえ…？まさか…アイツ…やりやがったのか!？」

魔女結界は完全に霧散し、魔女となった曉美ほむらの気配も消えていた。しかし、一向にワルプルギスの夜は顕現しない。魔女には性質がある。魔女結界も同様だ。

巴マミが魔女化した際の事を思い出した杏子は悟った。魔女の性質なり、敗れた時には魔女結界を別の場所に開くなりでワルプルギスの夜を退けて見せたのだと。そう、彼女は本当に見滝原を守りきって見せたのだ。

「…あのバカ…カツコつけやがって…カービィに、まどかにどう言え  
ばいいんだよ！クソツ!!」

残った杏子のやり場のない怒りが空に響く。その空は綺麗な青さで晴れ渡り、彼女の怒りを受け止めていた。だが、それと同時に避難所の近くから天に昇る凄まじい光の柱と遅れて飛び立つピンクの影が見えた。

それがなんなのか。直感で理解した杏子は流星の如く空を駆ける星に願う。絶望はもう終わった。なら、次に起こるのは希望のはずなのだ。たった一度でいいから本当の奇跡を見せてくれと…

?? c (???)  
?? ♪ へはあい!

カービィの声が聞こえた気がした。間の抜けた声ではあったが、何故かとっても頼もしい…そんな声であった。

### 35. この宇宙を守る者との戦い

「そんな…ほむらちゃんは魔女になったって言うの!？」

「間違いないよ。暁美ほむらは…いや、此岸の魔女Homulilyと名付けておこうか。彼女はワルプルギスの夜を自身の結界に引きずり落とした。そして、敗北した」

「だけど凄まじい執念だ。再び顕現しようとしたワルプルギスの夜を強制的に太平洋のど真ん中に移動させたのだから…これじゃあさすがのワルプルギスの夜も海上を進行するだけで消えてしまう。見事と言わざるを得ないよ」

「それじゃあほむらちゃんは死んで…」

「??c (つゝ C??) ??\$ へほむら…!」

「これで君の願いも無駄になったという事かな? 残念だったね。暁美ほむらを救う事が出来なくて…」

「??c (?o??) ??\$ へムダじゃない!!」

「…うん、これから救うんだよ! カービィ!」

涙を拭ったまどかがある物を取り出した。それはほむらから受け取っていた小盾。時を止め、巻き戻す事が出来る時間操作の道具だ。それをカービィに渡す。

「…それは…暁美ほむらの盾かい? 何故それがここに…君は! 君達はまさか…」

「これで過去にだって戻れるはず…こんな結末にならないように歴史だつて変えられる。ううん、カービィの力なら世界を書き換える事だつて出来る!」

「馬鹿な!? そんな事したらカービィが望む世界が出来てしまう!! それがどんな結果を生むのか…世界は…この宇宙は破滅するかもしれないんだよ! どうしてそこまで彼を信じられるんだ…わけがわ

からないよ”

「人の感情をなんとも思っていないあなたにはわからないかもしれないね。カービィは誰よりも優しく誰よりも強いのに！そんなカービィならきつと皆が幸せな世界を作ってくれる…そう信じてるの」

?? c (???) ?? ♪ へまろか…ありがとう！

空を見上げたカービィ。どこまでも青く澄み切ったこの空はほむらが守ったものだ。今度はこの空をさやかとマミと杏子とまどかとほむら。全員に見せる事を彼は誓う。

そして、まどかとほむらより託された希望を吸い込んで自分の力とする。彼の左腕が輝いたかと思えば時を操る小盾が装着された。カービィは振り返る。まどかとキュウベえが彼を見つめていた。

”…止めても無駄なようだね。この時ほど自分の行いを悔いた事はない…まさか、自分の力で自分の首を絞める事になるなんてね。でもこのまま君の思いどおりにはさせないよ？絶対だね”

?? c (???) ?? ♪ へだいじょーぶ！

「カービィ！皆を助ける前にお願いがあ…」

まどかの願いを聞いたカービィはそれを二つ返事で頷き返す。そして…

「お願い…カービィ！」

?? c (???) ?? ♪ へぼよ！

まどかのエールを受け取り、彼は空へと飛び立つ。まどかの願いを果たす為にある場所へ目指していた。その途中で片膝をついて祈りを捧げる杏子の姿が見えたので彼は手を振っていた。彼女は気づいたのか、気づいていないのか…絶えず祈りを捧げ続けた。

— || ≡ Σ ?? (???) ♪ ?) つへみえた！

瞬く間に見滝原を抜けて海上までやって来たカービィ。彼の視線の先にいるのは激しい暴風を伴いながら進行を続けるワルプルギスの夜だ。逆位置だったその体軀は魔女となったほむらとの戦い影響か、正位置となり本来の力をフルで発揮出来る状態となっていた。本能のままに笑い続けるその声は愉しげではあったが、どこか悲しげで…彼女もまた被害者の一人である事を理解する。

まどかの願い。それは伝説となつて何百年も魔女として生き続けているワルプルギスの夜を楽にしてほしいというもの。そうでなくとも彼はさやかやマミ、杏子とほむらの為にワルプルギスの夜を倒してから歴史を変えるつもりだった。ワルプルギスの夜の悲痛な笑い声を聞いてますますその意志を固める。そして…

?? c (???)  
????? ♪へしよーぶ!

そう高らかに宣言した彼はワルプルギスの夜がこちらを見て魔力を高めるのと同時に弓を握り締めてピンクの矢をめいっぱい引き絞る。すると彼の周りにピンクの魔法陣が何重にも展開されていく。

莫大な魔力を放つカービィを前にワルプルギスの夜も本能で危険を感じ取ったのか、己の持つ全力の力でカービィに攻撃を加えようとしていた。

それは全体重をかけた暴風の如き超スピードの体当たり。しかし、ただの体当たりではない。これこそが地表すらひっくり返し、全てを無に帰してきたワルプルギスの夜最大の技であった。

だが、ワルプルギスの夜の攻撃が彼に当たる事はなかった。なぜなら…





だが、全てを書き換えようとしたその時。不意にカービイの身体が空へと引きずり込まれた。いや、遙か空を突き破って引つ張りこまれたその場所は月。そして、そこにいたのは…

“きたね、待っていたよカービイ…”

?? c (? o ???) ?? ♪へキュウベえ!?

カービイに背を向けて地球を眺める可愛らしい真っ白な小動物がそこにいた。その姿は紛れもなく散々少女たちを食い物にしてきたインキュベーターではあったのだが、何やら様子がおかしかった。

“ふふふ…時を越えて歴史を変えようとする、か。あと少しだったね。でも、もうそれは不可能だよ”

振り返ったキュウベえ。それはいつもの彼そのものだ。だが、身に纏う雰囲気と放つ威圧感、歴戦の勇士であるカービイですら警戒する程。感情がなく何を考えているのか理解出来ない彼をこの時ばかりは読み取る事が出来る。

“普段はこんな事はないんだけどね。未来から君の情報が送られてきたよ。そして、今相対してわかるその力…僕らとしても個人が持つ力としては危険すぎると判断した”

ビリビリと凄まじいプレッシャーと緊張感が高まっていく。もはやカービイも話し合いでなんとかしようなどとは思わない。いや、思えない。

何がなんでもここでカービイを始末するという絶対の意思。それが彼から感じられるただ一つの目的なのだから。

“宇宙の均衡を保ち、あらゆる犠牲を尽くしてこの宇宙を存続させ続けてきた。僕らインキュベーターの総力をもってここで君を抹殺する！”

?? c (???) ?? ♪へキュウベえ!!

“これは宇宙を守る為の戦いだ…！さあ、いくぞ！星のカービィ!!

”

その瞬間、音もなく驚く間もなく、視界を埋め尽くす程大量のキュウベえが四方八方に現れた。超スピードなどではなく、一瞬で。それは見慣れたほむらの時間停止と同じもの。

そして、それら全てが器用に耳から生えた手のようなものでマミのマスクット銃を持っており、その銃口を驚愕するカービィへと向けていた。

“まずは小手調べといこうか”

号令と共に一斉に砲撃が放たれた。これらを完全に避ける事、防ぐ事は不可能。迫り来る弾丸がヒットする一瞬の内にそう考えたカービィは羽根をはためかせて宙へ飛ぶ。

超スピードで動く事で斜線に入った弾丸こそ何発か被弾したものの大したダメージは受けていない。

“逃がさないよ？次はこれだ”

超スピードで宇宙空間を駆けるカービィの前に青い光と赤い光が立ち塞がる。それは杏子の槍とさやかかの剣を手にしたキュウベえで彼女らとも勝るに劣らない速さで突撃してきていた。

??

?? ———— 《 (??) (???) ♪へほよー！

?? ———— 《

最初の攻撃をひらりと身を躲し、その後次々と降ってくるキュウベえに對し、花の弓魔法陣を展開させて正確無比に矢をお見舞いする。幾千、幾万の矢がキュウベえを襲うが彼もまた無尽蔵にも思える程に数で攻めてきていた。

“星のカービィ。こんな事がなければ宇宙の救世主として君は生かしておくはずだった。問題児ではあるけれど君は数々の邪悪と戦い、そして打ち勝ってきたからね。これからも宇宙存続の為に働いてもらおうつもりだった”

次々とヘッドショットを決められて撃ち落とされていくキュウベえ。しかし、横目で月の表面を見たカービィはとんでもないものを目にする。それは撃ち落とされた死体の肉片を食べて山のように大きくなってムキムキになったキュウベえが何匹も誕生していたからだ。そして、そのうちの一体が宙で矢を射続けるカービィに向かって体当たりを仕掛けてくる。その速さは尋常ではなく、ワルプルギスの夜に匹敵する。

?? c (? o ???) ?? ♪ へほ、ぽよっ!?

それを慌てて飛び退いて躲すカービィだが、射続けていた矢が止まった事により頭上から青と赤の猛襲が再開する。それだけではなく、完成したムキムキなキュウベえが群れを成して襲いかかってきた。

“だけど、君が得てしまったその力。それはたとえ君に侵略の意思がなくともその力は利用され、宇宙に害を成す存在となる…過ぎた力はその身を滅ぼす事になるという事さ”

?? (っく???) っ??

一度止めてしまった弓矢を構える時間はもらえず、四方八方から拳

と剣と槍の応酬がカービィを襲う。飛んだり、躲したり、弾いたり、必要最低限な動きでそれを防ぐ彼のその身体は次第に小さくも確実なダメージが刻まれていた。

“理不尽だと思うかい？でも、それが君のした愚かな選択の結果だよ。人間なんていう下等生物の為に戦う事を選んだ君のね！”

言葉を発していた個体。彼の前にはマミの十八番、ティロ・フィナーレの砲台があつた。銃口から光が収束していき、重厚な魔力が溢れだす。もみくちやにされているカービィはその場から動けない！そして…

“さあ、これが奇跡と魔法の力だ！耐えられるかな？カービィ!!”

立ち塞がる敵を滅ぼす為に研ぎ澄まされた必殺の一撃が放たれた。その威力はマミのものと同等。即ち当たればただではすまないという事だ。だが、カービィの周りにいるキュウベえは避けようともせず、にたただただカービィをその場に抑え続ける。

?? (っく C??) ?? へくう!!

閃光がこの宇宙を走った。キュウベえの放ったティロ・フィナーレは直撃だった。

インキュベーターはさらにカービィが使う本来の持ち主であるまどかの弓を模倣し、念入りにピンクの矢を放ち続ける。

“さて、生きているかな？それとも宇宙の塵となつてしまったかい？カー…”

そこまで言った所でヒュンと風を切る音と共に話していた個体が爆散する。放たれたのはピンクの矢でそれは彼の背後から放たれて

いた。

“…なるほど、時間停止か…”

近くにいた別のキュウベえが声を上げた。ふう…と息を吐いたカービィは小盾を構えている。

時間停止をする際にほむらがやっていた事を思い出した彼はすんでのところで小盾のギミックを発動させて時を止めたのであった。

一緒にくつついてきたキュウベえは停止した世界でも動いていたのだが、たかが数匹のキュウベえでは彼を止められない。

そうしてティロ・フィナーレとピンクの矢を躲したカービィはキュウベえの背後に立ち、矢を放ったという事だ。

“さすがは宇宙の救世主と言っておこう。だけでもうそれは通用しないよ？元は僕から生まれた能力なのだから！”

?? c (???)  
?? ♪ へぼよっ!!

再び向かい合うカービィとインキュベーターの群れ。永遠に続くかと思われる宇宙を守る為の戦い。しかし、この戦いの決着は近い…

### 36. 銀河にねがいを

太陽が照らす月の裏側。青々と輝く地球の背にそこで星の救世主と宇宙の守護者との死闘が繰り広げられていた。

お互いに時間停止をし、止まった時の世界で矢を撃ち合うカービィとインキュベーターの群れ。宇宙を縦横無尽に駆けながらカービィが放つ幾千、幾万の矢は数の暴力と言うべきか、月面とカービィを包囲する数万のキュウベえが同様に模倣した矢を放っている。時が動き出すと凄まじい音を立てながら矢の打ち消し合いが始まる。

数の上では1しかないカービィは勝ち目がない無謀な戦いに挑んでいると言えるだろう。実際キュウベえもつい先程まではそう睨んでいた。しかし、それは間違いであつた事を彼は今悟つた。

“なぜだ：？先程に比べて動きに無駄がない：僕の攻撃を見切つているというのか？”

キュウベえの放つた矢は全て弾かれたり、超スピードで躲される一方でカービィの正確無比に放たれた矢は一匹、また一匹と白い死骸が増やしていた。

彼が放つ矢の数や威力に一切変わりはない。キュウベえの言う通り、ただ動きに無駄がなくなっただけ。だが、それはカービィを翻弄していたキュウベえの攻撃を見切られたという事を意味していた。

“なら…これでどうだ!?”

そう言ったキュウベえは弓矢を消し、奇跡と魔法の力で新たな武器を具現化させる。それはこれまで一度としてカービィの見た事のない、どこかの魔法少女の力。

巻き戻しを利用したクロスボウでの一撃。光を纏う救世の剣。最悪の魔女の攻撃をコピーしたかのような炎や影の攻撃。などなど、い

ずれも必殺の一撃に相応しい攻撃がカービィを襲う。

もちろん初見の技にはカービィは対応出来ておらず、ダメージを受ける事も何度もあった。しかし：

?? (っく? \*??) っ?? ♪ へふんすつ！

その度に次は当たるものかと言う気迫を持って立ち上がる。そして、それは気迫だけに終わらず動きにも現れていた。襲いかかる数万の群れの攻撃をまたもや無駄のない動きで避け始めたのだ。

“馬鹿な…これが宇宙を何度も救ってきた救世主の力だと言うのか…！”

やがて、巻き戻しの一撃は時を止めて数瞬出来た隙に回避。光を纏う剣は頼りなくとも決して折れない小盾で防いで反撃。最悪の魔女の攻撃は近くにいたキュウベエの死体を盾にする。そして、怯んだキュウベエをチャンスと言わんばかりにピンクの矢で殲滅していく。一対多の完成系の動きがそこにあった。

“なぜだ…君にとつてはたかが数週間共にした人間の為になぜそこまで戦おうとする？それは命を賭ける程のものなのかい？”

自然と戦いの中でそうキュウベエは言葉を漏らしていた。純粹な疑問だった。それは大立ち回りを続けるカービィにもテレパシーとなつて届いていた。彼はその答えを自分の言葉で伝える。

『前に言わなかったっけ？地球の食べ物美味いって！』

“…？確かにそんな事を言ってたね。確かに地球の食べ物は数ある惑星の中でもそれなりに美味であると言ってもいい。けど、他にもそんな星はあるじゃないか？地球にこだわる事も…『でも!!』”

『他の星にはマミが作ったあの美味しいケーキはないでしょ？あれは



今まで食べたケーキの中で一番美味しかったんだ!』

宙を駆けながら矢を放つ。そんな彼が矢を具現化する僅かな隙を見計らって山のように大きなムキムキキュウベえがタツクルを仕掛けてくる。だが、それは先程みた攻撃だ。読んでいたカービィは矢の具現化をやめて時間停止をし、その場から飛び退く事でそれを完全に回避する。

“…自分の弱さを強がって無理をして、挙句の果てには君達を道連れにしようとした。そんな愚かな人間だったけど…そういえばお菓子作りの腕に関してはピカイチだったね”

そんなカービィに対してなおも攻撃を続けるキュウベえ。それは次第に苛烈さを増していき、躲す事も防ぐ事も困難になっていく。耐える事で精一杯だが、それでも倒れないカービィにキュウベえは一つの提案をする。

“なら、こうしよう。僕が君の望むケーキを用意してあげよう。いや、ケーキだけじゃない。これまで食べた事のないとびつきりに美味しい、最高の食べ物を君にあげるよ!それで…きゅっぷい!?”

声をかけていたと思われる個体が爆散する。言わずもがなカービィの放ったピンクの矢だ。反撃も無理だと思うほどに爆発と閃光が飛び交うこの戦場の中で時間停止を駆使して彼は静かに矢を放っていた。

『どんな美味しいものを用意してくれたって、代わりに何でもあげると言われたってダメ〜!だってもうあの綺麗な星の事が好きになっちゃったんだもん!』

“っ!?”

『食べ物も美味しく暖かくてお昼寝にちょうどいい!あんなにいい

星ってなかなかないよ？まーでも、何を言っても…』

そして、一度出来ればそれは何度でも出来る。ただ耐えるだけであった彼は攻撃の糸口を見つけ、確実に数を減らしていく。いったいどれだけのキュウベえが死骸と化しただろうか。どことなく感情のないインキュベーターの瞳にも焦りの色が見える気がする。

『あそこにはボクの友達がいる！まどかにほむら、キョーコにマミにさやか！それだけじゃ理由にならない？』

“友達か：実にくだらねえね。そんなくだらねえものの為に命を賭ける価値があるとは思えないよ”

『キュウベえには友達はいないの？』

激しい攻防の中でカービィも疑問に思っていた事を聞く。返事は四方八方からのティロ・ファイナーレと共に返ってきた。

“そんなものは僕達には必要ない”

『そうかな？？友達がいたら楽しいのに！』

くるくると踊るように優雅に躲していくカービィの動きは相手を挑発するように見える。というより挑発していた。だが、キュウベえはそれには乗らない。なぜなら…

“あいにく感情なんて無駄なものを持ち合わせていないからね。楽しさも怒りも必要がないんだ”

『えーつまらないよ。そんなの…じゃあさ、キュウベえは何を持っているの？』

“…何を持っている、か：強いて言うならば使命かな？僕も、他の生命も…全てはこの壮大な宇宙を存続させる為の駒にすぎない”

『もうー！本当にそればかり！宇宙が滅びるとか、守るとか…よくわかんないけどさ、意外となんとかなると思うよ？』

“知らないからそう言えるのさ。僕たちがどれだけ宇宙崩壊の目を潰してきたと思っているんだい？今もこうして、君という害を排除しているというのにな”

時間停止と共に攻撃のパターンが変わる。今度は赤と青の槍にサーベルなどなど見覚えのある武器からない武器まであらゆるものが天よりカービィへ降り注いでくる。宙へ浮かぶ彼はたまらず地上へと落とされた。

『ううう僕はそんな事しないって！ならキュウベえの方がよっぽど邪悪だよー！さやかとマミは君にやられたようなものじゃないか！』

“僕だつてやりたくてやっているわけじゃない。この宇宙にどれだけの文明がひしめき合い、一瞬ごとどれ程のエネルギーを消費しているのか君にわかるかい？消耗したエネルギーを蓄えるのに彼女達の犠牲も必要だった。そして、莫大なエネルギーを持つまどかの犠牲もね！”

まるで流星のように宇宙空間からカービィを覆うが如く降り注ぐ武器を前に時間停止をしたところで身動きは取れず、全てを防ぎ続ける事も不可能。すなわち逃げ場がない。そんな状態に陥ってしまう。それでも最低限の箇所だけガードしつつ懸命に耐え続けるカービィ。その瞳に諦めの文字は無い。

“鹿目まどかの力があればこの先エネルギーに困る事は無い！まどかの犠牲があればこの宇宙は存続するんだ！僕達のエネルギー回収の使命も終わって残す所、宇宙のゴミ掃除だけ…”

ボロボロに傷ついていく彼を見てそんな事を口にするキュウベえ。慢心はせずにこのまま何もさせずに圧倒的な物量で攻め切ろうとしていた。

『まどかを犠牲になんかさせない！この星も、この宇宙も絶対に守る！あゝこれもなんか言った覚えがあるなあ』

避ける事もなかったただひたすら受け続けながらカービイは話す。その中で彼は思い出した。暁美ほむらが使っていたもう一つの能力を。攻撃を防いでいた小盾を降り注ぐ武器に突き出すように掲げて力を込める。すると…異空間が開き、カービイを貫かんとしていたサーベルや槍はその中へ吸い込まれていく。

自分が繰り出す本気の攻撃にまたも回避法を見つけてみせたカービイ。そんな彼に何を思ったのかキュウベえはしばらくの沈黙の後にカービイへとテレパシーを送った。

“…そうだね。ならば聞かせてもらおうか、カービイ！あの時の答えを！君はどうやってこの星、この宇宙、全てを守る？”

『答え…それを言う前に…いろいろあったし、君を一回ぶっ飛ばしとかなきゃ気がすまないんだから…』

キュウベえの攻撃はやんだ。今のカービイには効果がなく、エネルギーの無駄だと悟ったのだ。カービイはキツと月面からキュウベえを睨む。

“良いだろう。決着をつけようか。無限に近い数の僕たちを相手に君が勝つ事は不可能だろうけどね！”

『無限じゃないんでしょ？なら…』

?? c (???)  
?? ♪ へかつ!!

その時、カービイの金色の瞳が光ったかと思うと彼の周りを眩いオーラが覆う。

それは優しくも強く輝く白い光。それはまどかが持っていた神にもなれる力。それはなんでも叶えられる最高の魔法少女としての可



??  
——  
《《 ??  
?? ——  
《《 ??  
?? ——  
《《 ??  
?? ——  
《《

幾千、幾万を越えて幾億をもピンクの矢を放つてみせたカービィ。それはもはや矢などという次元ではなかった。創生の輝きビッグバンにも匹敵するほどの凄まじい力と閃光がインキュベーター達を襲った。

月に輝いた光の柱はとても綺麗で無慈悲に仇なす者を焼き焦がす。それは万単位いたインキュベーターを一匹を除いて全滅させてしまふほどだ。

“……………君の勝ちだ…”

残った。いや残されたというのが正しいか。彼は戦意をなくしたようだった。項垂れていた彼はごろんと腹を見せるような格好を見せる。

“…煮るなり焼くなり好きにするといいさ。君にはそうするだけの権利がある”

『待つてよくキュウベえから言われた事の答えをまだ言っていないでしょう。』

“…そうだったね。僕とした事が忘れていたよ。でも、君がちゃんと答えを用意していたなんて意外だな”

『む…でも、答えは簡単！それは…』  
“それは?”

カービィは寝転がったキュウベえに手を差し伸べる。そして…

……

……

…

「はい。それじゃあ自己紹介いつてみよー!」

教師に促されて興味津々で注目する生徒達の前に絹のように美しい黒髪を三つ編みおさげにした少女が出る。

「あ、あの…あ、暁美…ほ、ほむらです…その、ええと…どうか、よろしく、お願いします…」

「暁美さんは心臓の病気で入院してたけど先日良くなってこの見滝原中学校に通う事になりました。久しぶりの学校で色々戸惑うことも多いでしょう。身体も病み上がりで万全とは言えないから、みんな助けてあげてね」

口ごもった彼女の言葉を教師が引き継ぐようにこれからクラスメイトになる少年少女へ説明していく。人見知りをする性格でこのよくな事に慣れていなかった暁美ほむらは恥ずかしそうにもじもじとしていたが、そんな中三人の少女と目が合った。

一人は青髪の元気と人当たりが良さそうな少女。もう一人は教科書を立ててお菓子を食べながらこちらを見る赤髪の少女。そして…

「あっ…」

目が合ったただけなのにビックリしたように慌てて目を逸らす赤いリボンが特徴的な桃色髪の少女だ。何故か彼女の事が気になつてずっと見つめていたほむらだったが、話の済んだ教師より席に案内されてようやく我に返る。

取り留めのない話が終わり、すぐに休み時間となるが都会から来た転校生というのは珍しかったようでほむらの周りには人だかりが出来て人と会話が苦手だった彼女は目を回していた。

「あの、わ、私、その…」

「暁美さん」

とめどなく飛んでくる質問に思わず俯いていたその時、突然ほむらの名前を呼ばれる。顔を上げるとそこにいたのは先程目が合った桃色髪の少女。彼女は体調を崩しがちなほむらを保健室に案内するという名目の元、質問攻撃から助け出してくれた。

「その…ありがとうございます」

「ううん、いいんだよ！私、鹿目まどか！まどかって呼んでね」

「えっ!?えっと…」

戸惑うほむら。初対面なのにそんなに馴れ馴れしくいってもいいものかと悩んでいたが…

「わ、わかりました…ま、まま…まどか、さん」

「あは、あははっ！さんはいいよお！私もほむらちゃんって呼んでもいいよ。」

「も、もちろんですっ！はい！」

「よかったあ…ねえ、ほむらちゃん！私と友達に…」



……  
……

「おおい、転校生！まどか！」

「えっと…美樹…さん？」

「何で疑問形なんだよ！さっき言ったでしょ？あたしもまどかみたいにさ・や・かって呼んでくれてもいいんだよって！」

「ははっ、コイツはバカさやかだからバカでいいよ。アタシは佐倉杏子、アンタとはなんか上手くやってけそうな気が…」

「はあ!?杏子!?誰がバカだっけ!?あんたが一度でもテストの点数で勝ってた事あった!?!」

「うわくそうやって何でもかんでもテストを持ち出すところがバカ丸出しだよ…あんなの社会に出たらクソの役にも立たねーってのにな」

「け、喧嘩はダメですよ！」

「ふふっ、大丈夫！こう見えて仲がいいんだよ？」

「喧嘩するほど仲がいいって事…？」

「誰がこいつと!?!」

……  
……  
……

「鹿目さくくん！ちょうど新作ケーキが出来たの！良ければ…あら？」

「あつ…えつと…わ、私向こうに行き…」

「ま、マミさん！この子はほむらちゃんって言っただけの大切な友達なの！だから、あの…」

「…ウフフ、じゃああなたのぶんのケーキも用意するわね。そうだ！せっかくだし美樹さんと佐倉さんも呼んでお茶会しましょう！」

「マミさん！ありがとうございます!!」

「え…あ…いいいんですか…!?!」

「もちろん！私もあなたとお友達になりたいわ。その…あなたさえ良ければ…だけど…」

「ぜ、ぜひ！暁美ほむらです！よろしくお願いします！」

「巴マミ、3年生よ。よろしくね、暁美さん！」

……

……

…

鹿目まどか、暁美ほむら、美樹さやか、巴マミ、佐倉杏子。彼女達は再編した世界で普通の少女として暮らしていた。それをしたのは願いの力を使ったカービィ。それと…

“全部終わったよカービィ…ふう…人類が発展する前の時代から歴史を書き換えていったから流石の僕も疲れたよ”

耳から生えた手で額を拭うのはキュウベえ。どういう理屈か、いつ

もの整った毛並みではなくボサボサでボロボロのぬいぐるみのようになっている事から本当に疲れている事が窺える。

『よしーこれでまどかとの約束もバッチリだー！はい、じゃあこれ！』

そんな彼にカービーが何気なく吐き出したのは鹿目まどかの力だ。それにより神にも等しき聖なる力を身につけていたカービーは元のピンク玉の姿に戻ってしまふ。まどかの力は星の形となってカービーの周りをくるくると回っていた。

“本当にいいのかい？こう言ってはなんだけど…少し不用心すぎるんじゃないか？”

『ん？キュウベえはなんか悪い事するの？』

“いや、しないけど…”

『それより早く取らないと消えちゃうよ？』

“わっ！わわっ…それを早く言ってくれ！”

星の形をしたまどかの力はぴよんぴよんと跳ねていたが、消えかけていて消滅一歩手前だ。思わず叫んだキュウベえは慌てて追いかけてキャッチし、ふうと一息ついていた。そんな彼を見てカービー疑問に思った事があるようでそれを口にする。

『この前、感情がないなんて言ってたけどさ…絶対あるよね？なんか前とちよつと違うよ？』

“…君もそう思うかい？はあああ…あの時の戦いからなんか変なんだよ。やつぱりこれがそうなのかな”

『あははーでも、とつてもいい感じだよ。前のロボみたいな君と比べたら何億倍もねっ』

悪意のないカービーの言葉にムスツとした顔を見せるキュウベえ。

彼はまどかの力をひとまずソウルジエムに移した彼は地球にいる皆を映し出したホログラムを消すとカービィに向き直る。

“……………ともかく君の要望通りにいい感じに歴史はやり直したよ。それとは関係ないママの事故や杏子の家庭事情、それと不本意だけどほむらの病気に關しても幸せに暮らせるように多少サービスを入れておいた。まあ僕からの謝罪という意味を込めて受け取ってくれ”

『おおー！なんかよく知らないけどありがとう！』

“ありがとう、か…なんだかむず痒いね。本当に感情なんてものは無駄でしかない事がよくわかるよ”

『じゃあ次は楽しい！と美味しい！を知ろうよ！』

“君が言ってた奴だね…まあ、それは実のところ興味がないわけでもない”

『じゃあ行こー！ちょうど皆でケーキ食べるって言ってたし、口移しでも半分こでもいいから分けてもらおうよ!!』

“ちよ、ちよつと待って！今の彼女達は君や僕の事は覚えて…あ、あ…あああああああああああ!!!”

ワープスターを呼んだカービィはキュウベえの首根つこを掴んでそのまま地球へ向かう。行き先は…そう、ケーキの匂いと皆がいるあの…